

江南村文化財調査報告 第4集

# 姥ヶ沢遺跡 I

(姥ヶ沢遺跡 第Ⅲ地点)

1983

埼玉県大里郡江南村教育委員会

## 序

緑と清流の自然環境に恵まれた江南村は、県指定文化財である塩古墳群を始め、踊る埴輪の出土した野原古墳群、観現坂遺跡、岩比田遺跡等数多くの遺跡があります。

今回、大字千代字姥ヶ沢地区で土採取計画が明らかになった為、業者の協力を得て、村教育委員会では県文化財保護課に連絡、その指導を受けながら、県環境部、熊谷土木事務所、県文化財保護課、事業者等協議し、本教育委員会が調査を受託し、地元関係者のご協力を得ながら発掘調査を行った。

調査の結果遺構と数多くの出土品を発掘することが出来た。これ等の遺跡や出土品は、祖先が残してくれた貴重な資料であり、生活の推移を物語る極めて価値ある文化遺産であります。これら先人の築いた偉大な文化遺産が、地域社会のために大いに活用されることをご期待申し上げます。

この発掘調査にあたり、ご多忙中にもかかわらず、ご指導ご協力下さいました県文化財保護課の先生を始め、関係者の方々に心から感謝申し上げます。

昭和 58 年 3 月

大里郡江南村教育委員会

教育長 小 島 孫 一

# 例 言

1. 本書は埼玉県大里郡江南村大字千代字姥ヶ沢1057—5番地に所在する姥ヶ沢（うばがさわ）遺跡—埼玉県遺跡地名表№.65—1—における第Ⅰ次発掘調査の報告書である。
2. 調査は、(株)サンワ代表取締役役国松久平氏より委託を受け江南村教育委員会が実施した。  
試掘調査期間 昭和56年12月5日～11日  
発掘調査期間 昭和57年1月7日～21日
3. 発掘調査は新井端（江南教育委員会）が担当した。文化庁長官の発掘調査通知の受理番号は昭和57年3月5日付、57委保記第2—188号である。
4. 遺構実測図は1/100、1/40である。遺物実測図は $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{3}$ である。
5. 本書の執筆、編集は新井が行った。
6. 発掘調査より報告書作成まで下記の方々関係機関に御指導、御協力をいただいた。記して感謝をいたします。  
梅沢太久夫 石岡憲雄 金子真土 植木 弘 坂木和俊 関口和男 岡本範之 埼玉県立歴史資料館 埼玉県教育局文化財保護課
7. 調査の組織  
調査主体者 江南村教育委員会 教育長 小島孫一  
事務局 江南村教育委員会 次長 高橋 正  
岡田恒雄  
鹿庭栄子  
野沢昌司  
調査担当者 新井 端  
調査参加者  
新井 さと 新井 豊次郎 新井 秀子 岩間 芳江 奥野 禄三郎 反町 えき  
反町 源三 反町 浩子  
整理参加者  
伊藤 公成 内間 靖 石垣松五郎 神谷 君子 清水 久子
8. 本遺跡より出土した遺物のすべては、本村教育委員会が保管している。

# 目 次

1983 姥ヶ沢遺跡 I

序

例言

## 第 I 章 調査の概要

- 第 1 節 調査にいたるまでの経過…………… 1
- 第 2 節 調査の方法と遺跡の概要…………… 2

## 第 II 章 遺跡をとりまく環境

- 第 1 節 遺跡の位置と地理的環境…………… 4
- 第 2 節 歴史的環境…………… 6

## 第 III 章 遺 構

- 第 1 節 古墳跡…………… 9
- 第 2 節 住居跡…………… 10

## 第 IV 章 遺 物

- 第 1 節 古墳跡出土遺物…………… 12
- 第 2 節 住居跡出土遺物…………… 12
- 第 3 節 一括遺物
  - 埴輪…………… 16
  - 縄文土器…………… 23
  - 石器…………… 37
  - 古銭…………… 40

## 第 V 章 (参考) 姥ヶ沢埴輪窯跡群 …… 42

## 第 VI 章 結 語

- 小 結…………… 43
- 随想 森を守るひと…………… 49

図 版

## 図 版 目 次

- 図版 1 調査区遠望
- 図版 2 遺跡遠望 調査区全景
- 図版 3 遺跡現状 1982.1
- 図版 4 確認状態 調査風景
- 図版 5 第 3 号墳全景
- 図版 6 第 3 号墳全景
- 図版 7 第 3 号墳周溝遺物出土状態
- 図版 8 第 1 号住居跡
- 図版 9 第 1 号住居跡第 3 号墳出土遺物
- 図版 10 第 3 号墳出土土器 伝姥ヶ沢遺跡出土土器
- 図版 11 姥ヶ沢第 1 号墳表採埴輪
- 図版 12 姥ヶ沢遺跡出土埴輪
- 図版 13 姥ヶ沢遺跡出土埴輪
- 図版 14 姥ヶ沢遺跡出土埴輪
- 図版 15 姥ヶ沢遺跡出土縄文土器
- 図版 16 姥ヶ沢遺跡出土縄文土器
- 図版 17 姥ヶ沢第Ⅱ地点出土縄文土器 姥ヶ沢遺跡出土石器
- 図版 18 姥ヶ沢遺跡出土石器

## 挿 図 目 次

第1図	姥ヶ沢遺跡トレンチ配置図	3
第2図	地形断面概念図	4
第3図	江南山林分布図一（折込）	4・5
第4図	地質柱状図	5
第5図	古墳時代の遺跡分布図一（折込）	6・7
第6図	調査区全測図一（折込）	8・9
第7図	姥ヶ沢遺跡周辺地形図	9
第8図	第3号墳周溝土層断面図	10
第9図	第1号住居跡実測図	11
第10図	第3号墳周溝出土の弥生式土器	13
第11図	第3号墳周溝・第1号住居跡出土遺物	14
第12図	姥ヶ沢第1号墳採取遺物	14
第13図	第1号住居跡遺物出土状態	15
第14図	勾玉計測図	16
第15図	凸帯分類図	17
第16図	姥ヶ沢遺跡出土埴輪（ $\frac{1}{3}$ ）	20
第17図	姥ヶ沢遺跡出土埴輪（ $\frac{1}{3}$ ）	21
第18図	姥ヶ沢遺跡出土埴輪（ $\frac{1}{3}$ ）	22
第19図	姥ヶ沢第1号埴輪窯跡出土埴輪（ $\frac{1}{2}$ ）	23
第20図	姥ヶ沢遺跡出土縄文土器	24
第21図	姥ヶ沢遺跡出土縄文土器（ $\frac{1}{2}$ ）	26
第22図	姥ヶ沢遺跡1980年試掘調査出土縄文土器（ $\frac{1}{2}$ ）	26
第23図	姥ヶ沢遺跡出土縄文土器（ $\frac{1}{3}$ ）	28
第24図	姥ヶ沢遺跡出土石器実測図（ $\frac{1}{3}$ ）	38
第25図	姥ヶ沢遺跡出土石器実測図（ $\frac{1}{3}$ ）	39
第26図	姥ヶ沢遺跡出土石器実測図（ $\frac{1}{3}$ ）	40
第27図	姥ヶ沢遺跡表採遺物（ $\frac{1}{1}$ ）	40
第28図	姥ヶ沢第1号埴輪窯跡スケッチ	42
第29図	弥生時代鉢形土器集成図	44・45
第30図	埼玉県の暖温帯林地区分	51

# 表 目 次

第1表 姥ヶ沢遺跡出土埴輪観察表	17
第2表 姥ヶ沢遺跡出土縄文土器観察表	29
第3表 姥ヶ沢遺跡出土石器一覧表	41



調 査 風 景

## 第 I 章 調査の概要

### 第1節 調査に至るまでの経過

姥ヶ沢遺跡において土採取の計画が明らかにされたのは昭和55年10月であった。本遺跡内（第 I 地点）、及び周辺での土採取は以前より散発的に行なわれており、工事中に遺物・遺構の検出がたびたびであったが、どの場合も調査に至ることはなかった。そんな状況にあった中で当然、村当局及び担当係を持つ村教育委員会は、何らかの対応をとらねばならなかった。今度の土採取に際しては、村教育委員会に埋蔵文化財包蔵地の所在確認とその取り扱いについて文書による紹介がなされた。当時教育委員会には文化財担当の専門技術者がおらず、県文化財保護課を通じ、埼玉県立歴史資料館へ現地調査を委嘱した。確認調査の結果、土採取範囲（第 II 地点）には、古墳 1 基が現存しており、平坦部の北半には住居跡の存在が確認された。当該部分を保存するにしても工事後十数mの断崖になってしまうため、自然崩壊を予想することは容易であり、擁壁等を含めた十分な保存対策を採るか、記録保存のための発掘調査を採るかという対応の必要性を確認させるに停まり、その後の具体的な指導を欠いてしまい、情報の交換も断れてしまった。ために、工事は実施され、遺跡（第 II 地点）はほとんど消滅してしまった。この事実が判明したのは 7 カ月後の翌56年 5 月中旬であった。村教育委員会は、県文化財保護課と連絡し、事後の処置を協議した。5 月末日、現地確認のため県環境部、熊谷土木事務所、県文化財保護課、事業者、村教育委員会が集まった。事業者には今後の注意と共に始末書の提出を求め、村教育委員会より頑末書を提出することになった。しかし、約10mの崖上に削り残された古墳は崩落を待っており、早急な対策が必要だが、なお未解決の問題として今に残っている。さらに、古墳部分は危険地区になってしまい、事実上調査は難しい状態にある。

昭和56年11月に入り、新たに姥ヶ沢遺跡内での土採取計画が教育委員会に連絡された（第 III 地点）事業者は先の事業者と同一であり、工事計画範囲は先の工事域の東側延長部分であり、遺跡の存在は確実であった。事業者との話し合いを持ち、以下①～③の点につき協議し、事業者の合意を得て④～⑥の実施策を採ることにした。

- ① 工事部分は遺跡に当るため原則として土木工事は断念して欲しい。
- ② 工事変更が不可能な場合、工事前に遺跡の記録保存を行う。
- ③ 記録保存に係わる経費は事業者の負担とする。

- 
- ④ 工事前に遺跡の確認調査を行う。
  - ⑤ 確認調査において遺跡が確認された場合記録保存調査を行う。
  - ⑥ 確認調査、記録保存調査に係わる経費は事業者の負担とする、調査は教育委員会の委託事業として行う。

上記の合意事項にもとづいて、同年12月5日から12月11日まで確認調査を行った。調査区は土採取区全域を対象とした。面積は 4,665 m<sup>2</sup> である。調査区は松林であったが、調査前に伐採され、伐根も終了していたので、所々にロームが見えており、かなり深いカク乱が窺えた。調査区は台地部一

A区と斜面部—B区であり、A区には集落が、B区には埴輪窯跡が予想された。A区は幅1mのトレンチを8本設定した。その結果住居跡1軒、古墳跡2カ所が検出された。覆土からは縄文土器、石器、埴輪片が出土した。B区は、斜面中位、下位をボーリング探査したが窯跡は検出されなかった。（調査後、工事中に確認した時も窯跡は検出されなかった。）

確認調査の結果は上記のとおりであった。確認調査を終了した時点で、再度事業者と話し合いを持ち、台地部（A区）の確認部分1,000㎡の記録保存調査を行うことに決定し、昭和56年12月18日に委託契約を結んだ。こうして文化財保護法第57条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘届と、同法第98条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査通知を文化庁長官あて提出した。発掘調査は翌昭和57年1月7日より行なわれた。試掘時に検出された住居跡と古墳跡部分を中心に覆土を除去し、遺構を明らかにした（2区）。別の古墳跡は高さ十数mの崖際であり、崩壊の危れがあったので調査を断念した（1区）。調査は同年1月21日に終了した。

発掘調査終了後、整理作業を続け、10月には報告書刊行の準備を整えることができた。塩前遺跡の報告書刊行、野原久保遺跡の発掘調査など、いくつも事業が重った中で報告書の刊行まで力づよ協力者となって下った方々に厚く感謝いたします。（事務局）

## 第2節 調査の方法と遺跡の概要（第1図）

調査区（第Ⅲ地点）は江南台地上と、その段丘斜面である。海拔高度は63～64mであり、下位の水田と比高は9～10mを測る。調査前の遺跡の現状は、西側が高さ10m程の崖となっており、断面に遺構の覆土と思われる黒色土の落ち込みが観察された。この部分以西は、第1号墳を削り残して未調査のまま消滅している。

台地上は松と笹の茂る林であったが、既に下刈り、松の伐採、及び抜根が行なわれてしまったため、表土がめくれ、処々にローム塊が露出していた。遺物は縄文土器、石器、埴輪等で台地全面に散布していた。古墳跡、住居跡等の埋没が予想された。調査の方法としては、トレンチによる遺構の確認を行い、当該部分を拡幅、精査することにした。トレンチは、東西方向に幅1m、間隔3mに8本設定した。その結果、古墳跡2カ所、住居跡1軒が確認された。調査においては、台地上をA区とし、さらに、この遺構部分の位置によりA—1区とA—2区に分けた。

段丘斜面は雑木林であったが、立木が切り払われていただけで、地形に改変は加えられていなかった。ここをB区とした。この段丘斜面部の西側延長部分には、既に消滅した埴輪窯址が存在したため、今回の調査部分にも当然、窯跡の存在が予想された。そのため、検土杖により等高線に沿ってボーリング探査を行ったが、窯跡の存在を確認できなかった。

測量に関しては、業者が土採取計画時に基準としたポイントを利用した。

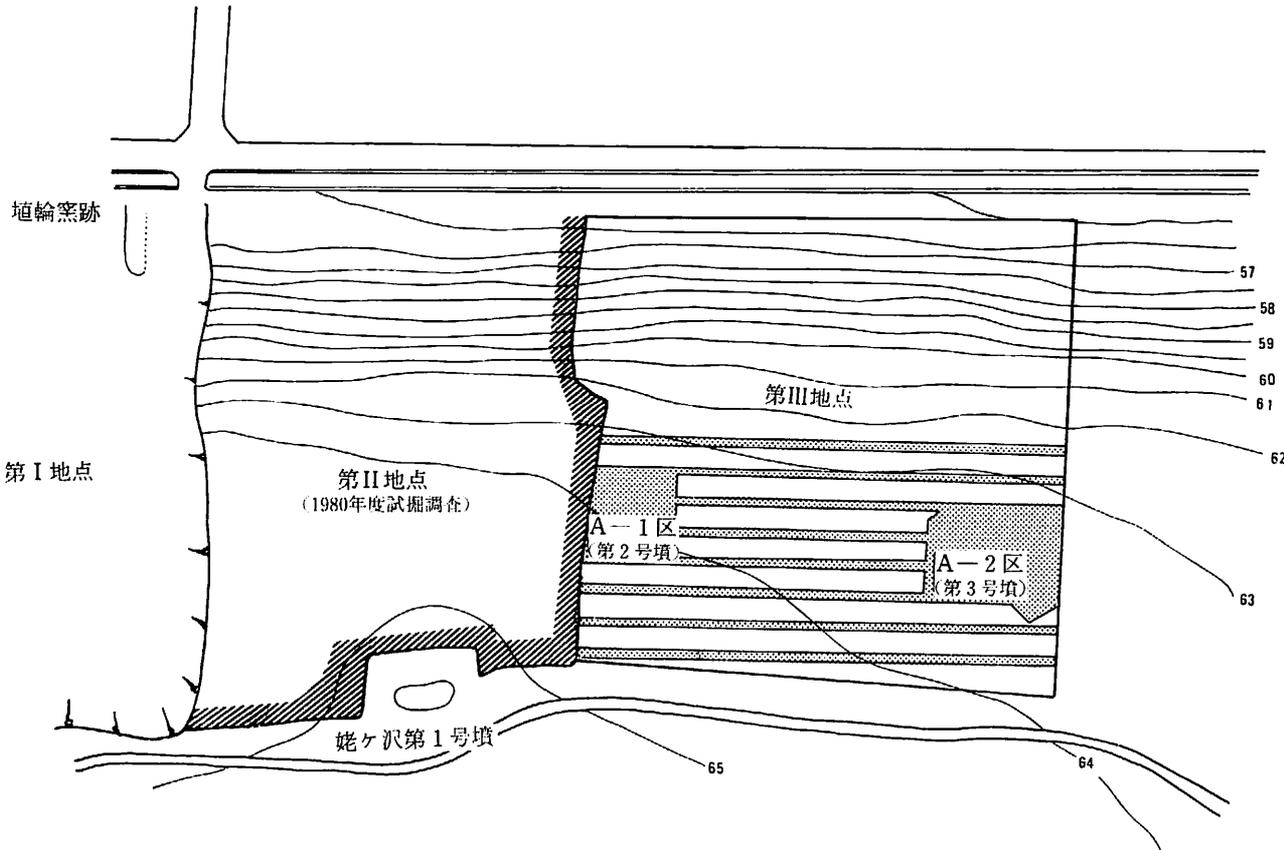
### 検出された遺構・遺物（姥ヶ沢遺跡第Ⅲ地点）

#### ○A区（台地上）

A—1区 古墳跡—1（第2号墳）

A—2区 古墳跡—1（第3号墳）弥生時代後期の住居跡—1・縄文時代の土器と石器、弥生時代後期の土器・埴輪

○B区（段丘斜面）無し



第1図 姥ヶ沢遺跡トレンチ配置図 (1/1000)

## 第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

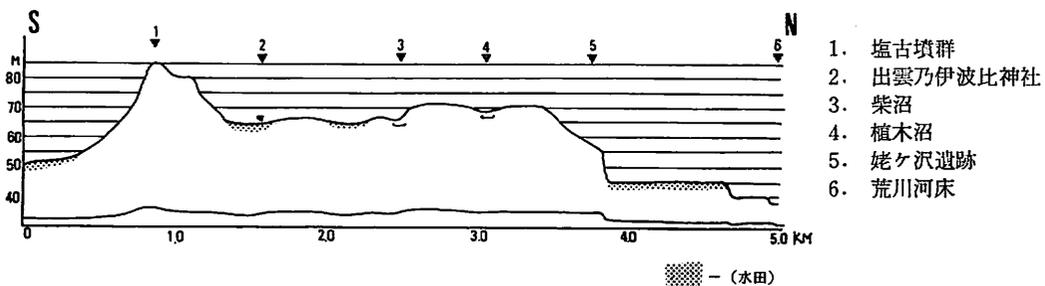
熊谷市より西へ向い、荒川にかかる熊谷大橋を渡り、県道富田熊谷線に入る。沖積地帯の中を、左手に江南台地斜面を望みながら進むと、やがて周囲は水田地帯より畑地帯に変わる。この付近を上新田地域といい、千代地域とは台地で分けられる。姥ヶ沢遺跡はこの台地上に立地する。さらにこの道を進むと、代表的な後期群集墳のひとつ鹿島古墳群に着く。交通はここを通るバス路線がある。

江南村の土地は、南から比企丘陵、江南台地、沖積低地と経て荒川に至る。それぞれの区分は和田川と吉野川によって区分され、南から北へかけて高度を減じる。第2図は、本遺跡を通る南北線で切った地形断面の概略図であるが、これらの地形区分が明瞭になっている。本遺跡の立地する江南台地は、起伏の少ない平坦な土地で、厚層な礫層上に粘土化した下末吉ローム層と、立川ローム層に被覆されている。旧石器時代以降、各時代の遺跡が濃密に分布している。

本遺跡はこの江南台地の北縁に位置している。行政的にも川本町との境界部分に位置し、遺跡の3分の1は川本町側に入る。ここに立って北を向くと、台地より約10m降った江南村上新田、川本町平方、台地区の下位段丘が<sup>註2</sup>大きく広がり、約1km進んで荒川に至る。さらに荒川の左岸、熊谷市三ヶ尻に頭をもたげた標高77.4mの観音山を望むことができる。

台地の北縁部は、同じ江南台地が吉野川の開析により残丘となった川本町舟山付近より、ほぼN-106°-Eの方向に、直線的に延びる崖線を見ることができる。この崖面には、台地上より流れ出した流水により、いくつもの小谷津が発達している。本遺跡の東側にも地名の賦与された小谷津があり、三角沼が構築されている。現在、沼の用途は用水路の整備により少なくなってしまい、湯水時の用水として用いられている。かつては、上新田地区の用水として重要であったという。西側は川本町に入るが、上ノ山の集落に入る小さな谷津があり遺跡の範囲を画している。

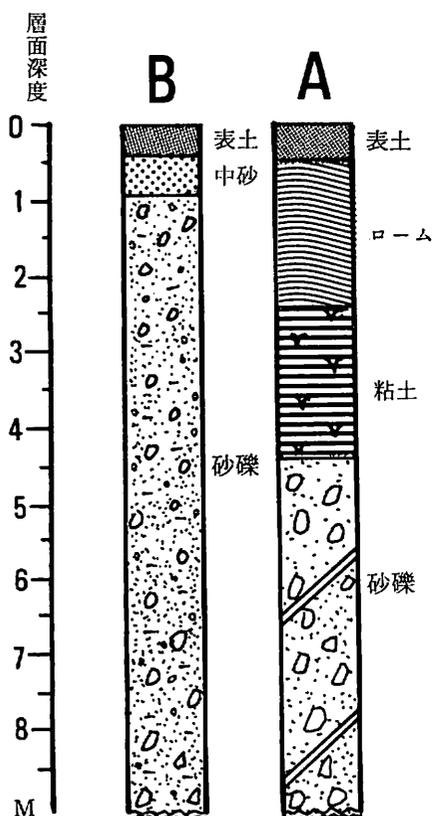
遺跡は台地上にあり、現在は桑畑、山林として活用されている。植林された木々は松、杉で25~30年生である。第2次世界大戦中、開墾し畑地としたということであった。今回調査において検出された古墳跡は、この時に完全に墳丘を削平されたらしい。また付近より出土したという土器も一部



第2図 地形断面概念図



第3図 江南・山林分布図(1982年)



第4図 地質柱状図

に知られている。宅地はほとんど無い。この土地を  
<sup>註1</sup>  
 用益する人々は、台地下に集落を構成している。家  
 々の北面には季節風を遮るためか屋敷森が良く残  
 る。今回の発掘調査は冬2月であり、台地上に吹き  
 上る北風は強く、ここの生活はあまり適さないの  
 かもしれない。台地上に検出された住居跡は弥生時  
 代後期の所産であり、後続する時代の住居跡は検  
 出されなかった。調査は遺跡の一部分であるため、  
 おそらく、これだけではあるまい。そして、やや時  
 代を降り古墳時代後半には、古墳の造営される奥  
 津城として、また、埴輪の生産場として活用され  
 ている。彼らの住んだ集落が台地上方に存在する  
 のか、これからの調査課題である。上新田、平方  
 地区には古墳・奈良・平安時代の集落が存在して  
 いる。鹿島古墳群を造営した集団の居住したム  
 ラだろうか、本遺跡で埴輪を造った人々との関  
 係はあったのだろうか、興味の尽きないところ  
 である。

註1 本土器は、現在、深谷市に所在する。

註2 下位段丘は、従来ローム層に被覆されてい  
 なかった。最近、水道・道路工事に伴い、表  
 土、砂礫層の下にローム層の存在している部分  
 があることが確認されている。

- 註46 註43、註45に同 田部井功、他 1978 『楊玉薬師寺古墳』 熊谷市教育委員会 貞末堯司 1973  
 「熊谷市瀬戸山遺跡の調査」 第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨
- 註47 菅谷浩之 他 1974 「熊谷市万吉下原遺跡の調査概要」 第7回遺跡発掘調査報告会発表要旨
- 註48 註15に同
- 註49 註39に同 塩野博 他 1975 『埼玉県花園村黒田古墳群』 黒田古墳群発掘調査会
- 註50 金井塚良一 1979 「比企地方の前方後円墳一北武蔵の前方後円墳の研究(1)」 『埼玉県立歴史資料館  
 研究紀要』 第1号
- 註51 金井塚良一 1975 「比企地方の古墳群の形成」 『古代東国史の研究』 所収
- 註52 註51に同 金井塚良一 1972 「北武蔵の古墳群と渡来系氏族一吉志氏の動向」 『古代東国史の研究』  
 所収
- 註53 遺跡名は権現坂が正しい。小沢国平 1964 「江南・権現山埴輪窯址」 『台地研究』 No.14
- 註54 山崎武 他 1981 『生出塚遺跡』 鴻巣市遺跡調査会報告 第2集

立正大学古代文化研究会 1982 『考古』 特別号



第5図 古墳時代の遺跡分布図

- 4 姥ヶ沢遺跡
- 6 本田・東台遺跡
- 8 春日丘遺跡
- 14 塩西遺跡
- 15 塩前遺跡
- 19 切久保遺跡
- 31 宮脇遺跡
- 32 久保遺跡
- 42 鹿島古墳群
- 43 川本No.19遺跡
- 44 平方前古墳群
- 47 上新田遺跡
- 48 権現坂埴輪窯跡
- 49 千代古墳群
- 50 宮下遺跡
- 51 結城塚古墳群
- 52 桜山遺跡
- 53 金山遺跡
- 54 立野古墳群
- 55 藤塚古墳
- 56 神山古墳群
- 57 二ツ塚古墳
- 58 尾根古墳群
- 59 陣屋古墳群
- 60 塩古墳群
- 62 滑川No.56遺跡
- 63 滑川No.58遺跡
- 64 釜場古墳群
- 65 山中遺跡
- 66 高根横穴墓群
- 67 石橋山遺跡
- 68 小江川古墳群
- 69 宝光寺北裏遺跡
- 70 行人塚古墳群
- 71 堂ヶ島古墳群
- 72 野原古墳群
- 73 円照寺古墳群
- 74 滑川No.6遺跡
- 75 天神山横穴墓群
- 76 下原古墳群
- 77 瀬戸山古墳群
- 78 三千塚古墳群
- 80 大原遺跡
- 81 宿遺跡
- 82 宮前遺跡
- 83 静簡院古墳群
- 84 滑川No.90遺跡
- 85 滑川No.37遺跡
- 86 滑川No.38遺跡
- 87 滑川No.89遺跡
- 88 滑川No.3・4遺跡
- 89 滑川No.10~13遺跡
- 90 熊谷No.100遺跡
- 91 熊野遺跡
- 92 荒神脇遺跡
- 93 下新田遺跡
- 94 丸山浦遺跡
- 95 丸山遺跡
- 96 熊谷No.108遺跡
- 97 東松山No.224遺跡
- 98 東松山No.223遺跡
- 99 滑川No.71~85遺跡
- 100 東松山No.219遺跡
- 101 宮塚古墳群
- 102 広瀬古墳群

## 第2節 歴史的環境

姥ヶ沢遺跡は、大字千代字姥ヶ沢に所在する。地名の起りは未詳であるが、この字名「千代」は(せんだい)と読まれ、その名は天正20年(1592)の徳川家奉行連署知行書立写到「せんたいの郷」と記されている。また文禄4年(1595)の検地帳には「武州男衾之郡千代村」と記されている。(写真参照)



遺跡の占地する江南台地には、旧石器時代以来、各時期の遺跡が豊富に存在しており、この地方における考古学的環境をつくり出している。旧石器時代の遺跡としては、今まで調査例がなかったが、先年、江南台地上に位置する寄居町大字今市所在の稲荷窪遺跡でエンドスクレイパー等が検出された。その出土層位は立川ローム層下位とされている。また、同町大字赤浜所在の牛無具利遺跡では、ブロック、炭化物集中が確認されている。本遺跡以外にも江南村域では遺物の表採された場所がいくつか知られているだけで調査知見はない。

縄文時代では早期の燃糸文土器を出土した江南村塩前遺跡、荒神脇遺跡、川本町舟山遺跡の他に、江南村板井、氷川遺跡、萩山南遺跡、宝光寺北裏遺跡などの散布地がある。早期末、前期、中期の遺跡は前述の遺跡と重複する遺跡の他、寄居町甘粕原遺跡、ゴシン遺跡、露梨子遺跡、上郷西遺跡、江南村東原遺跡などがあった。各遺跡で検出された住居跡は、甘粕原遺跡では黒浜期2軒・諸磯期1軒が、ゴシン遺跡では黒浜期1軒・諸磯期3軒が、露梨子遺跡では加曾利EⅣ期1軒が、上郷西遺跡では諸磯期3軒・後期の柄鏡形住居1軒が発見されている。東原遺跡は加曾利E期の大集落であった。以上が荒川右岸、江南台地上に発見された遺跡である。

周辺の丘陵地・立川面とされる台地下位の段丘上及び荒川左岸地域では、寄居町南大塚遺跡北塚屋遺跡、熊谷市万吉西浦遺跡、三ヶ尻林遺跡、花園村台耕地遺跡、上南原遺跡に早、前、中期の遺跡が発見されている。後、晩期の遺跡は少なく、花園村橋屋遺跡、寄居町上郷西遺跡、北屋敷遺跡、東遺跡の他知られていない。

弥生時代に入ると荒川の沖積底地・台地上の谷筋が水稻耕作の基盤となり、ここを望む台地上、自然堤防上に集落が形成される。弥生時代中期の遺跡は荒川の左岸に散見される。これらの遺跡には、深谷市上敷面遺跡、寄居町用土平遺跡、熊谷市池上遺跡、三ヶ尻上古遺跡がある。三ヶ尻上古遺跡は、観音山の東方へ延びる荒川の段丘上に位置し、本遺跡より遠望できる。池上遺跡は環濠を持つ集落であることが判明している。上敷面遺跡では再葬墓が検出されている。後期の遺跡は、今のところ本地域では確認されておらず、集落の推移、構造について問題となろう。

丘陵部では谷津水田を望む台地上に、後期の集落が発見され縄文系、櫛描文系の土器が伴出して

いる。これらの遺跡には、滑川村屋田遺跡<sup>(註26)</sup>、大谷遺跡<sup>(註27)</sup>、船川遺跡<sup>(註28)</sup>、大里村船木遺跡<sup>(註29)</sup>、東松山市岩鼻遺跡<sup>(註30)</sup>、吉ヶ谷遺跡<sup>(註31)</sup>、雉子山遺跡<sup>(註32)</sup>などに集落が検出されている。他に同時期の遺物を出土した遺跡には吉見町八耕地遺跡<sup>(註33)</sup>、東松山市附川遺跡<sup>(註34)</sup>がある。弥生時代についての研究は土器論の面から進められており<sup>(註35)</sup>、その研究も深められなければならないが、今後低地のムラ、丘陵台地上のムラの構造、実態等の解明を待つ問題は多い。

古墳時代に入ると、把握される遺跡の数は急増する。そのほとんどは大小規模の古墳である。塩前遺跡、川本町鹿島遺跡<sup>(註36)</sup>のように集落に重複する古墳群なども知られる。第5図に標記される黒丸は古墳所在地である。この中で内部主体部まで調査の及んだ古墳は、江南村ではNo.72の野原古墳群<sup>(註37)</sup>の他数例である。周溝、古墳跡の調査例は荒神脇遺跡、塩前遺跡と本遺跡がある。周辺地域の調査例を例挙すると、川本町では、鹿島古墳群<sup>(註38)</sup>、見目古墳群<sup>(註39)</sup>、籍崎古墳群<sup>(註40)</sup>、塚原古墳群<sup>(註41)</sup>がある。熊谷市では上中条古墳群<sup>(註42)</sup>、広瀬古墳群<sup>(註43)</sup>、三ヶ尻古墳群<sup>(註44)</sup>、玉井古墳群<sup>(註45)</sup>、瀬戸山古墳群<sup>(註46)</sup>、万吉下原古墳群<sup>(註47)</sup>がある。花園村では小前田古墳群<sup>(註48)</sup>、黒田古墳群<sup>(註49)</sup>がある。大里村では丸山古墳群<sup>(註50)</sup>が、東松山市北部では三千塚古墳群<sup>(註51)</sup>がある。このように本地域の古墳群は、あるものは調査後消滅しているが、江南村にかかる調査例は少ない。しかし、このことは古墳の保存が良好で破壊数が少ないわけではなく、むしろ未知のうちに消された古墳は多いのかもしれない。本地域の古墳にとって保護対策は、これからの問題である。先の古墳群は6世紀中ごろより7世紀にかけて造営された後期群集墳がほとんどで、胴張を持つ横穴式石室を多く主体部に採用している<sup>(註52)</sup>。

これらの古墳群には埴輪を樹立する例があり、本地域に確認される埴輪生産跡は当然、供給圏、供給者の問題が顕かになる。本地域の埴輪生産跡は、荒川左岸の深谷市割山遺跡と右岸の江南村権現坂遺跡<sup>(註53)</sup>・姥ヶ沢遺跡に窯跡群が確認されている。権現坂と姥ヶ沢は1kmの近距離にあり同一群に含めて考えることもできる。この3つの生産跡だけで周辺の古墳群に供給できたとは考え難く、また割山遺跡、鴻巣市生出塚遺跡<sup>(註54)</sup>のように、他の県内埴輪生産跡と異り台地平坦面を選地している例もあり、これら古墳群周辺に埴輪生産跡の存在を想定することは可能である。一方、本地域には荒川の水系があり、その水運を利用した運搬を考慮すれば、供給圏は広範に及んだことも考えられる。今後、確認される生産跡出土の埴輪と供給地の古墳出土埴輪を比較検討し同一性を確認することが要求されよう。

註1 角川書店 1980 「角川日本地名大辞典 埼玉県」

註2 嶽本海承 他 1981 『武州男衾郡千代村御繩打水帳』 熊谷古文書研究会

註3 栗島義明 高木義和 1981 『稻荷窪遺跡』 寄居町文化財調査報告 第5集

註4 註3に同

註5 上野勝 城前喜英 宮田栄三 1978 「埼玉県大里郡江南村採集の先土器時代資料」 『いにしえ』 第2号 立正大学古代文化研究会

註6 梅沢太久夫 新井端 1982 『塩前遺跡発掘調査報告書』 江南村文化財調査報告 第3集

註7 中島利治 小林重義 野部徳秋 1974 『下新田遺跡・荒神脇遺跡・熊野遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告 第22集

註8 谷井彪 他 1980 『舟山遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査報告 第9集

註9 並木隆 中村倉司 1978 『甘粕原 ゴシン 露梨子遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告 第35集

- 註10 註9に同
- 註11 註9に同
- 註12 埼玉県 1980 『新編 埼玉県史』 資料編1
- 註13 周知の遺跡であったが、工場用地となり未調査のまま消滅。
- 註14 註12に同
- 註15 市川修 1980 「北塚屋遺跡の調査」 第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨
- 註16 寺社下博 1980 『万吉西浦遺跡』 熊谷市教育委員会
- 註17 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982 「年報1」
- 註18 鈴木敏昭 他 「台耕地遺跡の調査」 第12回遺跡発掘調査報告会発表要旨
- 註19 註12に同
- 註20 花園村 1970 『花園村史』
- 註21 梅沢太久夫 1973 『東遺跡』 寄居町文化財調査報告 第1集
- 註22 庄野靖寿 他 1978 『上敷免遺跡』 深谷市教育委員会
- 註23 埼玉県 1982 『新編 埼玉県史』 資料編2
- 註24 1978年以後継続して調査が行なわれ、弥生時代中期の住居跡、集落を囲む濠が検出された。1982年の調査で住居跡より炭化米が出土している。
- 註25 註23に同
- 註26 註23に同
- 註27 金井塚良一 1973 『大谷遺跡』 滑川村教育委員会
- 註28 註23に同
- 註29 佐藤忠雄 1974 「大里村船木遺跡の調査」 第7回遺跡発掘調査報告会発表要旨
- 註30 東松山市 1981 『東松山市史』 資料編 第1巻
- 註31 金井塚良一 1965 「埼玉県東松山市吉ヶ谷遺跡の調査」 『台地研究』 №16
- 註32 金井塚良一 他 1977 『東松山市雉子山遺跡第2次・第3次調査』 東松山市史編さん調査報告 第8集
- 註33 金井塚良一 1978 『吉見町史 上巻』
- 註34 今泉泰之 他 1974 『田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川』 埼玉県遺跡調査報告 第5集
- 註35 中島利治 1976 「比企地方の弥生式土器」 『北武蔵考古学資料図鑑』所収 柿沼幹夫 1981 「吉ヶ谷式土器について」 『土曜考古』 第5号 石岡憲雄 1982 「吉ヶ谷式」と「岩鼻式」土器について 『埼玉県立歴史資料館研究紀要』 第4号
- 註36 塩野博 他 1972 『鹿島古墳群』 埼玉県埋蔵文化財調査報告 第1集
- 註37 柳田敏司 1962 「おどる埴輪を出土した前方後円墳について」 『埼玉研究』 第6号  
坂詰秀一 久保常晴 野村幸希 1965 「埼玉県野原古墳群の調査—北武蔵における群集墳の一斑相について」 日本考古学協会 第31回総会研究発表要旨  
坂詰秀一 他 1969 「埼玉県大里郡野原古墳群」 『日本考古学年報』 17 亀井正道 1977 「甕る埴輪出土の古墳とその遺物」 『ミュージアム』 310号
- 註38 註36に同
- 註39 塩野博 1981 「見目古墳群とその出土遺物」 『埼玉考古』 第19号
- 註40 増田逸朗 1968 「川本村箱崎古墳群の報告」 第1回遺跡発掘調査報告会発表要旨
- 註41 塩野博 1981 「埼玉の古墳」 『埼玉の文化財』 第20号
- 註42 註41に同 構成墳の一つ鎧塚古墳が近年調査された。 寺社下博 1981 『鎧塚古墳』 熊谷市教育委員会
- 註43 本群中に国指定史跡である上円下方墳—宮塚古墳—がある。 1963 『熊谷市史』 前編
- 註44 小久保徹 1980 「三ヶ尻林遺跡の調査」 第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨
- 註45 埼玉県教育委員会 1973 『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧』
- (以下の註は、5 ページ下段へ続く)

# 第三章 遺 構

## 第1節 古 墳 跡

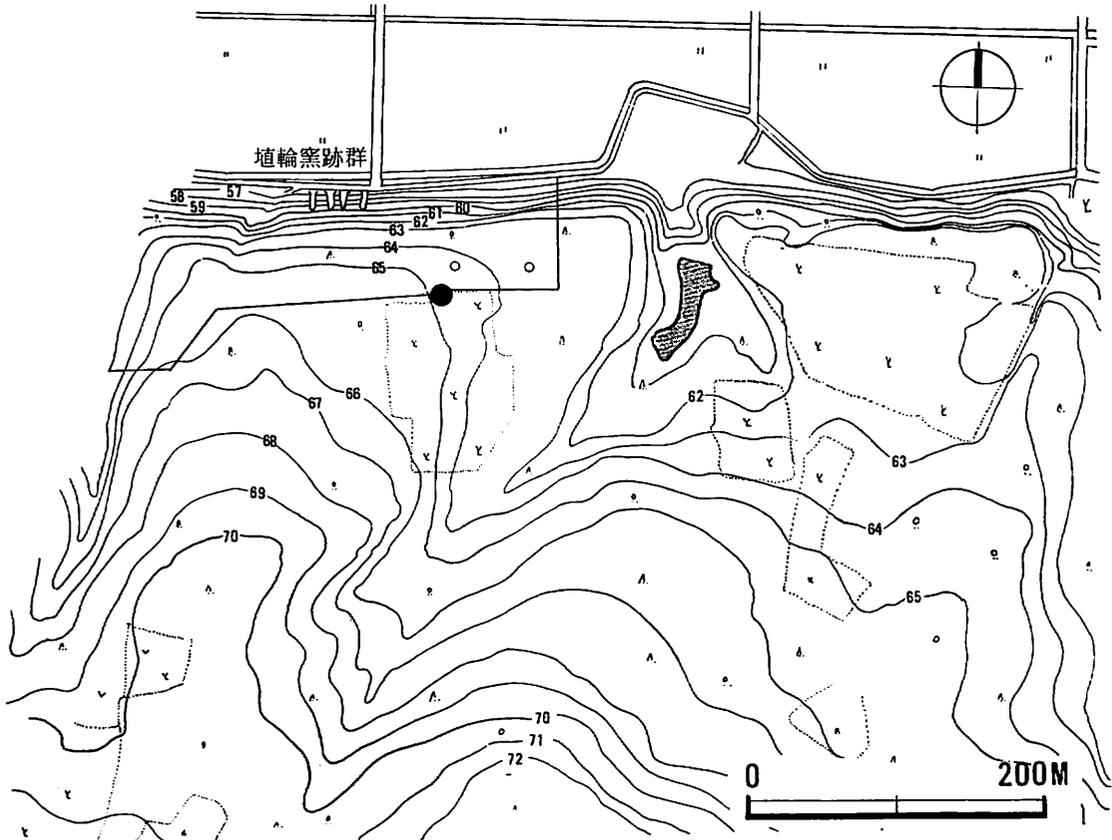
### 第1号墳 (第1・6図)

本古墳は墳丘の南側を除いて、周囲を削平され図版3に見るような姿を晒している。墳形は不明だが、現状では径12m程の円墳状を呈している。墳裾には周溝が巡り、崖断面の東西に一部分を露呈している。およその規模は、幅2m。深さ1mを測る。周溝、墳丘の断面からは多数の埴輪片が採取されており、埴輪を樹立していたことは間違いない。他の遺物では土師器坏がいっしょに採取されている。墳頂には盗掘坑が見え、緑泥片岩が露出している。

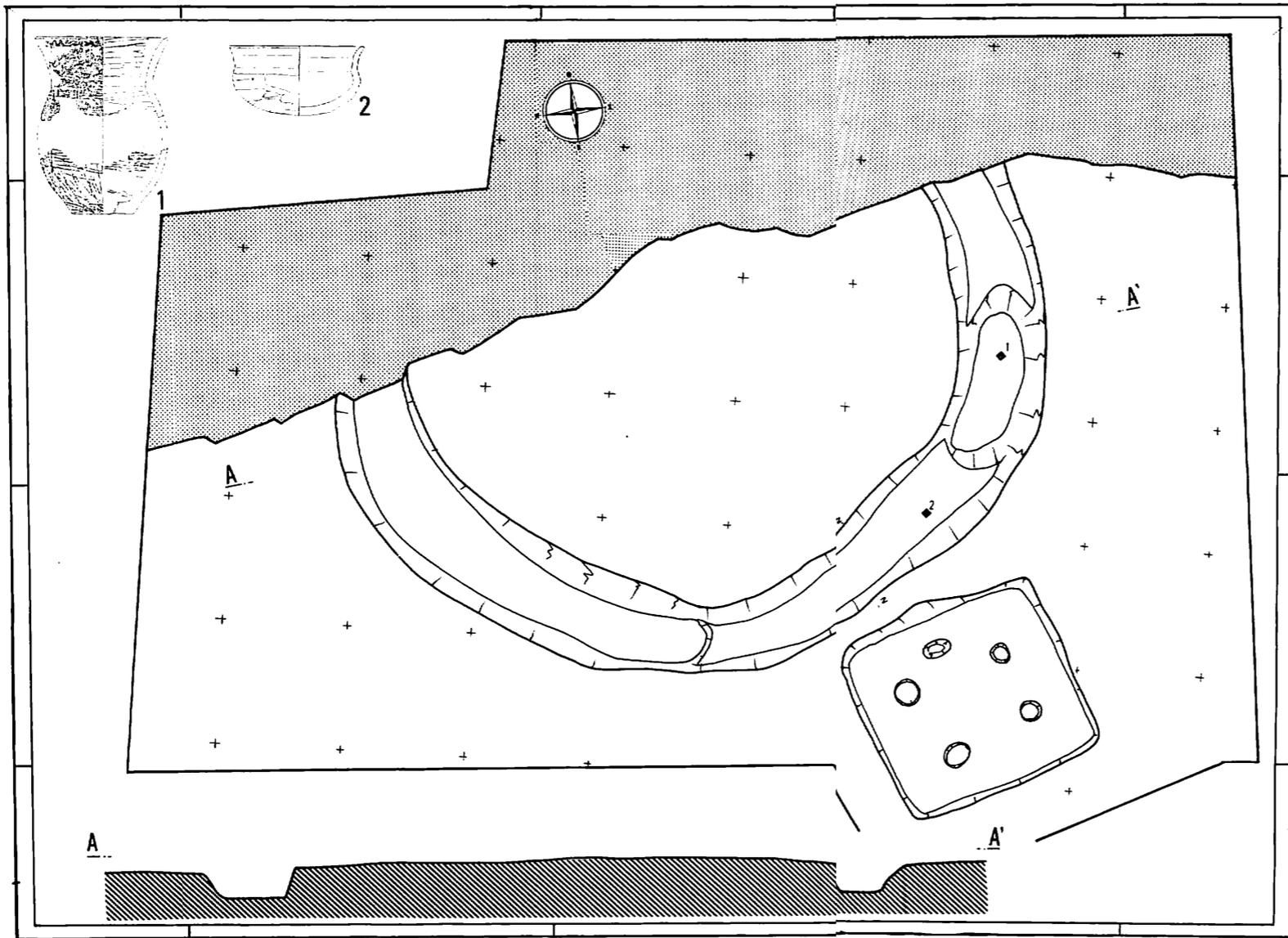
土師器坏 (第12図A) は $\frac{1}{4}$ 破片であった。体部との境に稜を有し、体部は浅い。焼成は良好で茶褐色をしている。

### 第2号墳

本古墳は崖断面に見えた黒色土の落ち込みを周溝と推定したが、はっきり古墳と確認されたわけではない。遺物は同墳のものか不明だが埴輪を樹立するようである。



第7図 姥ヶ沢遺跡周辺地形図 (1/5000)

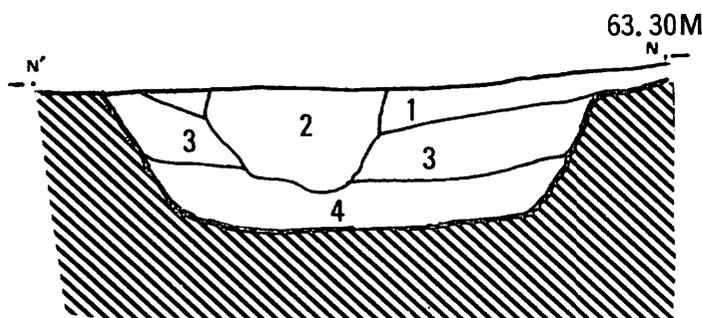


第6図 調査区全測図 (A-II区) (1/100)

### 第3号墳（第6・8図 図版5）

古墳の北半分は、抜根等による深いカク乱のため遺構はすべて破壊されていた。このカク乱土中には埴輪片を多数含んでいた。

墳形は遺存する周溝南半分の形態から、直径約9mを測る円墳と推定される。周溝断面は箱形を呈し、幅1.5m～1m、深さは東側で50cm、西側で45cmを測る。覆土は3層確認された。周溝底は南東部分で立ち上り、ブリッジ状を呈している。主体部は確認されていない。遺物は周溝底部より土師器杯、弥生時代の甕形土器が検出された。他に石器、埴輪片が出土している。残存する周溝部分からは、周溝内部、底部でも埴輪の基部はおろか破片さえ出土していない。本墳には埴輪を樹立していないと考えられる。



第8図 第3号墳周溝土層断面図

周溝土層断面説明

1. 漆黒色土、バサバサ粘性は少ない。粒子が細く、ローム粒子を少量含む
2. カク乱
3. ロームブロックを含む黒褐色土
4. ロームブロックを主体とする暗褐色土

## 第2節 住居跡

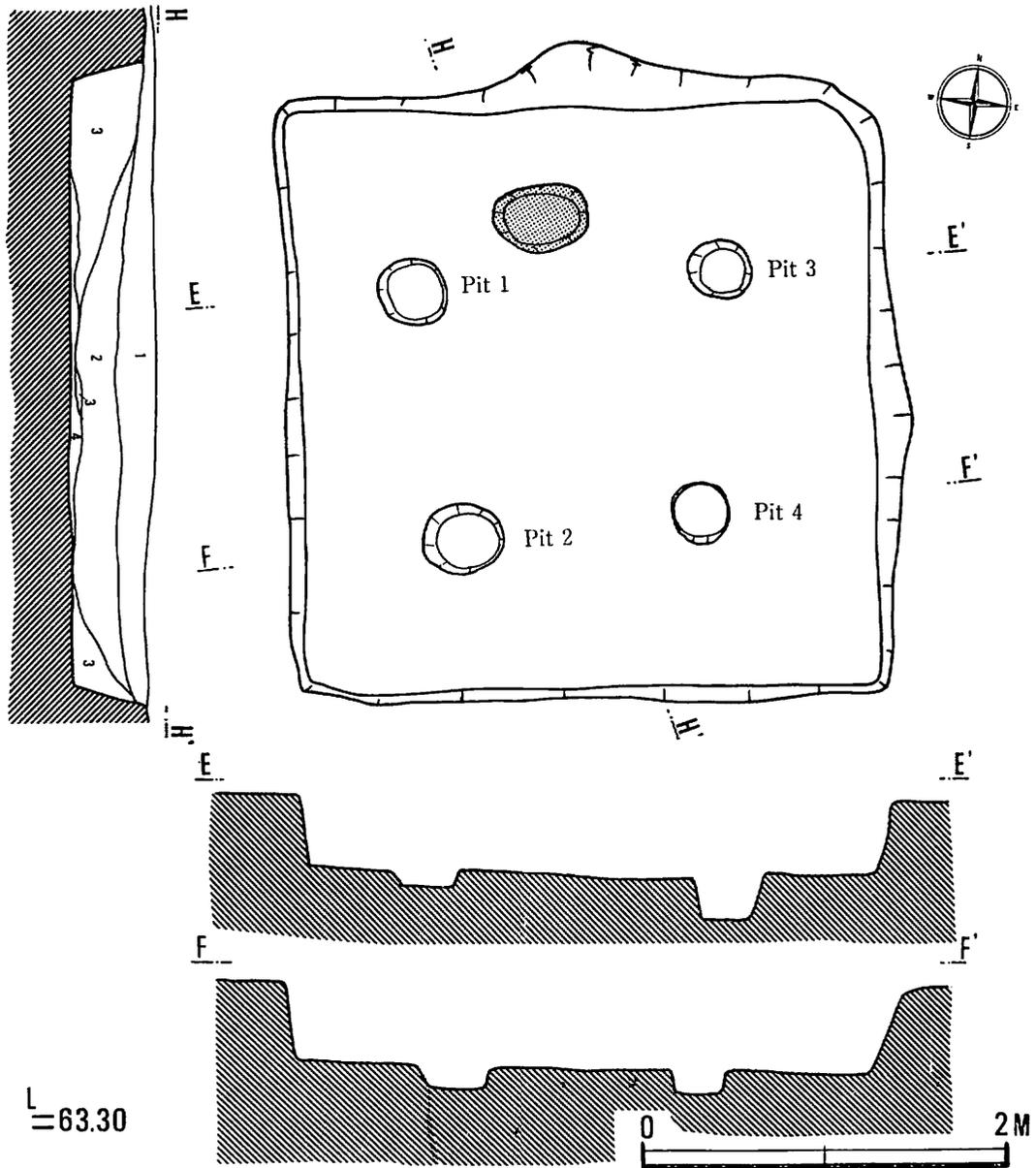
### 第1号住居跡（第6・9図 図版8）

調査区内で唯一発見された住居跡は弥生時代に属するものと考えられ、重複する遺構、カク乱等はなく保存状態は良好であった。規模は北壁3.30m、西壁3.25m、南壁3.25m、東壁3.30mを測る。各壁とも直線的で、ほぼ正方形を呈するやや小型の竪穴住居跡である。炉跡を通る主軸方向はN-10°-Wを示す。各コーナーは、比較的整った矩形を呈している。覆土は4層に分けられ、自然な堆積状態を示している。確認面からの掘込みは北壁40～46cm、西壁40～45cm、南壁38～42cm、東壁40～45cmと南壁側がやや浅い。壁は垂直に近い勾配で掘り込まれている。東壁はやや外側に張り出している。出入口部分に当るものか。北壁中央部分は大きく削出され、炉と対応しているように見える。炉と機能的な関係を有すのであろうか。

床面は、ローム土の直床で、ほぼ平坦、中央部分は硬く踏み締められている。柱穴は4カ所に検出された。各柱穴の直径は30～36cmである。柱穴の間隔はPit 1—Pit 3間は1.3m、Pit 2—Pit 4間は0.95mとなっている。柱穴の位置は住居跡コーナーを結ぶ対角線上にそれぞれ乗るようだが、Pit 1だけが西方へずれている。これは炉跡を避けたためと推定される。

炉跡はPit 1とPit 3を結ぶ線より外側で、北壁より40cm離れた位置に設置されている。長軸50cmの楕円形を呈し、掘込みは5～8cmを測り、底面は平坦である。あまり焼土化していない。壁溝・貯蔵穴は構築されていない。遺物は覆土第2、3層より検出され、縄文土器、石器等が出土している。

埴輪片は出土していない。床面上の遺物は角礫3個、鉢形土器、土製勾玉がある。



住居跡土層断面説明

1. 漆黒色土、パサパサ粘性は少ない。粒子が細く、わずかに炭化物、焼土を含む。
2. 漆黒色土、1層よりやや明るく、ローム粒子を多く含む。
3. ローム粗粒を含む黒褐色土
4. 暗褐色土

第9図 第1号住居跡実測図 (1/40)

## 第Ⅳ章 遺 物

### 第1節 古墳出土の遺物

#### 第3号墳周溝出土の弥生式土器（第10図）

本古墳周溝底部よりやや浮いた状態で検出された。本墳に伴うものではなく、流れ込んだものと思われる。同一地点に破片がまとまっていたが、全体の3分の1程であり、これより全体を復元した。遺存部分は口縁部4分の1、頸部4分の3、体部欠失、底部4分の1で、総破片数は23個である。拓図に示したのは文様の施文される体部上半の土器片である。復元された土器各部の計測値は、口径12.8cm、頸部径9.6cm、底径7.8cm、器高17.2cmを測る小型の甕形土器で、体部の最大径は口径とほぼ等しく、口縁はやや直線的に外反する。そして、口唇部はやや内そぎ状になっている。体部は肩の張らない、ゆるやかな膨みを持って底部に至るようだ。平底である。底部は粘土板より粘土ひもを巻き上げている。破片の中には接合部分で折損している例がある。

器面の成形は、口縁部では7本の刷毛目を施した後、5～6本の櫛による波状文が施される。刷毛目は縦位、斜位方向に残る。波状文は4段施文されるが、不整で左より右方向へ進んでいる。体部は遺存部分が少なく施文の全体を知り得ないが、口縁部に施文された櫛と同一工具による波状文が任意に施文される。だれて雑な感じを受ける施文である。櫛目の本数は一定していない。口縁部と体部の境界には波状文の施文後、2連止めの櫛描簾状文を1段施文している。施文の方向は左より右へ進んでいる。櫛目の本数は8本である。施文は強く、条線は波状文より深い。体部下半はヘラナデが顕著に施されている。内面は先端部分によるヘラナデとヘラ背面部分によるナデが施され、器面は滑沢を呈している。

焼成は良好、暗褐色、黒褐色をしている。胎土は精選され細砂を少量含んでいる。

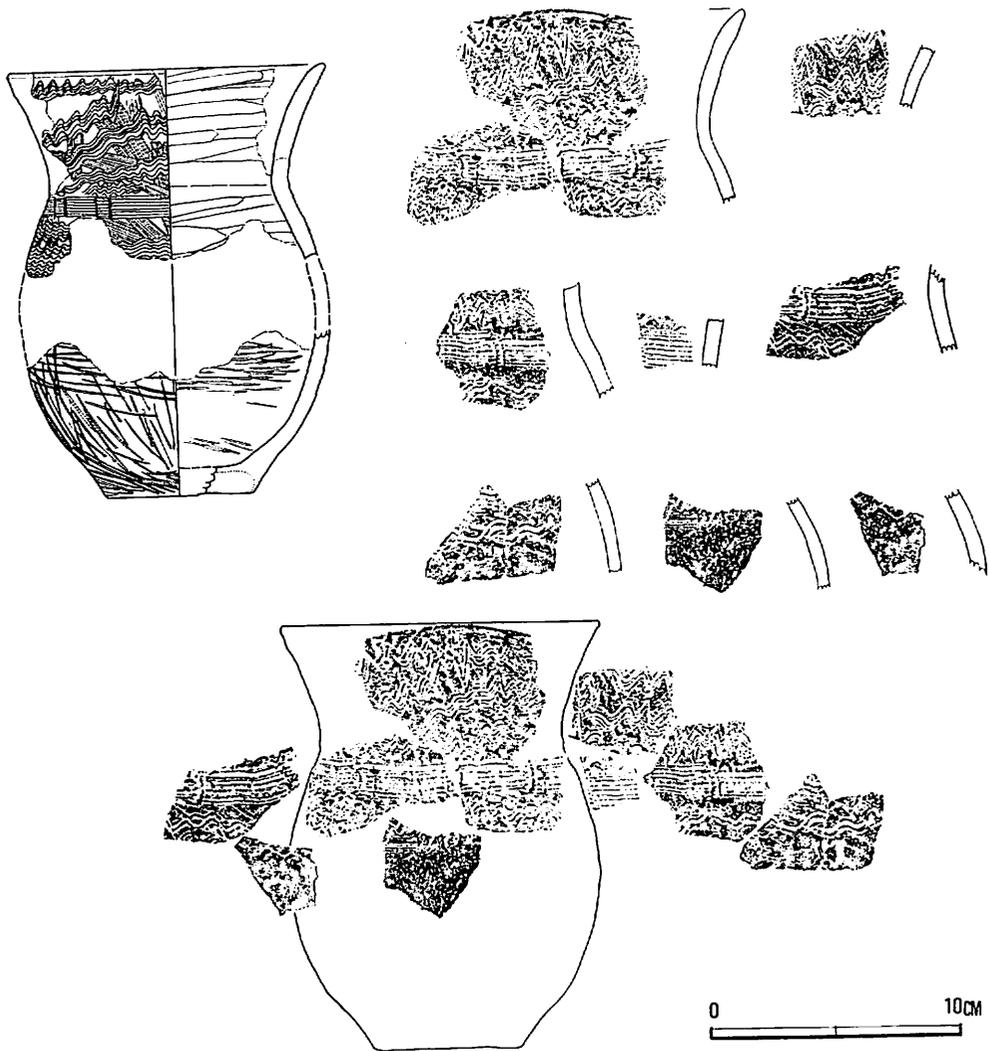
#### 第3号墳周溝出土の土師器坏（第11図1）

周溝底部より上向きの状態で検出された。完存品である。口径12.8cm、器高6.5cmを測る。体部の張りは充分で深く、口縁部との境も明瞭である。口縁は外反し、端部は丸く外方へつまみ出されている。焼成は良好で黄褐色をしているが、底部に黒斑を持つ。胎土には砂粒を多く含む。また底部には、軟質時に砂上に置いたと思われる細かい凹凸が観察される。

本古墳からは、他に出土した土器は埴輪だけであるので、表採、覆土中の埴輪と合わせて後述したい。

### 第2節 住居跡出土遺物（第11図2～7）

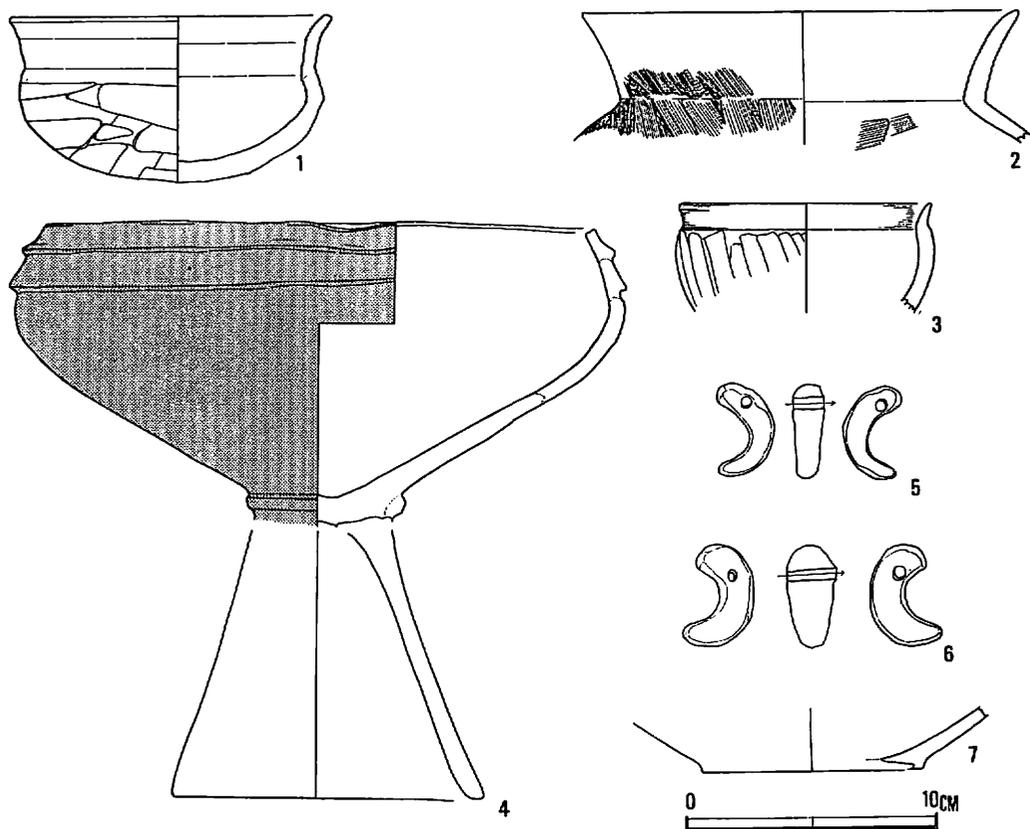
第1号住居跡覆土、床面より検出された。2は、覆土第2層下位より検出された。甕口縁部の一部で、約2分の1遺存していた。口径は13.4cmを測る。口縁は体部よりくの字状に屈曲する。口縁端はやや尖る。器面には16本単位の刷毛目痕が残る。焼成は良好で暗褐色をしている。胎土は精選



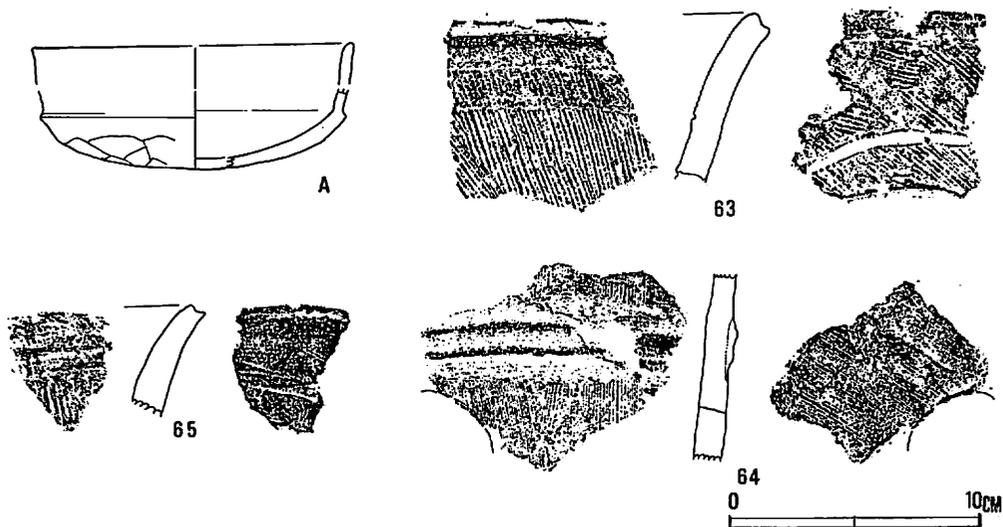
第10図 第3号墳周溝出土の弥生式土器 (1/3)

され緻密である。3は、覆土第2層より検出された。墳の口縁部3分の1が遺存していた。口径は約10cmを測る。口縁はわずかにつまみ出され、端部は尖る。焼成は良好で赤褐色をしている。胎土は砂、小石を少量含む。

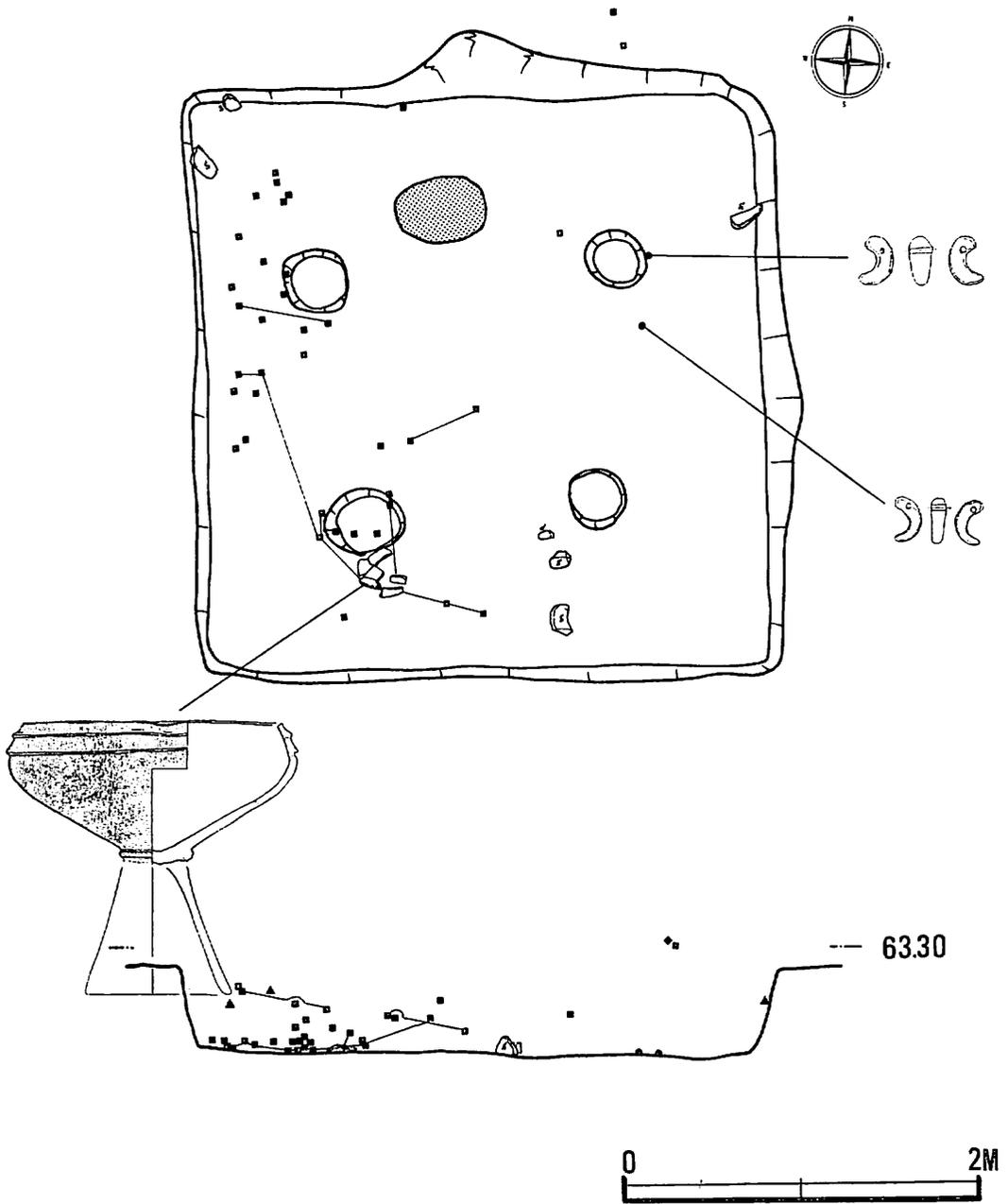
4は、住居床面より検出された。坏部底面を上に向けていた。床上に散乱した本土器の口縁部はみな接合している。脚部破片是一片も出土しておらず、本住居への廃棄以前に欠失していたと思われる。坏部のほぼ完全な台付鉢である。口径は21.6cmを測る。最大径は口縁部第1段凸帯に位置し、24.5cmを測る。基部径は6.3cmを測る。坏部高は11.8cmを測る。全体の器形は、あたかも手首を合わせ、てのひらを広げたような口縁のすぼまる形をしており、物を入れ、ささげ持つようなイメージを受ける。体部は上反りで伸び上り、口縁で内反し、口縁端部はやや立ち上る。口縁には一部分をやや凹ませて片口状をしている部分が認められる。口縁の外面には2段のやや純い凸帯を巡らせている。この凸帯部分は粘土の接合痕と一致しており、該期の土器によく見られる成形法で



第11図 第3号墳周溝出土遺物・第1号住居跡



第12図 姥ヶ沢第1号墳採取遺物

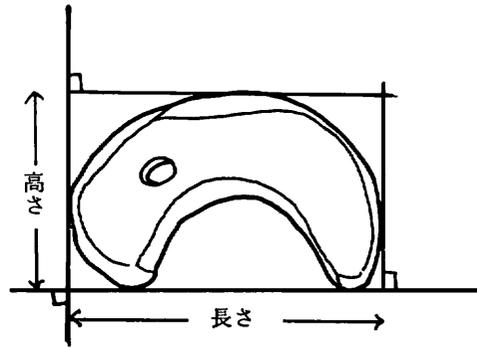


第13図 第1号住居跡遺物出土状態 (1/40)

ある。基部には1段の凸帯を巡らせている。体部内面外面は、やや摩耗しているが、砂粒は浮き出しておらず、外面には全面赤彩が施されている。しかし、縄文等の文様は一切施文されていない。内面には炭化質が付着している。焼成は良好で赤褐色をしている。胎土は精選されており、緻密である。

5は、住居床面より検出された。やや小ぶりの土製勾玉である。完形品であった。長さ3.8cm、高さ2.3cmを測る。表面は良くナデられている。穿孔は左方より、右方向へ貫いている。焼成は良好、赤褐色をしている。胎土は砂を少量含む。

6は、住居床面から、5の勾玉より40cm離れて検出された。やや大ぶりである。完形品であった。長さ4.1cm、高さ3.1cmを測る。表面は良くナデられている。焼成は良好、赤褐色をしている。胎土は砂を少量含む。穿孔は、5と同一方向である。5、6の差異は形態の大小だけで、整形、穿孔、焼成、胎土と良く近似している。あるいは同一の製作者によるかもしれない。



第14図 勾玉計測図

7は、覆土第2層より検出された。壺、又は甕の底部4分の1の破片である。胎土、焼成とも2に近似している。同一個体の可能性もある。

本住居跡に伴う土器は4、5、6の土器である。なお床面より検出された3個の角礫は20cm程で、自然面を部分的に持っている。接合しない。石質はチャートであった。

### 第3節 一括遺物

#### 埴輪

姥ヶ沢遺跡より出土した埴輪はすべて破片であり、全形を復し得る例は皆無であった。このため本文では埴輪の持つ属性、特に凸帯の形態、刷毛調整に注目し分類を行った。

凸帯の形態 高さ 幅 (第15図)

凸帯の形態については、諸氏により分類が試られており、本文でもこれを考慮した。

Aは断面の中央が凹む、いわゆるM字形を呈する凸帯

A'は断面M字形を呈するが、凸帯の上稜が高く、下稜の低いもの

Bは断面が三角形を呈する凸帯

Cは断面が台形を呈する凸帯

Dは断面が楕円形を呈する凸帯

凸帯の高さは断面の最も高い場所を、凸帯の幅は上稜と下稜の距離を採った。

#### 器厚

器厚は破片の中央部分を計測した。

#### 外面調整・内面調整

外面調整は刷毛による。刷毛の本数は2cm幅で示した。また工具の幅が判明する例はその計測値を示した。工具の移動方向は矢印によって示している。

↘・右下より左上へ、↗・左下より右上へ、→・左より右へ、←・右より左へ、↑・下より上へ

ナデは刷毛の施されない場合と、刷毛を消している場合があるが区別できない。

内面調整は刷毛とナデによる。基準は外面調整と同じである。

色調

褐色が基調であり、その濃淡により茶褐色・橙褐色・褐色・淡褐色・黄褐色・灰褐色・に分類した。

胎土

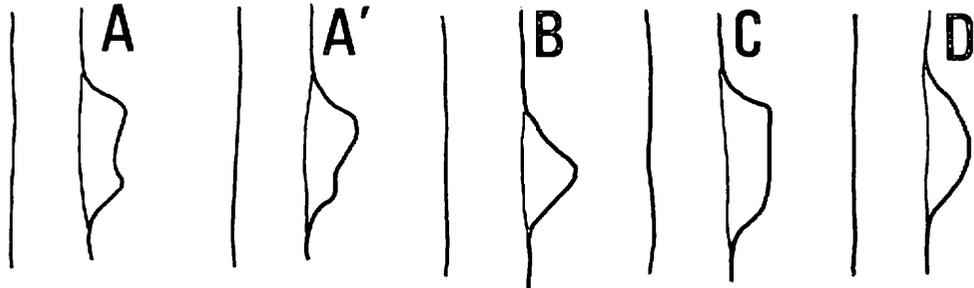
砂粒・小石等の含有量を視覚的な類別により微量・小量・多量と分けた。また長石・結晶片岩等の特徴的な含有物を示した。

焼成

焼成は色調と関係を持ち、焼き上りの良好な埴輪は褐色味が強い。良く焼きしまり、比較的キズのつきにくい埴輪を焼成良好とした。

備考

部位の判明する例、刻線の施される例等の重要な特徴と出土場所を示した。なお、1号墳表採の埴輪と窯底出土の埴輪以外はすべてA区覆土より出土した埴輪である。



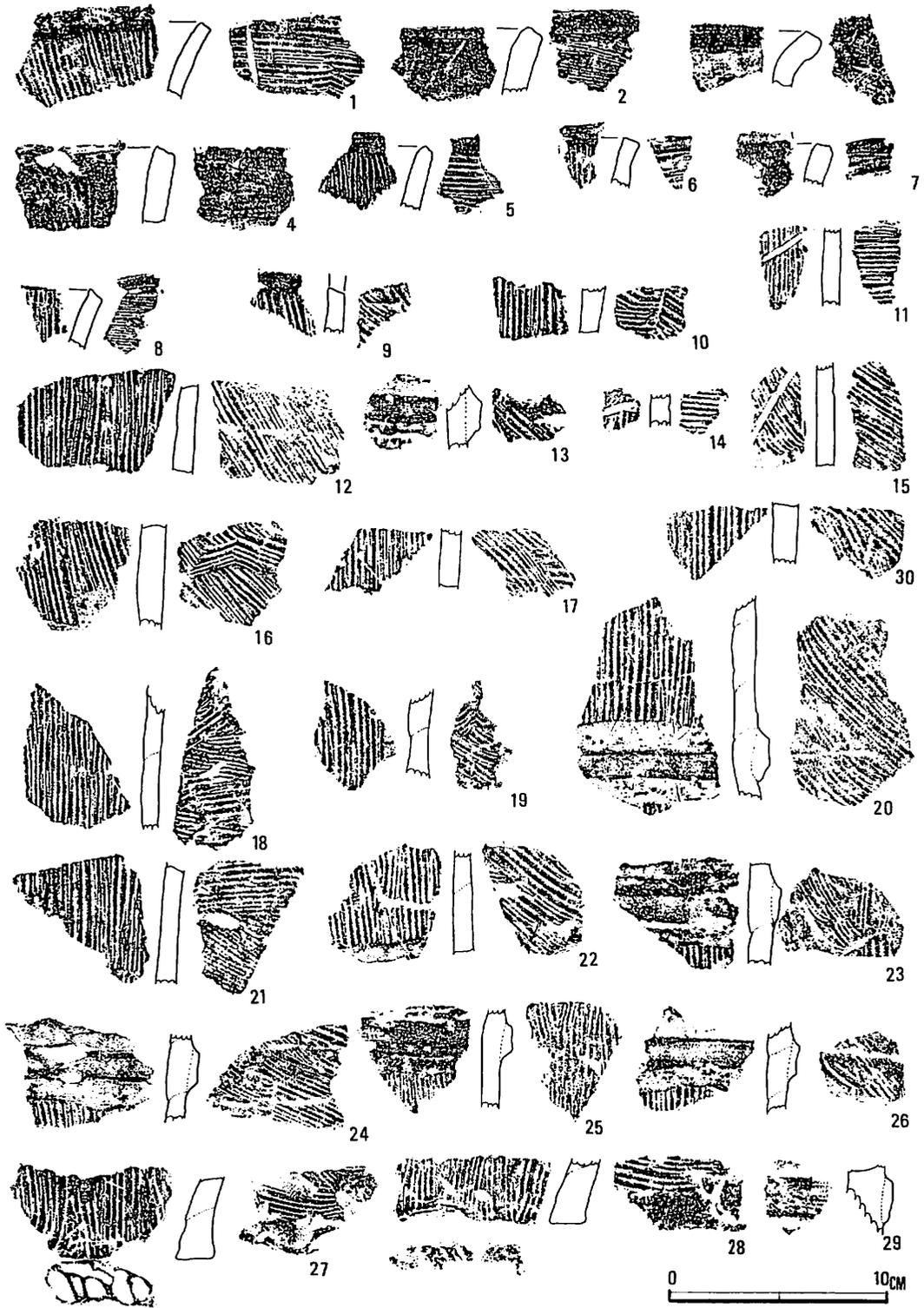
第15図 凸帯分類図

第1表 姥ヶ沢遺跡出土埴輪観察表

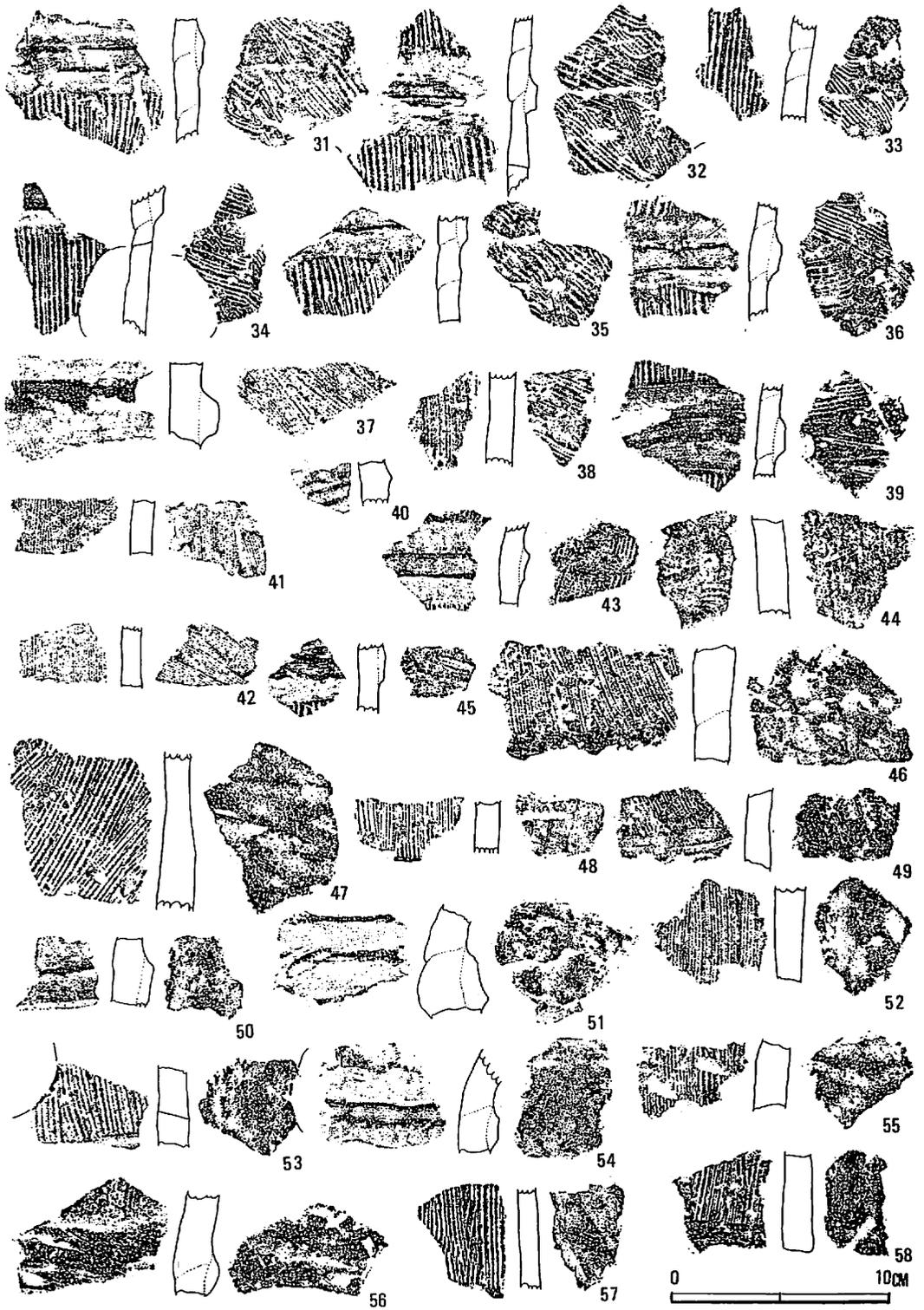
図版 番号	凸帯 mm			器厚 mm	外面調整		内面調整		属 性			備 考
	形態	高さ	幅		ハケ 本数	方向	ハケ 本数	方向	色 調	胎 土	焼 成	
1				7	7	縦	10	←	橙 褐 色	細砂、長石	良	口縁
2				12	ナデ		13	←	赤 褐 色	中細、多量	〃	〃 1号墳表採
3				9	ナデ		10	↖	〃	〃	〃	〃 〃
4				11	7 ナデ	縦	8	←	〃	細砂、多量	〃	〃 〃
5				8	10	〃	9	←	褐 橙	細砂、長石	〃	〃
6				7	—	〃	7	←	黄 褐 色	〃	〃	〃
7				10	ナデ		ナデ		赤 褐 色	中細、多量	〃	〃 1号墳表採
8				7	—	縦	16	←	茶 褐 色		〃	〃
9				8	7	〃	8	↖	〃	〃	〃	〃
10				8	9	〃	10	↖	褐 色	〃	〃	〃

図版 番号	凸帯 mm			器厚 mm	外面調整		内面調整		属 性			備 考
	形態	高さ	幅		ハケ 本数	方向	ハケ 本数	方向	色 調	胎 土	焼 成	
11				8	9	縦	9	←	茶褐色	中細、多量	良	刻線
12				8	9	"	10	↘	黄褐色	"	"	
13	C	7	13	9	—	"	—	↘	茶褐色	"	"	
14				9	—	"	9	←	黄褐色	"	"	
15				7	10	"	8	↘	橙褐色	"	"	
16				11	8	"	9	↖	"	"	"	単位幅 (内) 1.1cm " (外) 2.0cm
17				10	11	"	8	↖	黄褐色	"	"	
18				8	9	"	10	↗	赤褐色	細砂、長石	"	
19				9	9	"	9	↗	淡褐色	"	"	20と同一個体
20	A	6	13	10	7	"	7	↘	"	"	"	粘土幅 3.0cm
21				8	8	"	9	←	茶褐色	"	"	
22				9	9	"	7	↘	褐色	"	"	
23	C	6	14	9	8	"	9	↑	赤褐色	"	"	単位幅 (内) 1.5cm
24	A	6	14	8	9	"	10	↘	"	"	"	粘土幅 2.8cm
25	C	5	12	8	14	"	9	↑	淡褐色	"	"	
26	A	5	12	8	8	"	7	↘	褐色	"	"	単位幅 (内) 1.5cm
27				12	8	"	7	←	"	"	"	基部 篠圧痕
28				14	9	"	6	←	"	"	"	"
29	D	4		17	—	"	ナデ		赤褐色	中細、多量	"	1号墳表採
30				11	7	"	7	↘	"	細砂、長石	"	
31	A	4	12	10	8	"	7	↘	茶褐色	"	"	単位幅 (内) 1.5cm
32	C	6	11	9	9	"	11	↘	赤褐色	"	"	粘土幅 2.1cm
33				10	8	"	10	↘	淡褐色	"	"	単位幅 (内) 1.5cm 20と同一個体
34	C	4	12	10	8	"	10	↘	黄褐色	"	"	
35	C	3		10	8	"	10	↘	茶褐色	"	"	粘土幅 2.1cm
36	C	4	10	9	8	"	9	↖	褐色	"	"	単位幅 (内) 2.1cm " (外) 1.5cm
37	D	9	14	14	—	"	11	↘	茶褐色	"	"	
38				12	13	"	9	↘	淡褐色	"	"	1号墳表採
39	A	3	10	9	8	"	8	←	黄褐色	"	"	
40	B	3		12	—	"	—	ナデ	赤褐色	"	"	
41				9	15	縦	15	↑	褐色	"	"	42と同一個体
42				8	11	"	—	ナデ	"	"	"	
43	A'	4	11	13	—	ナデ	—	ナデ	橙褐色	"	"	
44				8	17	縦	16	↘	褐色	小石、多量	"	1号墳表採 拓図表裏逆
45	A	3	11	9	—	"	—	↘	黄褐色	細砂	"	

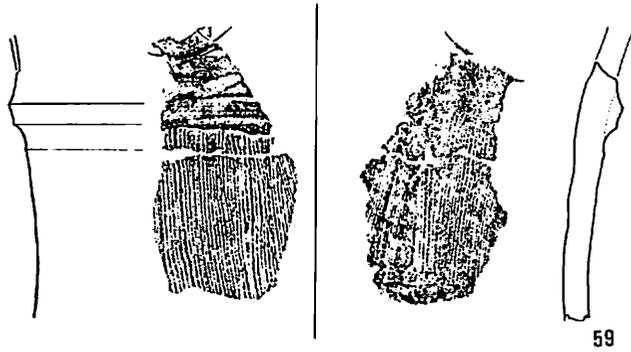
図版 番号	凸帯 mm			器厚 mm	外面調整		内面調整		属 性			備 考
	形態	高サ	幅		ハケ 本数	方向	ハケ 本数	方向	色 調	胎 土	焼 成	
46				17	12	縦		ナデ	赤褐色	小石、多量	良	単位幅 (外)1.7cm 1号墳表採
47				12	7	"		ナデ	黄褐色	細砂	"	
48				11	12	"		ナデ	赤褐色	砂	"	
49				11	13	"		ナデ	茶褐色	中砂、多量	"	1号墳表採
50	C	5	15	12	—			ナデ	褐色	小石、多量	"	"
51	A	3	20	16	—			ナデ	淡褐色	"	"	"
52				13	14	縦		ナデ	茶褐色	中砂、多量	"	"
53				13	8	"		ナデ	"	"	"	"
54	A	4	10	14	—			ナデ	淡褐色	細砂	"	
55				15	13	縦		ナデ	茶褐色	中細	"	1号墳表採
56	D	6		15	9	"		ナデ	黄褐色	"	"	
57				9	10	"		ナデ	"	"	"	
58				14	13	"	—	ナデ	褐色	粗粒	"	基部
59	A	3	8	11	14	"	15	↑	黄褐色	細砂、長石	"	
60	A	2	8	10	16	"	—	ナデ	灰褐色	"	"	
61	A'	4	12	9	9	"	10	↘	橙褐色	"	"	粘土幅 2.1cm
62				12	17	"	—	ナデ	黄褐色	"	"	基部 { 底径 17.2cm 籬圧痕
63				13	11	"	11	↘	橙褐色	"	"	口縁 刻線
64	A'	2	11	11	18	"	18	↘	赤褐色	"	"	
65				12	—	"	—	←	茶褐色	"	"	口縁
66						"		↘	灰褐色	細砂、長石	不良	基部 剝落著しい、窯底
67	A					"		↘	黄褐色	"	"	" "
68						"		↘	橙褐色	"	良	" "
69	A					—	—	↘	茶褐色	"	"	" "



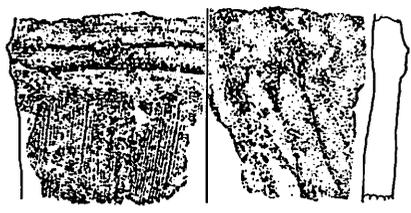
第16図 姥ヶ沢遺跡出土埴輪 (1/3)



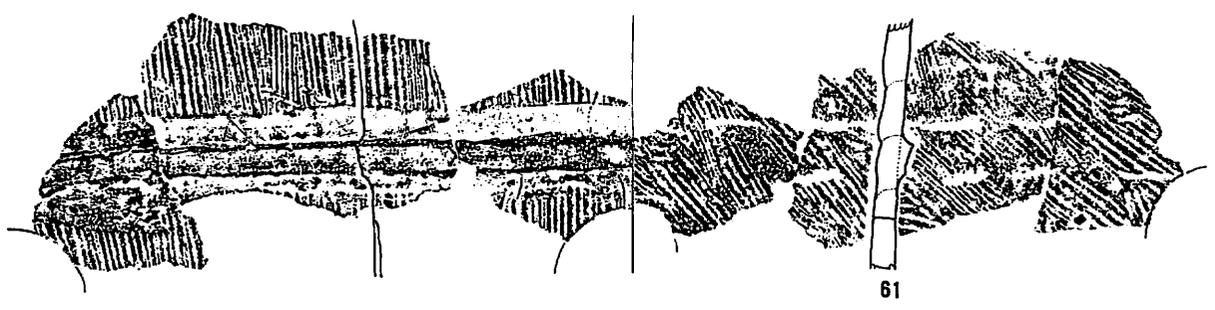
第17図 姥ヶ沢遺跡出土埴輪 (1/3)



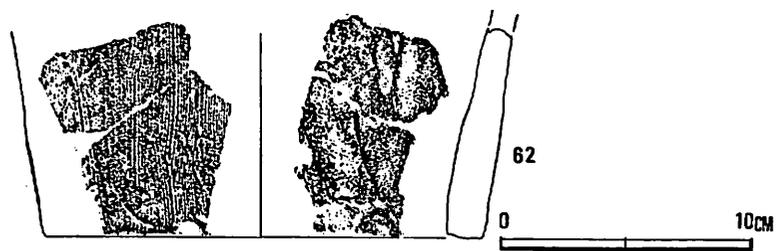
59



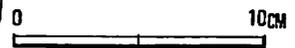
60



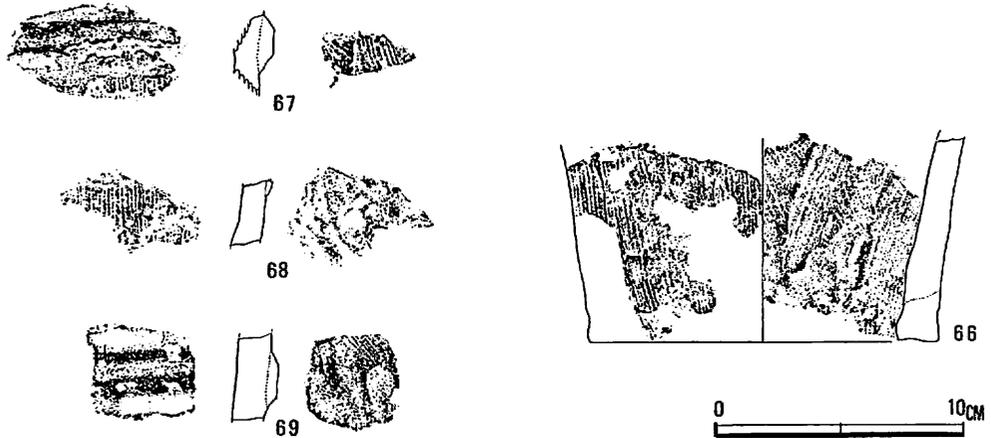
61



62



第18圖 姥ヶ沢遺跡出土埴輪 (1/3)



第19図 姥ヶ沢第1号埴輪窯跡出土埴輪 (1/3)

### 縄文土器 (第20～23図)

本遺跡(第Ⅲ地点)より出土した縄文土器は表採または包含層中より検出された。本文では古墳周溝、住居跡覆土中から検出された土器と1980年度試掘調査検出分(第Ⅱ地点)を併せて扱うこととする。なお本調査区からは該期の遺構は検出されなかった。

#### 第Ⅰ群土器

撚糸文土器群を本群とした。

1は胴部の小破片である。器厚は8ミリを測る。Lの撚糸文が施文されている。押圧は強く、節がくっきりと陰刻される。条間は広くまばらである。09はLの撚糸文が施文される。施文は部分的に遺存し条間の広いことが窺える。

#### 第Ⅱ群土器

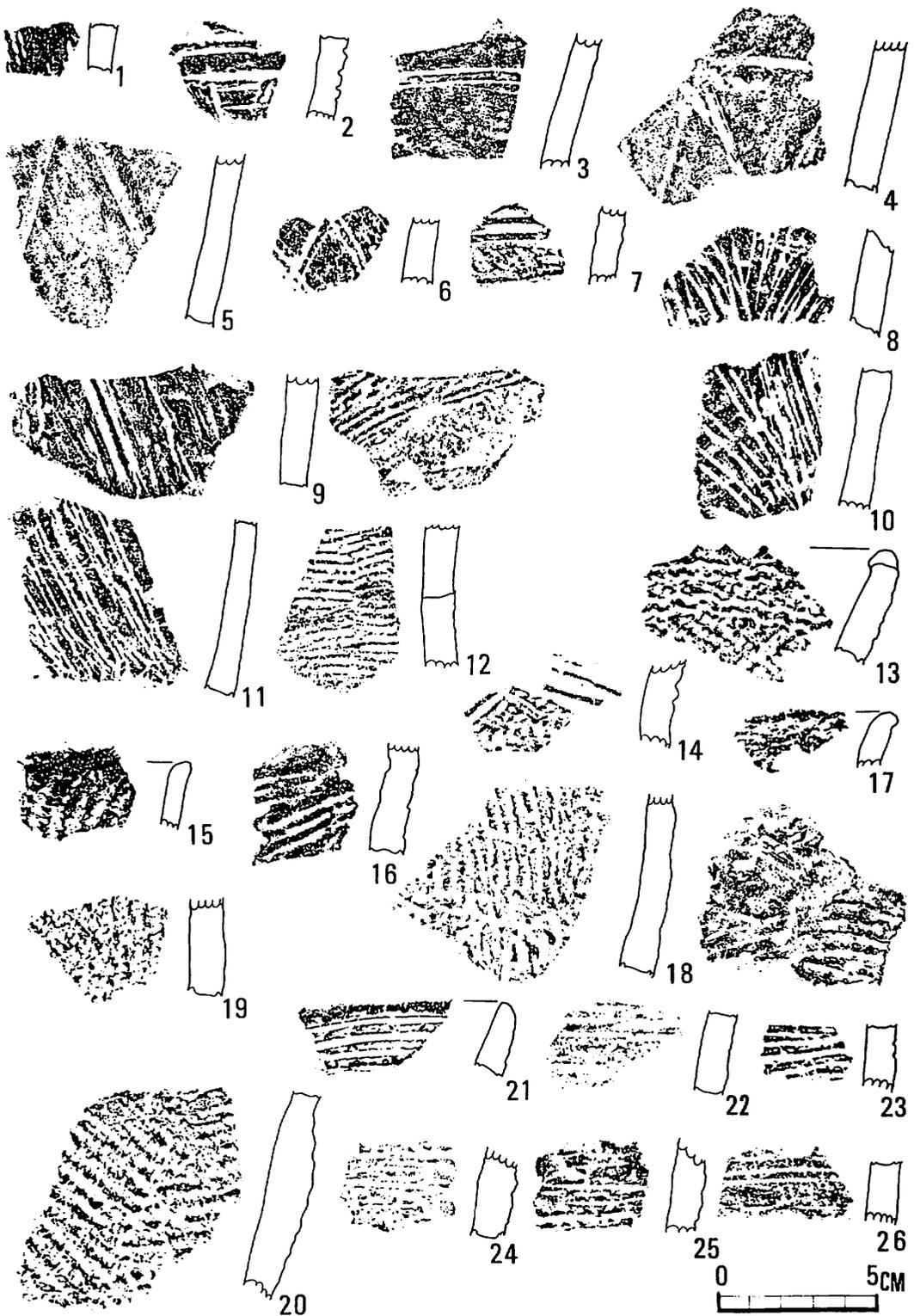
田戸下層式土器を本群とした。

2は横位に太い沈線を配し、縦位に沈線を加え、さらに沈線を充填している。沈線はやや先尖の工具を用いている。

#### 第Ⅲ群土器

条痕文系土器群を本群とした。

3は器面に荒いケズリを上下方向に施した後、半截竹管による浅い沈線を横位に配している。4はさらに斜位にもう一本沈線を加えている。3は淡褐色をしており、胎土に褐色粒子を含むが、4は黒褐色をしており胎土に多量の長石粒子を含んでいる。5は器面をナゲた後やや浅く格子目状に沈線を配している。6は深く強い。7は強く押し引かれ、表裏に条痕を残す。8は半截竹管による沈線が全面に施文されるが、その施文はやや乱雑である。裏面は摩耗して明らかでない。9は表裏



第20圖 姥ヶ沢遺跡出土縄文土器 (1/2)

面に斜位方向の条痕が残る。表面は強く施文され、条が明瞭である。10は半截竹管による施文で、右下より放射状に配されている。11は10に類似するが条間が狭い。10、11とも裏面はナデられ条痕は残らない。12は整った条痕で、6～7本が単位となる。焼成は良好で細砂、繊維を多く含む。05は条間が広く、斜位→縦位と施文される。

#### 第Ⅳ群土器

関山式土器を本群とした。

13は口唇に3個の小突起を設けている。文様はRLの斜縄文を施文後、半截竹管によるコンパス文風の波状沈線を2段、横位に配している。14はR  $\begin{cases} L < R \\ R < L \end{cases}$  を施文後、2本の降線を半截竹管によって菱形に作出している。13、14とも胎土は精選され、繊維を少量含む。

#### 第Ⅴ群土器

黒浜式土器を本群とした。

15はRLの斜縄文を口縁部に施文している。口縁は内傾する平面を有している。16は3本単位の沈線だけが施文される。焼成は良好で赤褐色をしているが、胎土に多量の繊維を含む。17は口縁にLRの斜縄文を施文している。口縁のやや下位は斜縄文がナデ消されており、節が1～2個口唇下に刺突状に残る。18はRLの斜縄文を施文している。内面黒色でナデ状の条痕が明瞭に残っている。19はRLRの斜縄文が施文される。20はRLの斜縄文を用い、羽状文を構成している。01は口唇に大きなキザミ目を入れ2つの肥厚した突起を作出している。地文にはrの斜縄文を施文している。胎土は微量の繊維を含んでいる。

#### 第Ⅵ群土器

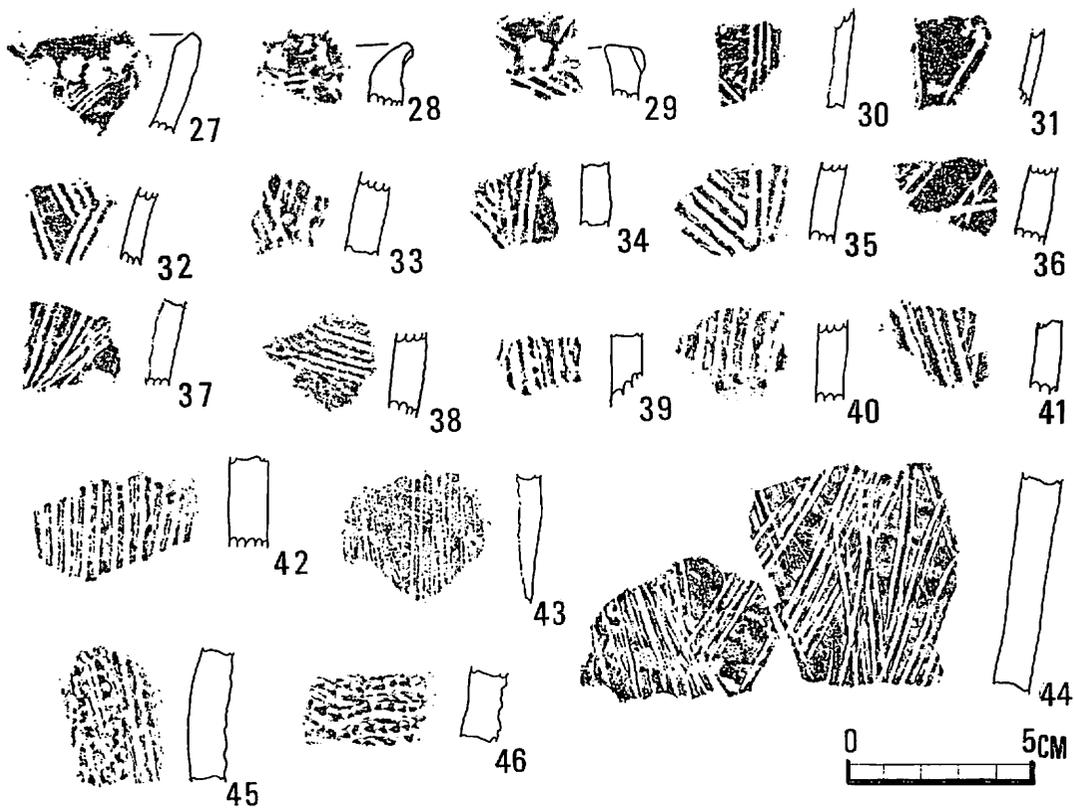
諸磯式土器を本群とした。

##### A類 (21～26)

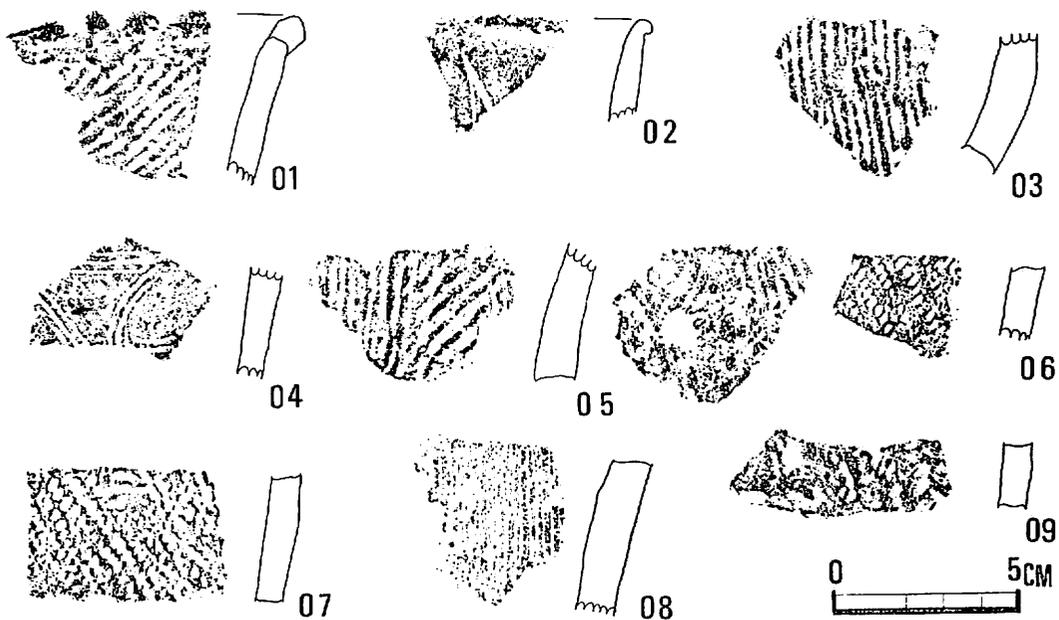
横位に平行沈線文の施される土器を一括した。施文様は斜縄文を施文後、横位に沈線を加える。沈線は半截・三截等の竹管状工具を使用している。

##### B類

縦位・斜位に沈線の施される土器を一括した。27は櫛状工具による斜位沈線を施した後、口縁外面に浅い楕円圧痕文を横位に連続して施文する。28は口縁外反部分に半截竹管による横位の沈線を施した後、ボタン状に粘土を貼りつけ、ボタン上に半截竹管による押圧を加えている。29は口縁部に半截竹管による沈線を斜位に施文後、口唇に大きなキザミ目を加えている。30～41は沈線のみが残る細片で、30～35は縦位と斜位方向の方向性を持っている。42、43は櫛状の沈線が施される。44は斜位→縦位と交互に施文される。上・下位は粘土接合部分で折損している。04は平行沈線に加え、曲線的な構図をとっている。



第21図 姥ヶ沢遺跡出土縄文土器 (1/2)



第22図 姥ヶ沢遺跡1980年試掘調査出土縄文土器 (1/2)

### 第Ⅶ群土器

十三菩提式土器を本群とした。

45は縦位に、46は横位に隆起線上に半截竹管による結節浮線文を施文している。45、46とも粘土接合部分で折損している。

### 第Ⅷ群土器

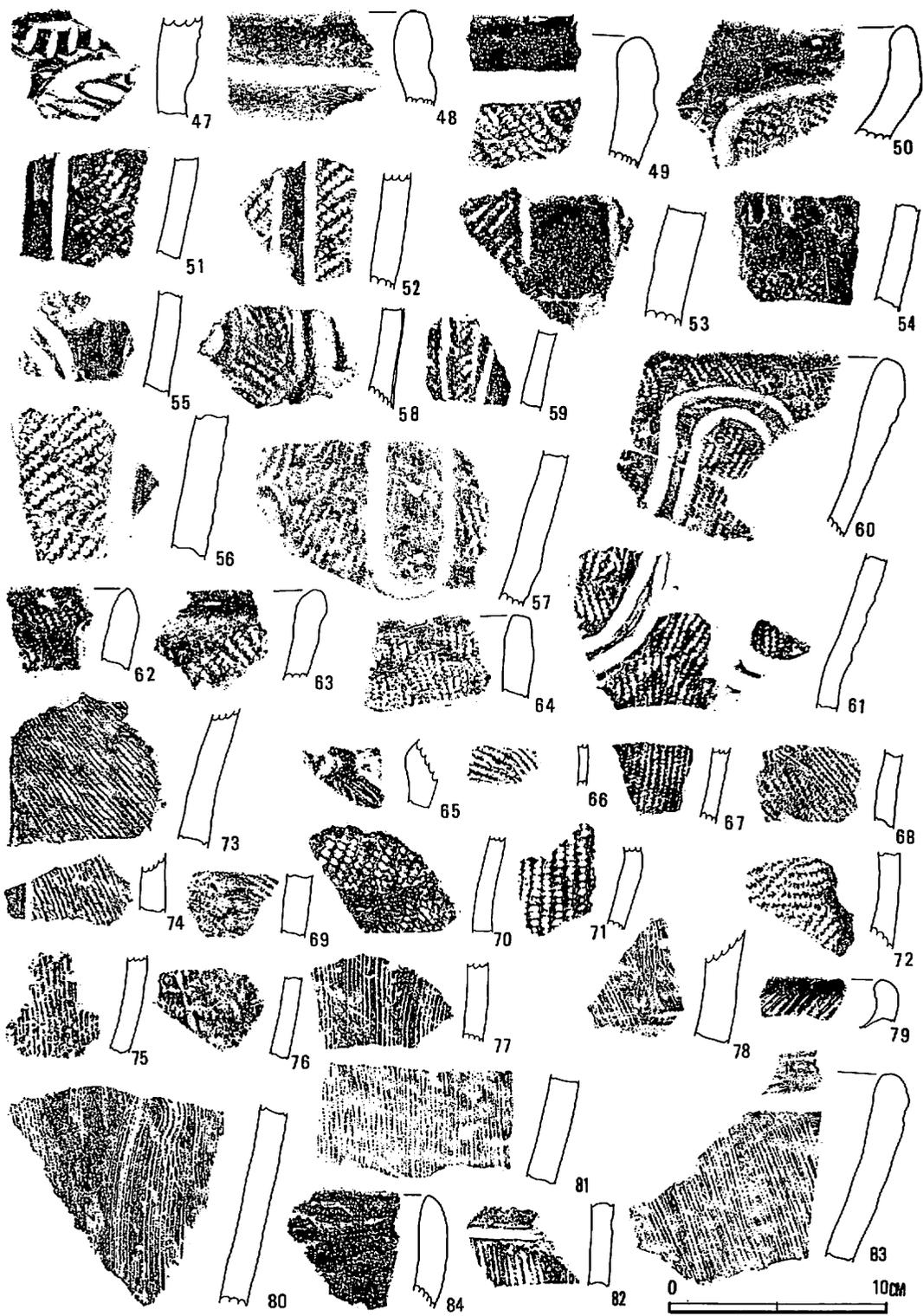
勝坂式土器を本群とした。

47は、ヘラ状工具による太い沈線のみで文様を構成している。胎土にウンモ粒子を少量含む。

### 第Ⅸ群土器

加曾利E式土器を本群とした。

検出土器中、本群に属する土器が最も多く総数61点で、図示できる35点を扱った。48は無文の鉢形土器口縁部で横位ナデが施される。49は口縁下に凹線を配した後、縄文を施文している。50は凹線で楕円を区画し、縄文を充填している。51～57は斜縄文を施文した後、沈線を垂下させその中を磨消している。54は磨消された部分のみが残る。58は縄文施文後、微隆起線を貼りつけている。51、54、55、58は上・下位とも粘土接合部分で折損している。粘土紐の幅は2.5～3cmと考えられる。59は垂下する沈線の内部にLR縄文を充填している。60、61は同一個体であるが接合しない。LR縄文を施文後∩字状に2本の沈線を描き、その中を磨消している。62～72、06、07は縄文のみを見ることが出来る土器片で、65、67は1～2ミリの細い原体を、68・69は2～3ミリの原体を用いている。62・64は原体の長さは1.6～2.0cmを測り、施文はまばらである。72は原体の方向を変えて施文され羽状となっている。73・74は同一個体であるが接合しない。∅縄文を施文後垂下する沈線を加えている。75～83は条線を施す土器で、76・75はやや太目の深い沈線が、77～83は幅の狭い密な条線が施され、胎土・焼成も共通している。80・83は10～11本の単位をもっている。83は口縁外面に粘土紐の剝離痕があり、横位に隆線を配していたようだ。84は無文の土器である。



第23図 姥ヶ沢遺跡出土縄文土器 (1/3)

第2表 姥ヶ沢遺跡出土縄文土器観察表

番号	施文手法の特徴	調整手法の特徴	色 調	胎 土	出土地点	備 考
1	Rの縦位捺糸文	内面 一不明瞭	内 } 中 } 赤褐色 外 }	白色不透明粒子 (長石)	住居跡 フク土	I群
2	先尖工具による沈線	内面 斜位指ナデ	内 } 中 } 暗褐色 外 }	白色不透明粒子(長石) 赤色粒子	3号墳周 溝	II群
3	多截竹管による沈線	外面 荒いケズリ 内面 横位擦痕	内 白黄褐色 中 灰褐色 外 淡褐色	赤色粒子	調査区 フク土	III群
4	多截竹管による沈線	外面 荒いケズリ 内面 横位擦痕	内 } 中 } 黒褐色 外 }	白色不透明 粒子 (長石)	調査区 フク土	III群
5	多截竹管による沈線	内面 横位擦痕	内 } 中 } 茶褐色 外 }	白色不透明 粒子 (長石)	調査区 フク土	III群
6	多截竹管による沈線	内面 不明瞭	内 } 中 } 灰褐色 外 } 茶褐色	片岩	住居跡 フク土	III群
7	横位条痕文	内面 横位条痕文	内 } 中 } 茶褐色 外 }	白色不透明 粒子 (石英)	調査区 フク土	III群
8	縦位条痕文	内面 不明瞭	内 } 中 } 暗褐色 外 }	白色不透明 粒子 (石英)	調査区 フク土	III群
9	斜位条痕文	内面 斜位条痕文	内 黄褐色 中 黒色 外 茶褐色	白色不透明 粒子 (長石)	調査区 フク土	III群
10	半截竹管による縦位 沈線	内面 斜位擦痕	内 } 中 } 灰色 外 } 茶褐色	白色不透明 粒子 (長石)	3号墳 周溝	III群
11	半截竹管による沈線	内面 横位擦痕	内 淡褐色 中 黄褐色 外 淡褐色	白色不透明 粒子(長石) 片岩	1号墳 周溝	III群

番号	施文手法の特徴	調整手法の特徴	色 調	胎 土	出土地点	備 考
12	横位条痕文	内面 不明瞭	内 暗褐色 中 黒色 外 茶褐色	白色不透明 粒子(長石)	表採	Ⅲ群 センイ少量含
13	R L の斜縄文施文 →半截による羽状縄 文竹管によるコンバ ス文施文	内面、横位ヘラ状工 具によるナデ	内 } 黄褐色 中 } 外 }	赤色粒子	住居跡 フク土	Ⅳ群 センイ少量含
14	R { L R の正反の合 の斜縄文施文→半截 竹管による沈線	内面 横位擦痕	内 } 黒色 中 } 外 } 黄褐色		表採	Ⅳ群 センイ少量含
15	R L の斜縄文	内面 横位擦痕	内 } 黄褐色 中 } 黒 色 外 }	白色不透明 粒子(長石) 石英粒子	表採	Ⅴ群 センイ少量含
16	沈線文	内面 不明瞭	内 暗褐色 中 黒 色 外 暗褐色		住居跡 フク土	Ⅴ群 センイ多量含
17	L R の斜縄文→ナデ	内面 不明瞭	内 } 黄褐色 中 } 外 }		住居跡 フク土	Ⅴ群 センイ多量含
18	R L の斜縄文を使っ た羽状縄文	内面、横位ヘラ状工 具によるナデ	内 } 黒 色 中 } 外 } 黄褐色		3号墳 周溝	Ⅴ群 センイ少量含
19	R L R と R L の斜縄 文を使用した羽状縄 文	内面 横位擦痕	内 } 灰褐色 中 } 外 } 暗褐色	白色不透明 粒子(長石)	表採	Ⅴ群
20	R L の斜縄文を使用 した羽状縄文	内面 横位擦痕	内 灰褐色 中 茶褐色 外 黄褐色		住居跡 フク土	Ⅴ群 センイ多量含
21	R L の斜縄文→横位 半截竹管による沈線 文	内面 横位平滑	内 赤褐色 中 茶褐色 外 赤褐色	白色不透明 粒子(長石)	住居跡 フク土	Ⅵ群 A類
22	R L 斜縄文→半截竹 管による横位沈線文	内面 縦位平滑	内 } 赤褐色 中 } 外 }	白色不透明 粒子 (石英)	住居跡 フク土	Ⅵ群 A類

番号	施文手法の特徴	調整手法の特徴	色 調	胎 土	出土地点	備 考
23	半截竹管による横位沈線文	内面 横位擦痕	内} 灰褐色 中} 赤褐色 外}	片岩	3号墳 周溝	Ⅵ群 A類
24	半截竹管による横位沈線文	内面 平滑	内} 淡褐色 中} 淡褐色 外}	片岩	調査区 フク土	Ⅵ群 A類
25	半截竹管による横位沈線文	内面 平滑	内} 淡褐色 中} 淡褐色 外}	片岩	調査区 フク土	Ⅵ群 A類 24と同一個体?
26	半截竹管による横位沈線文	内面 横位擦痕	内} 赤褐色 中} 赤褐色 外}		住居跡 フク土	Ⅵ群 A類
27	櫛状工具による斜位集合沈線+ボタン状押圧	内面 横位擦痕	内} 茶褐色 中} 茶褐色 外}	片岩 白色不透明粒子(石英)	住居跡 フク土	Ⅵ群 B類
28	半截竹管による横位沈線+キザミ+ボタン状貼付	内面 横位平滑	内} 暗茶褐色 中} 暗茶褐色 外}	白色不透明粒子(長石)	住居跡 フク土	Ⅵ群 B類
29	半截竹管による斜位沈線+キザミ	内面 横位擦痕	内} 赤褐色 中} 赤褐色 外}	片岩	調査区 フク土	Ⅵ群 B類
30	半截竹管による縦位沈線	内面 剝落	内} 灰褐色 中} 灰褐色 外}	赤色粒子	表採	Ⅵ群 B類
31	半截所管による縦位沈線	内面 剝落	中} 暗褐色 外}	白色不透明粒子(長石)	表採	Ⅵ群 B類
32	半截所管による縦位沈線	内面 平滑調整	内} 黄褐色 中} 黄褐色 外}	片岩	3号墳 周溝	Ⅵ群 B類
33	半截竹管による縦位沈線	内面 不明瞭	内} 灰黒色 中} 灰黒色 外} 赤褐色	片岩	住居跡 フク土	Ⅵ群 B類
34	半截所管による縦位沈線	内面 横位擦痕	内} 赤褐色 中} 赤褐色 外}	片岩	住居跡 フク土	Ⅵ群 B類

番号	施文手法の特徴	調整手法の特徴	色 調	胎 土	出土地点	備 考
35	半截竹管による縦位 +斜位沈線	内面 横位平滑	内 } 乳白色 中 } 外 }		3号墳 周溝	Ⅵ群 B類
36	半截竹管による斜位 沈線	内面 不明瞭	内 } 灰褐色 中 } 外 } 茶褐色	片岩	住居跡 フク土	Ⅵ群 B類
37	半截竹管による縦位 沈線	内面 剝落	中 黒 色 外 茶褐色		住居跡 フク土	Ⅵ群 B類
38	櫛状工具による横位 沈線	内面 横位平滑	内 } 暗赤褐 中 } 色 外 }	白色不透明 粒子(長石)	表採	Ⅵ群 B類
39	半截竹管による縦位 沈線	内面 斜位擦痕	内 黄褐色 中 } 外 } 赤褐色	白色不透明 粒子(長石)	調査区 フク土	Ⅵ群 B類
40	半截竹管による縦位 沈線	内面 平滑	内 乳褐色 中 灰褐色 外 赤褐色		調査区 フク土	Ⅵ群 B類
41	半截竹管による斜位 沈線	内面 平滑	内 } 中 } 黄褐色 外 }		3号墳 周溝	Ⅵ群 B類
42	半截竹管による縦位 沈線	内面 平滑	内 乳白色 中 灰褐色 外 赤褐色		3号墳 周溝	Ⅵ群 B類 40と同一個体?
43	多截竹管による縦位 沈線	内面 剝落	中 赤褐色 外 茶褐色	白色不透明 粒子(長石)	調査区 フク土	Ⅵ群 B類
44	半截竹管による斜位 縦位沈線	内面 横位擦痕	内 暗褐色 中 黒 色 外 暗褐色	白色不透明 粒子(長石)	調査区 フク土	Ⅵ群 B類
45	半截竹管による条線 +縦位結節浮縄文	内面 斜位擦痕	内 赤褐色 中 暗褐色 外 赤褐色	白色不透明 粒子(長石)	住居跡 フク土	Ⅶ群
46	半截竹管による条線 +横位結節浮縄文	内面 平滑	内 } 中 } 茶褐色 外 }	黒色ウンモ 粒子	3号墳 周溝	Ⅶ群

番号	施文手法の特徴	調整手法の特徴	色 調	胎 土	出土地点	備 考
47	へら状工具による沈線	内面 横位平滑	内 赤褐色 中 } 暗褐色 外 }	白色不透明 粒子 (石英)	調査区 フク土	Ⅷ群
48	横位擦痕文→横位凹線	内面 横位擦痕	内 黒褐色 中 黒 色 外 黒褐色	白色不透明 粒子 (石英)	調査区 フク土	Ⅸ群
49	指圧による横位沈線 →LR斜縄文	内面 横位平滑	内 茶褐色 中 黒 色 外 黄褐色	黒ウンモ粒子	表採	Ⅸ群
50	横位平滑→隆帯→LR斜縄文充てん	内面 横位平滑	内 茶褐色 中 灰 色 外 黄褐色		調査区 フク土	Ⅸ群
51	縦位平滑→棒状工具による縦位沈線→LR斜縄文の充てん	内面 縦位平滑	内 黒 色 中 灰褐色 外 灰茶褐色	白色不透明 粒子 (長石)	調査区 フク土	Ⅸ群
52	LR斜縄文→棒状工具による縦位沈線→縦位平滑	内面 不明瞭	内 茶褐色 中 灰褐色 外 褐 色		住居跡 フク土	Ⅸ群
53	縦位平滑→棒状工具による縦位沈線→LRの斜縄文充てん	内面 不明瞭	内 黄褐色 中 灰 色 外 黄褐色		調査区 フク土	Ⅸ群
54	53と同	内面 平滑	内 } 黒灰色 中 } 外 } 黄褐色	白色不透明 粒子 (長石)	3号墳 周溝	Ⅸ群
55	53と同	内面 平滑	内 黒灰色 中 } 茶褐色 外 }	白色不透明 粒子 (長石)	3号墳 周溝	Ⅺ群
56	52に同	内面 平滑	内 褐 色 中 黄灰色 外 茶褐色		1号墳 周溝	Ⅺ群
57	LR斜縄文→棒状工具による沈線→平滑	内面 斜位擦痕	内 黄褐色 中 灰黒色 外 黄褐色	白色不透明 粒子 (長石)	調査区 フク土	Ⅺ群
58	LR斜縄文→指圧による隆帯	内面 斜位平滑	内 淡褐色 中 黒灰色 外 黄褐色		表採	Ⅺ群

番号	施文手法の特徴	調整手法の特徴	色 調	胎 土	出土地点	備 考
59	平滑→棒状工具による縦位沈線→LR斜縄文充てん	内面 不明瞭	内} 黄褐色 中} 茶褐色 外}		調査区 フク土	IX群
60	LRの羽条縄文→棒状工具による沈線→平滑	内面 横位擦痕	内} 黄褐色 中} 暗褐色 外} 灰褐色	白色不透明 粒子(長石)	住居跡 フク土	IX群
61	LRの斜縄文→棒状工具による沈線	内面 斜位擦痕	内} 暗褐色 中} 茶褐色 外}	白色不透明 粒子(長石)	調査区 フク土	IX群
62	平滑→RL斜縄文	内面 横位擦痕	内} 黄褐色 中} 黄褐色 外}	赤色粒子	調査区 フク土	XI群
63	平滑→指圧による横位凹線→LR斜縄文	内面 横位擦痕	内} 茶灰色 中} 黒灰色 外} 茶褐色	赤色粒子	調査区 フク土	IX群
64	平滑→RL斜縄文	内面 横位平滑	内} 黄褐色 中} 暗褐色 外} 黒灰色	白色不透明 粒子(長石)	3号墳 周溝	XI群
65	平滑→LR斜縄文	内面 平滑	内} 黄褐色 中} 白灰色 外} 黄褐色	片岩	調査区 フク土	IX群
66	RL斜縄文	内面 平滑	内} 暗褐色 中} 黒色 外}		3号墳 周溝	XI群
67	LR斜縄文	内面 平滑	内} 黄褐色 中} 白灰色 外} 赤褐色		調査区 フク土	IX群
68	RL斜縄文	内面 平滑	内} 暗褐色 中} 灰褐色 外} 茶褐色		3号墳 周溝	IX群
69	平滑→LR斜縄文	内面 平滑	内} 黒色 中} 暗褐色 外} 褐色	赤色粒子	3号墳 周溝	XI群
70	RL斜縄文	内面 平滑	内} 赤褐色 中} 赤褐色 外}	白色不透明 粒子	調査区 フク土	XI群

番号	施文手法の特徴	調整手法の特徴	色 調	胎 土	出土地点	備 考
71	R L斜縄文	内面 横位ナデ	内 黒灰色 中 黒 色 外 茶褐色	白色不透明 粒子	調査区 フク土	IX群
72	縦位平滑→R L斜縄 文	内面 縦位平滑	内 褐 色 中 灰褐色 外 黄褐色	黒ウンモ粒子	調査区 フク土	IX群
73	Rの斜縄文→縦位沈 線→沈線内平滑	内面 横位擦痕	内 暗褐色 中 } 外 } 赤褐色	白色不透明 粒子(石英)	調査区 フク土	IX群 74と同一個体
75	縦位櫛描文	内面 横位擦痕	内 } 中 } 黄褐色 外 } 黒灰色	赤色粒子 白色不透明 粒子(石英)	住居跡 フク土	IX群
76	擦痕→縦位櫛描文→ 縦位沈線	内面 横位平滑	内 } 中 } 黄褐色 外 }		住居跡 フク土	IX群
77	縦位櫛描文	内面 横位平滑	内 黒褐色 中 灰褐色 外 黄褐色		住居跡 フク土	IX群
78	縦位櫛描文	内面 横位平滑	内 黄褐色 中 灰褐色 外 黄褐色		調査区 フク土	IX群
79	横位ナデ→斜位櫛描 文	内面 横位ナデ	内 黄褐色 中 灰 色 外 黄褐色		住居跡 フク土	IX群
80	縦位ナデ→縦位櫛描 文	内面 縦位平滑 上半 横位ナデ 下半	内 暗褐色 中 灰褐色 外 黄褐色		調査区 フク土	IX群
81	縦位櫛描文	内面 横位擦痕	内 黄褐色 中 灰 色 外 黄褐色		調査区 フク土	IX群
82	横位沈線→縦位櫛描 文	内面 平滑	内 暗褐色 中 灰 色 外 黄褐色		3号墳 周溝	IX群
83	横位凹線→縦位櫛描 文	内面 横位擦痕	内 黄褐色 中 灰 色 外 黄褐色		調査区 フク土	IX群

番号	施文手法の特徴	調整手法の特徴	色 調	胎 土	出土地点	備 考
84	横位平滑	内面 横位平滑	内 黄褐色 中 灰 色 外 黄褐色		住居跡 フク土	IX群
01	L $\left\{ \begin{matrix} r \\ r \end{matrix} \right.$ の斜縄文	内面 横位擦痕	内 茶褐色 中 灰褐色 外 茶褐色	赤色粒子	80 試掘	V群
02	縦位沈線文	内面 横位擦痕	内 } 黄褐色 中 } 外 } 灰褐色	白色不透明 粒子(石英)	80 試掘	II群
03	半截竹管による縦位 平行沈線文	内面 不明瞭	内 } 中 } 黒 色 外 }		80 試掘	V群
04	半截竹管による沈線 文	内面 斜位擦痕	内 } 灰褐色 中 } 外 } 黄褐色		80 試掘	VI群
05	斜位+縦位条痕文	内面 条痕文	内 } 中 } 暗褐色 外 }	片岩	80 試掘	III群 センイ多量含
06	R L Rの付加条斜縄 文	内面 横位擦痕	内 茶褐色 中 灰褐色 外 茶褐色		80 試掘	IX群
07	R Lの斜縄文	内面 平滑	内 黒褐色 中 黄褐色 外 赤褐色	黒ウンモ粒子	80 試掘	IX群
08	櫛状工具による縦位 沈線文	内面 不明瞭	内 黄褐色 中 灰 色 外 黄褐色		80 試掘	IX群
09	R Lの斜縄文	内面 横位平滑	内 茶褐色 中 灰褐色 外 茶褐色		80 試掘	I群

## 石器（第24、25、26図 図版17、18）

本遺跡から出土した石器は34点である。その内容は打製石斧14点、礫器1点、敲石1点、磨石2点、凹石1点、石皿1点、スクレイパー3点、石核1点、剝片10点であった。これらは調査・表採・覆土、古墳周溝・住居跡覆土からの検出であった。

### 打製石斧（1～14）

1は大型の打製石斧であり、大型楕円礫を素材に用いている。裏面はすべて自然面である。表面の主要剝離後、側縁の調整剝離が入念になされる。刃部は彎曲し、頭部は尖鋭で全体として撥形に近い形態をしている。刃部には使用痕が認められる。2は全周縁に調整剝離を施している。表面は微細な剝離により丸味のある剝離面をもち、約70°の角度を有して部厚な刃部を形成している。裏面には自然面をもつ。刃部は彎曲し、全体として撥形に近い形態をしている。断面形は台形に近い。3は最大幅が刃部にあり、尖鋭に近い頭部を有す。いわゆる撥形の打製石斧で三角形状を呈する。側縁の調整は入念である。裏面はすべて自然面である。4は薄厚の剝片を用いている。主要剝離面が両面に残り、側縁に調整剝離を施している。分銅形に近い形態をしている。刃部は一部欠損している。5～14は両側縁がほぼ平行し、長方形を呈する石斧で、9もやや内彎するが、いわゆる短冊形に属すると思われる。5、6、12は半損しているが、裏面に自然面を残している。7、10、11、13はほぼ完存しており、長さ9cm前後に統一され、刃部は彎曲している。各石器とも自然面をすべて除去し切っていない。8、14は主要剝離の後わずかに調整剝離を施している。裏面は自然面のままである。

### 敲石（20）

長楕円の扁平礫を素材にしており、片側面だけを敲打面として利用している。

### 磨石（21・34）

21は平面形は楕円形、側面形は長楕円形を呈する磨石で、ほぼ全面を研磨されている。中央はやや凹んでいる。34は半損しているが、ほぼ21と同じ形状を呈し、全面研磨されている。

### 礫器（16）

破損しているが、剝離調整は表面のみで裏面に自然面を残している。残存部に使用痕は認められない。

### 凹石（22）

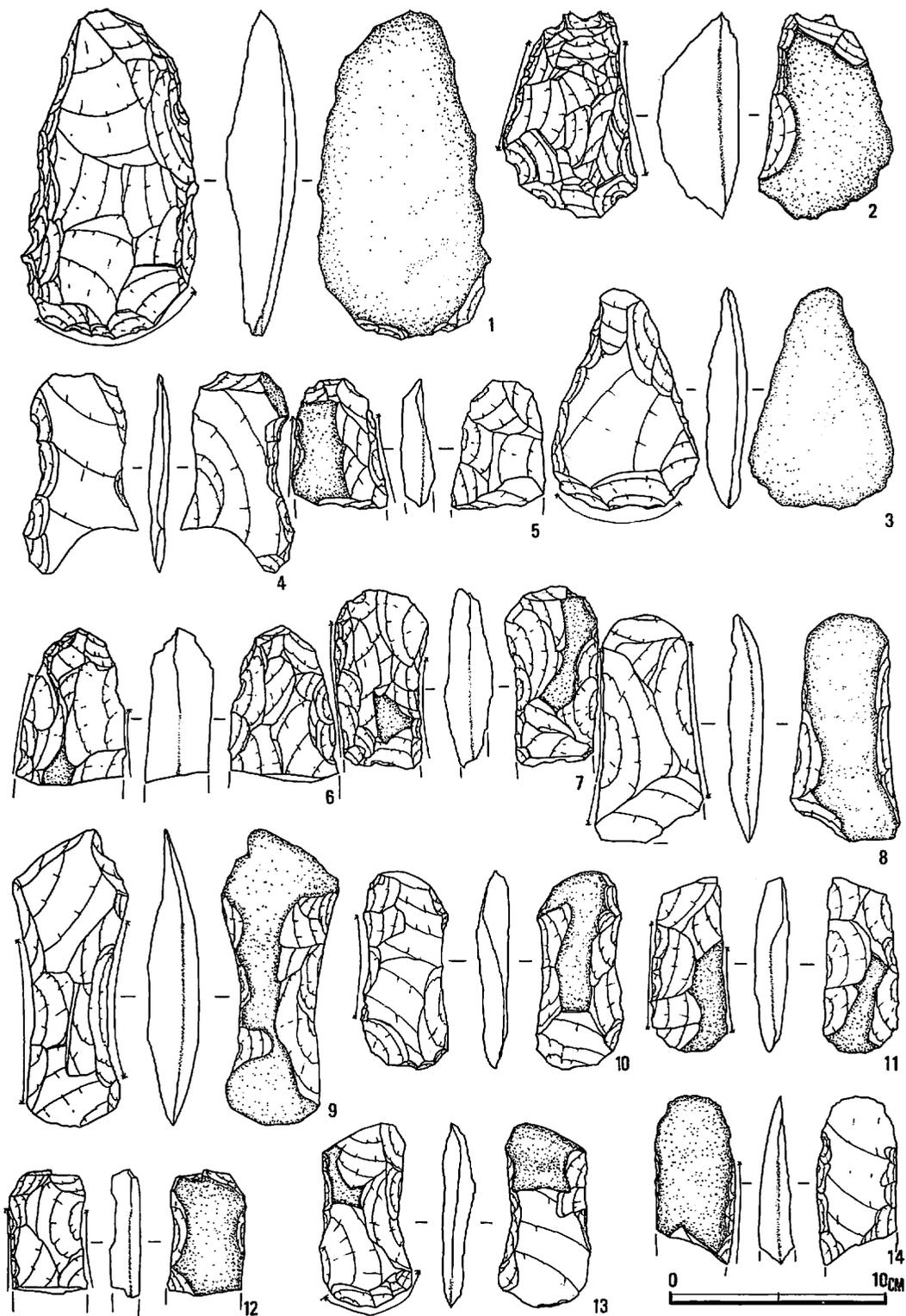
緑泥片岩の部厚い破片を素材として用いている。ほぼ中央部に磨痕がある。裏面にも表面と対応する位置に磨痕がある。

### 石皿（23）

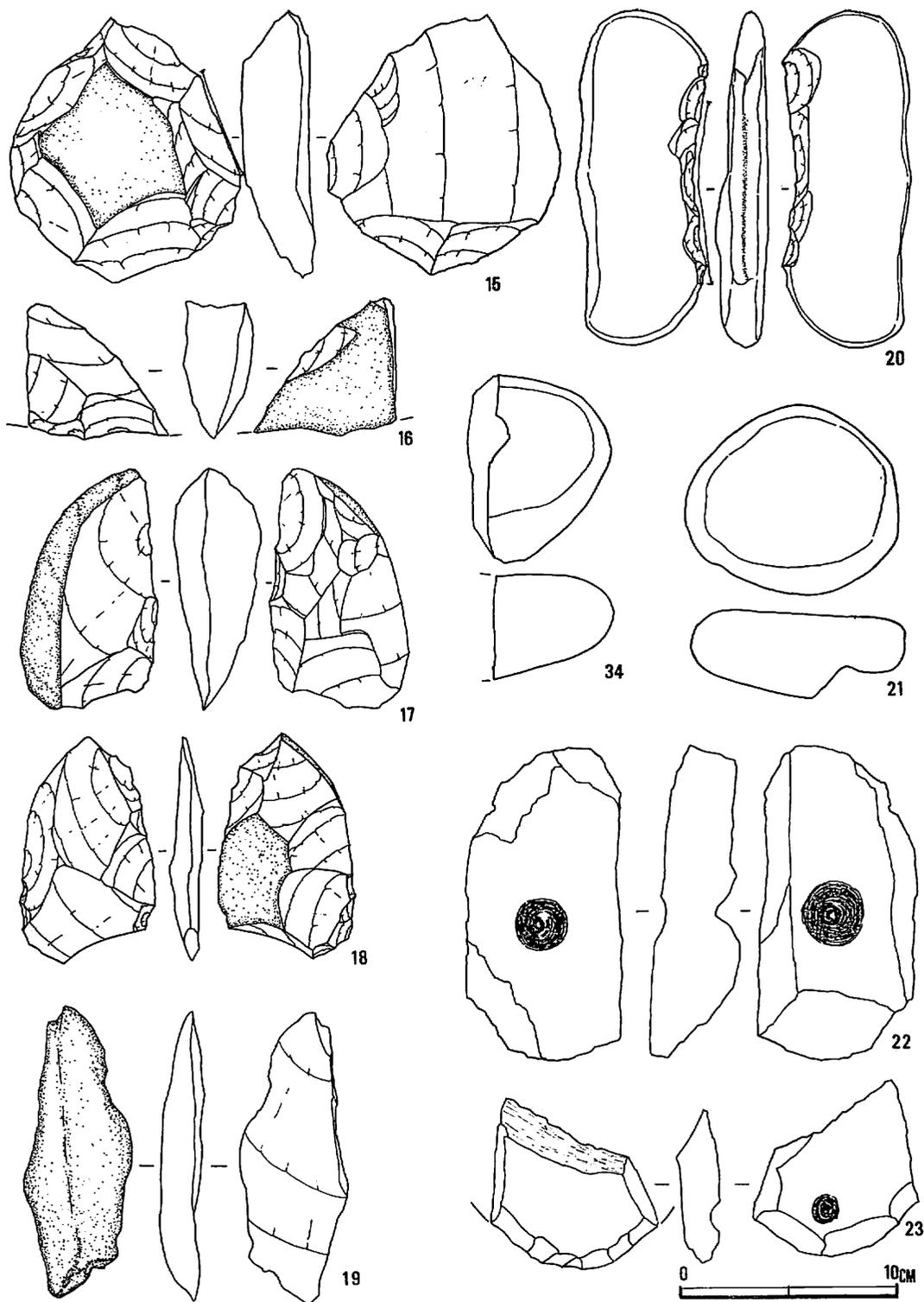
緑泥片岩製の石皿の一部である。表裏面は自然面を残しているが、皿状をなす傾斜面は良く研磨され著しく磨耗している。なお裏面には磨痕の残る凹みが1個存在する。

### スクレイパー（17、18、24）

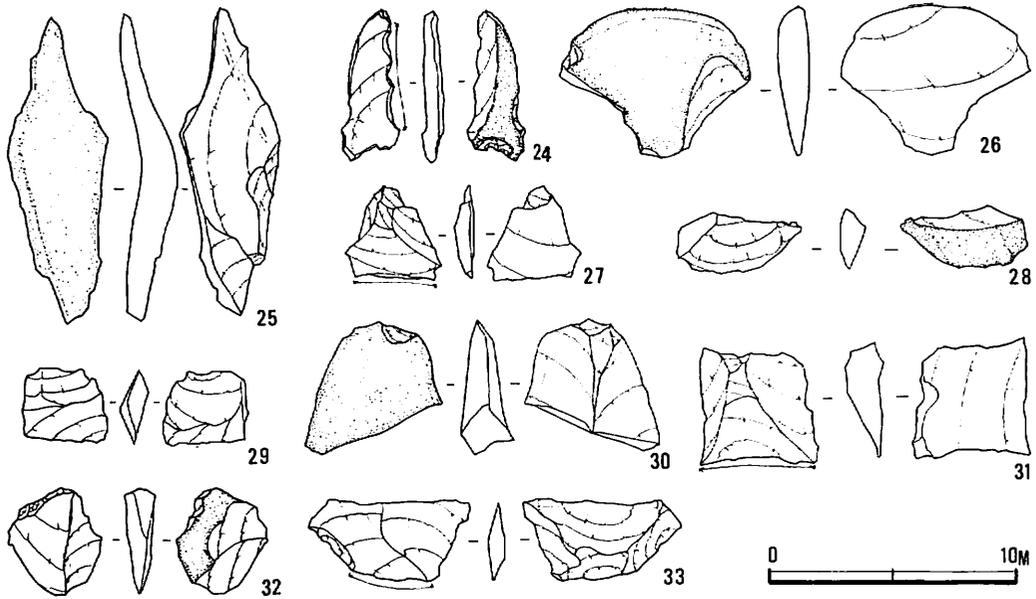
17、18は大型の剝片を素材として用い、両者とも自然面の残る部厚な側縁に対向する鋭角な部分を調整している。24は片面に自然面をもつ横長の剝片を素材としており、刃部は一方の側縁を鋸歯状に調整している。



第24図 姥ヶ沢遺跡出土石器実測図 (1/3)



第25図 姥ヶ沢遺跡出土石器実測図 (1/3)



第26図 姥ヶ沢遺跡出土石器実測図 (1/3)

石核 (15)

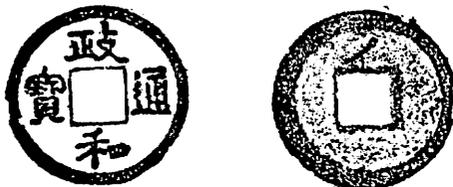
大型のほぼ円形を呈し、裏面は主要剥離面を大きく残している。表面には自然面を残しており、剥離は求心的に行なわれている。側縁の一边に使用痕が認められるが、横長の剥片を作出した石核であろう。

剥片 (19、25~33)

縦長の剥片の他、不定形の剥片が多を占むが使用痕をもつ剥片もある。19、25は大型で縦長の剥片であるが剥離の方向が異っている。それに25は打撃痕を除却している。27、31、32は一侧縁に使用痕が認められる。26、28、30、32は自然面を残している。27、29、31、33は自然面を残さないが、使用痕の認められる剥片である。

古銭

第27図は、調査区東隅から表採された鑄銭である。「政和通宝」は北宋(960~1127年)の末期、政和元年(1111年)に初鑄されている。本例の鑄上は良好で不純物、気包を含まない。方穿文字、等は明瞭である。裏面にはカタカナの「ノ」字状の背文がある。方穿の一边は7.2ミリ、全体の直径は24ミリを測る。



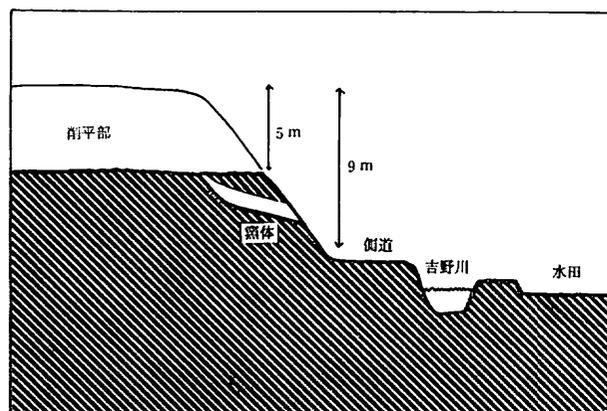
第27図 姥ヶ沢遺跡表採遺物 (1/1)

第3表 姥ヶ沢遺跡出土石器一覧表

図版番号	種 類	重量g	石 質	出 土 地 点	備 考	
第24図	1	打製石斧	435	安山岩	1号住居跡	
	2	”	230	”	調査区フク土	
	3	”	130	”	1号墳表採	
	4	”	45	”	1号住居跡	
	5	”	45	”	調査区フク土	
	6	”	135	”	”	
	7	”	85	”	”	
	8	”		硬砂岩	1号住居跡	
	9	”	155	”	調査区フク土	
	10	”			3号墳周溝	
	11	”	50	安山岩	調査区フク土	
	12	”	43	”	1号住居跡	
	13	”	69	”	調査区フク土	
	14	”	50	硬砂岩	”	
第25図	15	打製石器			調査区フク土	
	16	礫器	120	安山岩	”	
	17	打製石器	280	”	1号住居跡	
	18	”	95	”	調査区フク土	
	19	剝片	115	”	3号墳周溝	
	20	敲石	290	硬砂岩	調査区フク土	
	21	磨石		センリョク岩	1号住居跡	
	22	凹石		緑泥片岩	”	
	23	石皿		”	3号墳周溝	
第26図	24	スクレイパー	118	チャート	調査区フク土	
	25	剝片	80	安山岩	3号墳周溝	
	26	剝片	62	チャート	”	
	27	”	10	チャート	調査区フク土	使用痕
	28	”	11	安山岩	1号住居跡	
	29	”	10	ホルンフェルス	”	
	30	”	45	安山岩	調査区フク土	
	31	”		”	1号住居跡	使用痕
	32	”	20	チャート	3号墳周溝	
	33	”	15	安山岩	調査区フク土	使用痕
第25図	34	磨石		センリョク岩	”	

## 第V章（参考）姥ヶ沢埴輪窯跡群

姥ヶ沢遺跡は、周知の遺跡（江南No.1号）であり、縄文時代～古墳時代の集落跡とされている。埴輪窯跡の存在が明らかになったのは不幸にして、その埴輪窯跡の大部分が壊滅した後のことであった。第28図のスケッチは1980年に姥ヶ沢遺跡（第Ⅱ地点）の試掘調査時に作成したものである。遺跡の状況は、本来の台地面より5 m程下位に削平面があり、台地段丘面の中位まで削平が及んでいた。窯跡は削平面の西隅に位置し、崖面に窯体縦断面を晒していた。



第28図 姥ヶ沢第1号埴輪窯跡スケッチ

1号埴輪窯跡と呼んでおく）が、その後、工事関係者に話を聞く機会を得た。それによると「焼けた赤い土や土器の出たところが3カ所くらいあった。」ということであり、数基の窯跡が、1号窯の東側斜面に存在していたようである。さらに東側には谷津が入り込んでいたが、この部分も消滅している。

また西側の第2、3地点でも窯跡は検出されておらず、窯跡群は第1地点に中心を置いていたようである。第1号埴輪窯跡は1981年の段階で、削平面の整地に伴い埋没したという。発掘調査は行われていない。今、残るのは数片の埴輪片だけである。この埴輪片は6世紀中葉～後半頃の特徴を持っており、およその埴輪窯跡の操業時期を知ることができる。

窯体は、40°前後のかなりきつい傾斜角を持つ江南台地段丘斜面の下位から中位にかけて、台地を構成する礫層を穿って構築されている。窯体の長さは、約3 m。窯底の傾斜角は20°前後で、3～4 cm程度の焼土層が確認できた。第19図の埴輪片は、この焼土層上の窯尻に近い部分より検出されたものである。

窯体を確認できたのは、この1基のみであった（仮に本跡を姥ヶ沢第

## 第Ⅵ章 結 語

### 小 結

姥ヶ沢遺跡では各時代、各種類の遺構が存在していた事実は、調査以前より知られていたことである。今回の調査によって具体的な知見を得られたことは、遺跡の4分の1が未調査のまま消滅した今となっても重要な意味を持つと思われる。

#### 縄文時代

調査の結果、縄文時代の遺構は検出されなかったが多数の土器・石器を出土した。土器は早期より中期に渡り、以下の区類に分数できる。順次説明したい。

I群は燃糸文系土器群に比定され、1は夏島式土器に、2は稲荷台式土器に当てられる。本期の土器群は量に多少はあるが村内の荒神脇遺跡(1974)、塩前遺跡(1981)、野原久保遺跡(1982)<sup>(註2)</sup>南方遺跡(1982)で発掘により検出されており、他に表採可能な遺跡は十数箇所程掲げることができ<sup>(註3)</sup>る。江南台地域では本期の資料は未だ少なく、今後、資料の集積を待って遺跡の分布、立地など考えてみたい。

II群は田戸下層式土器に比定される。III群は条痕文系土器群を一括した。検出土器中もっとも点数が多い。a～c類に細別することができる。a類は器面を削り、半截、三截竹管により浅い沈線が施文される。千葉県城ノ台貝塚のc類とされる一群に類似する。b類は格子目状に沈線が描かれる。c類は半截竹管による沈線が施文される。久喜市高輪寺遺跡のVI類野島式前半とされる一群に類似する。本群の中でa類は子母口式に、b、c類は野島式に比定できるようだ。12は早期末～前期初頭の繊維を含む土器である。

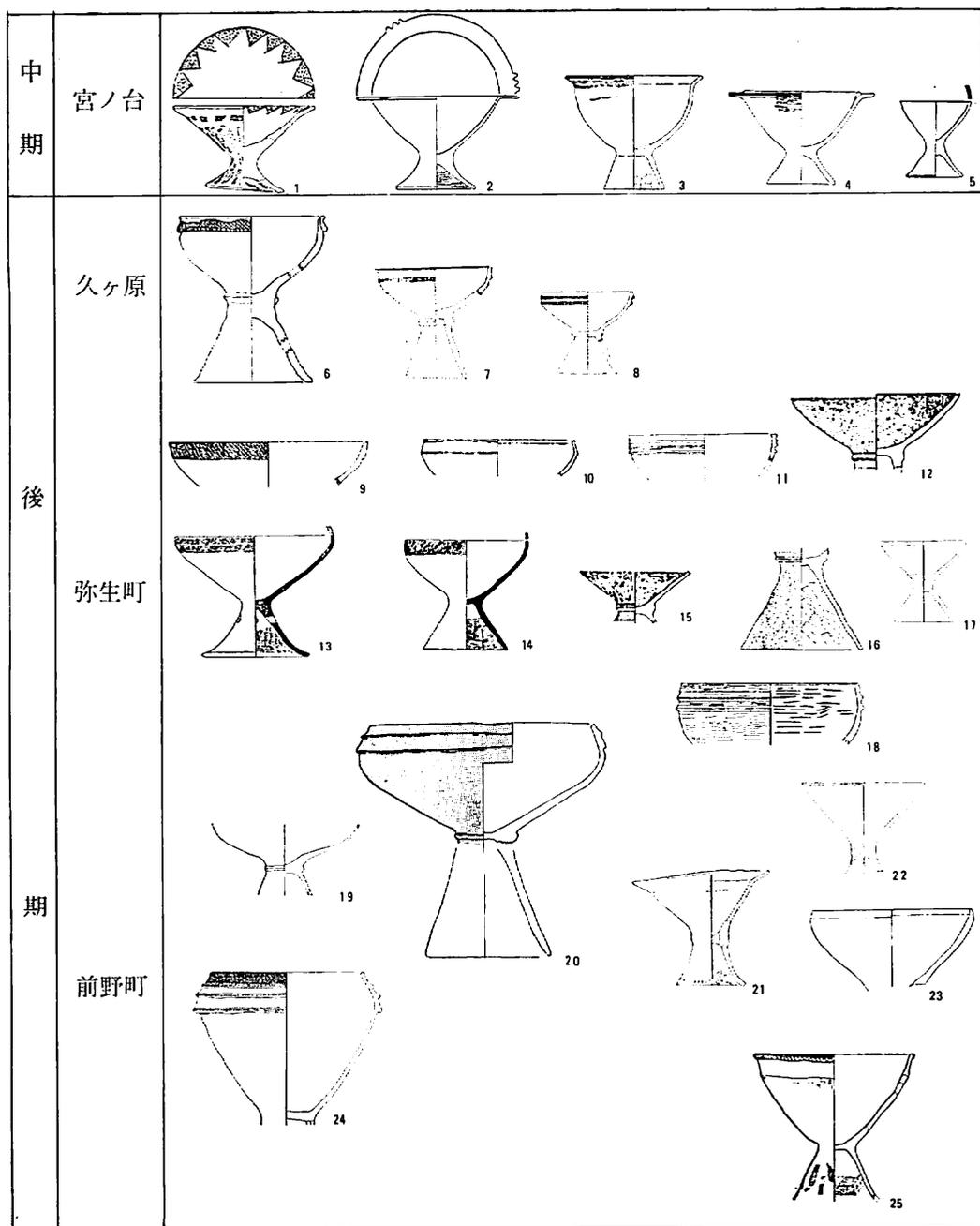
IV群は関山式土器に比定される。V群は黒浜式土器に比定される。VI群は諸磯式土器に比定される。A類は諸磯a式に、B類は諸磯c式に当てることができる。14は他のc式と施文のあり方が異っておりやや問題を残す。VI群は十三菩提式土器に比定される。

VII群は勝坂式に比定される。IX群は加曾利E式に比定される。EⅡ～EⅢ式が主体を占る。石器は早期に伴うと考えられる礫器が若干存在するが、中期に属すると考えられる短冊形を呈する打製石斧が大方を占めている。遺構こそ確認されなかったが、継続的な集落の存在を考えることができる。隣接する川本町舟山遺跡でも各時期の土器が検出されており本遺跡との関連を考える上で見逃せない。

#### 弥生時代

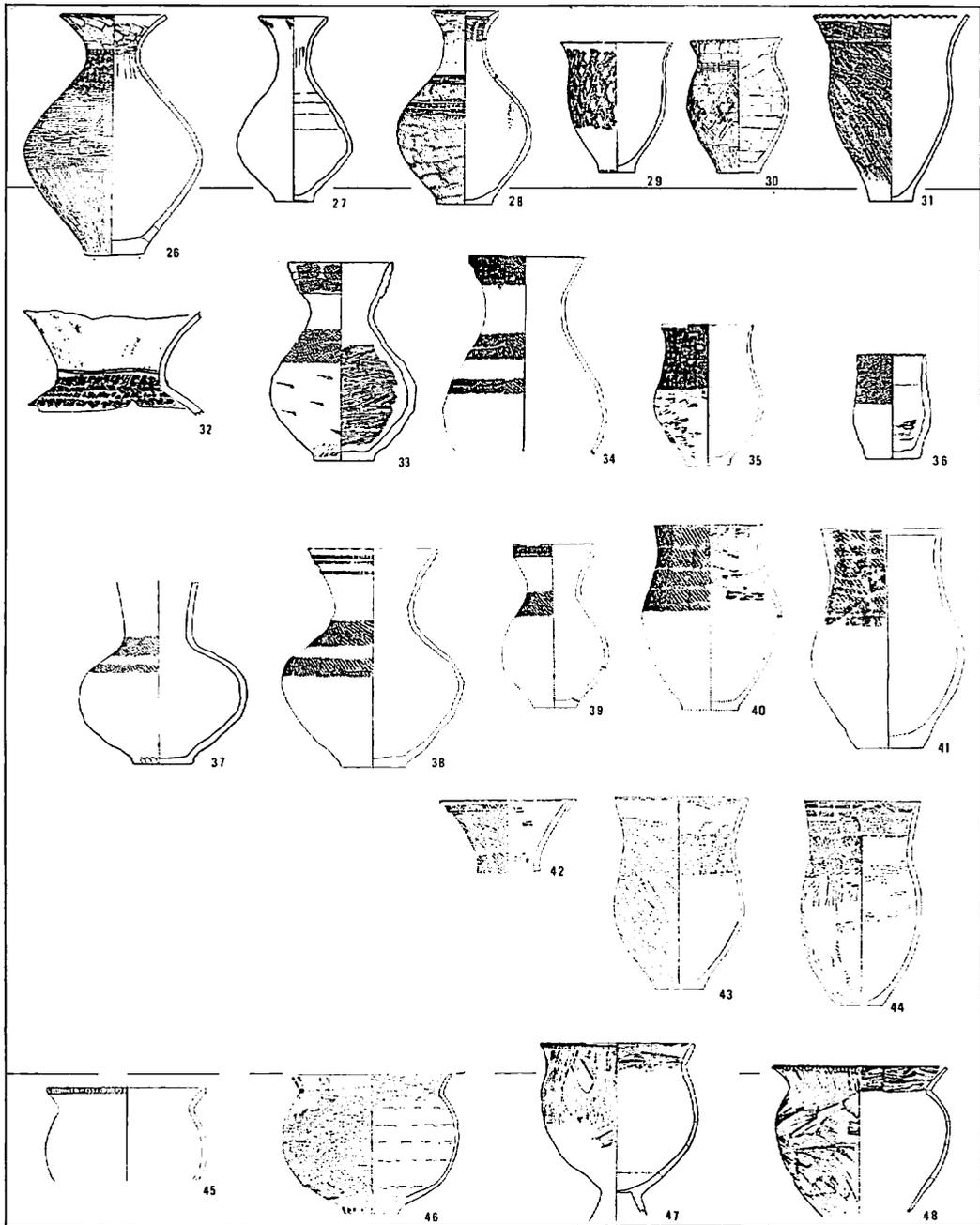
弥生時代後期の土器を発掘した遺跡は江南台地域ではほとんど知られていないが、これは調査例の少ないためと考えた方が妥当と思われ、今後に期するところが大きい。

唯一検出された住居跡は比較的整った方形プランを呈しており、他の後期の住居跡が円形、楕円形プランを呈する例が多いことと異質であるが東松山市岩鼻遺跡中原区、雉子山遺跡等の櫛描文系土器を出土した住居跡の中に方形プランを呈する例があるので本期の所産として良いであろう。炉の位置は住居中央より壁ぎわに移動しているようであり新しい時期の様相としてとらえられるかもしれない。本住居跡に伴う遺物は台付鉢形土器と土製勾玉がある。台付鉢形土器は縄文で飾られてはいないが、坂戸市花影遺跡、東松山市駒掘遺跡等の出土例に系統的な推移を窺える。また土製勾



第29図 弥生時代鉢形土器集成図

寄居町 用土平遺跡 1、4、26、30 富士見市 南通遺跡 2、28、31 朝霞市 台ノ城山遺跡 3、5、27、29 坂戸市 花影遺跡2号方形周溝墓 6、36 花影遺跡6号方形周溝墓 33 東松山市 駒堀遺跡5号住居跡 7、12 駒堀遺跡1号方形周溝墓 9、11 駒堀遺跡11号住居跡 10、15、16、37、40 川越市 霞ヶ関遺跡1次1区12号住居跡 8 霞ヶ関遺跡2次1区12号住居跡 34 霞ヶ関遺跡1次3区2号住居跡 35 大宮市 大宮公園遺跡 13、14



東松山市 吉ヶ谷遺跡 17、39 桶川市 砂ヶ谷戸Ⅱ区1号住居跡 18、32 行田市 池守遺跡沼地№6、19 江南村 姥ヶ沢遺跡1号住居跡 20 浦和市 井沼方遺跡3区方形周溝墓 21 井沼方遺跡2号住居跡 24、45、46 滑川村 船川遺跡 22、42、43、44 大里村 船木遺跡 23、38、41 富士見市 栗谷ツ遺跡1号住居跡 25、47、48

※各報告書より転載、縮尺不同

玉は中～後期に多く見られる遺物である。住居跡覆土上層からは和泉期の遺物を混入しているので弥生後期でも終末に近い時期に当たると推定される。

本遺跡の下位に広がる低地は荒川の下位段丘とされる土地で自然堤防状の高まりを除けば、起伏の少ない平坦な地形を呈している。本遺跡に集落を営んだ弥生人はこの地に水稲耕作を行ったのであろうか。周辺に適当な谷田を作る場所が無く他に耕作地を考えるのは難しい。弥生時代後期の終りに近い段階に低地帯への働きかけを指摘できそうである。

台付鉢形土器は住居に伴う唯一の土器で、他遺跡との検討から弥生後期の所産と考えるに至った。第29図に掲げたのは弥生中～後期の台付鉢形土器と供伴関係、又は、同時期と考えられる壺、甕とおよその変遷を示したものである。鉢形部の形態の差から二形態に類別可能である。本器の類例は花影、駒堀、砂ヶ谷戸遺跡などに見られる。口縁外面には輪積痕風に仕上げた隆帯を巡らせ、やや内彎する鉢形部に高い脚部を接合し、接合部に凸帯を巡らせるなどの点が近似している。縄文系の土器と伴出することが多いが、鉢形土器自体に縄文の施されることは少ない。一方櫛描文系の中に類例を求めることが可能だとも指摘されている。

櫛描文の施された甕形土器は全体の殆どであるが、<sup>(註6)</sup>ほぼ全体を知ることができる。小形の甕形土器で箱清水式、樽式の櫛描文系土器である。北武蔵地方で櫛描文の施される土器というと、江南台地を含めた比企丘陵周辺に分布する岩鼻式があるが編年、分布地域、型式への疑問など問題を多く抱えている。岩鼻式の呼称がなされた時比企地方に検出される櫛描文土器との意味合いが強く、他地域との比較可能な資料を多く混在していたのは無理からなかった。事実、標式遺跡とされる岩鼻遺跡出土土器には樽式、箱清水との区別が難しい資料を数多く含んでいる。<sup>(註4)</sup>その後、代表的な土器と呼称が先行してしまい、実体が必ずしも明瞭となっていない。現在の研究状況、問題点は石岡・柿沼氏によってよく整理されている。

本遺跡出土土器がもっとも近い土器群として比較するに足るものは先の箱清水、樽式である。両土器群は編年の位置がほぼ並行し、土器の組成、細部にも共通する部分が多く、いわば地域をたがえて存在する同一の土器のようである。本遺跡出土土器との共通点を掲げると、文様では口縁部と体部に波状文が施文されるが、口縁部では波高が高く乱れが出ることがある。体部は口縁と異り波状文はだれている。その後2連止め簾状文を1段施文している。体部下位は無文でヘラナデが施される。これは箱清水式、樽式B類に共通する。なお2連止め簾状文の例は東松山市駒堀遺跡4号住居跡に見ることができる。形態的な特徴は口縁が直線的に広き、口唇が内そぎ状になっている。やはり箱清水式、樽式B類に認められる。他に比較すべき資料がないため、現状では両型式に比定可能であるが区別はできないといえる。なお図版10一下の鉢形土器も伝承品であるが、同時期のものと考えられる。

### 古墳時代

第3号墳は墳丘は消滅しており周溝も一部分が遺存していた。周溝底部からは6世紀前半代の特徴を持つ土師器環が出土している。埴輪片は表土・覆土より検出されたのみで、本墳には埴輪は樹立されていなかったようだ。墳丘を残す1号墳は周溝断面より採取した遺物に6世紀後半代の土師器環と埴輪片がある。この埴輪片は下位の段丘斜面に立地する窯跡の埴輪と特徴が類似しており、本窯跡を含めた周辺地域で焼成されたものであろう。将来台地上の調査により工房跡・集落等の発見が予想され、権現坂埴輪窯跡群と関連して生産期間の把握が当面の課題となろう。

## 註

- 註1 中島利治 野部徳秋 1974 『下新田遺跡 荒神脇遺跡 熊野遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告 第22集  
本文中には図版・写真等の掲載がなく、説明も簡単なため詳細は不明
- 註2 1982年本教育委員会により調査を行った。
- 註3 1982年 本教育委員会により調査を行った。
- 註4 資料を保管している埼玉県立歴史資料館にて実現した。
- 註5 石岡憲雄 1982 『「吉ヶ谷式」と「岩鼻式」土器について』埼玉県立歴史資料館研究紀要 第4号  
柿沼幹夫1982「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』 第5号
- 註6 註5に同

## 引用・参考文献

### 縄文時代

- 青木秀雄 1979 『高輪寺遺跡』 久喜市教育委員会
- 安孫子昭二 1967 『多摩ニュータウン遺跡調査報告 IV』
- 梅沢太久夫 新井端 1982 『塩前遺跡』 江南村文化財調査報告 第3集
- 小川良祐 柿沼幹夫 1967 『出口 前島 島ノ上 芝山』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第12集
- 金井塚良一 植木弘 1980 『金平遺跡』 嵐山町教育委員会
- 川崎義雄 1976 『田中谷戸遺跡』 町田市田中谷戸遺跡調査会
- 小林達雄 1966 『多摩ニュータウン遺跡調査報告 II』
- 斎藤基生 1978 「中期の石器」 『貫井』 小金井市文化財調査報告書 第5集
- 城近憲一 笹森健一 1976 『志久遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告 第31集
- 杉原荘介 芹沢長介 1955 『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』 明治大学文学部研究報告 考古学 第2冊
- 鈴木秀雄 1980 『卜伝』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第25集
- 谷井彪 1980 『舟山遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査報告書 第9集
- 土肥孝 1975 『針ヶ谷北通遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告 第26集
- 長井茂春 寺内良喜 1979 『八幡山遺跡』 世田谷区八幡山遺跡調査会
- 三友国五郎 野野靖寿 1974 『関山貝塚』 埼玉県埋蔵文化財調査報告書 第3集
- 宮崎朝雄 1980 『甘粕山』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第30集
- 山本良知 1980 『足利遺跡』 久喜市教育委員会
- 吉田格 1955 「千葉県城ノ台貝塚」 『石器時代』 第1号

### 弥生時代

- 青木義脩 岩井重雄 小倉均 1981 『大北遺跡 井沼方遺跡』 浦和市遺跡調査会報告書 第15集
- 井上唯雄 柿沼恵介 1977 「入門講座 弥生土器 北関東 2」 『考古学ジャーナル』 No.141
- 井上唯雄 柿沼恵介 1977 「入門講座 弥生土器 北関東 3」 『考古学ジャーナル』 No.142
- 井上唯雄 柿沼恵介 1978 「入門講座 弥生土器 北関東 4」 『考古学ジャーナル』 No.145
- 井上尚明 1980 「埼玉県における弥生時代研究の現状の問題点」 『情報』 7 埼玉県考古学会
- 白田武正 1980 「佐久地方の後期弥生式土器について」 『信濃』 第32巻4号
- 太田文雄 1980 「北信濃の弥生後期編年について—田草川尻遺跡出土土器を中心として—」 『信濃』 第32巻4号
- 小川良祐 1975 「大宮公園内遺跡発掘調査報告」 『埼玉県立博物館紀要』 第2号
- 金井塚良一 1965 「埼玉県東松山市吉ヶ谷遺跡の調査」 『台地研究』 第16号
- 金井塚良一 1972 『中原遺跡』 東松山市文化財報告 第10集
- 金井塚良一 1977 『東松山市雉子山遺跡第二次・三次調査』 東松山市史編さん調査報告 第8集

- 金井塚良一 1981 「東松山市の原始・古代・中世研究の現状と問題点—弥生時代—」 『東松山市史』 資料編第一巻
- 神部聖語 今井敏彦 佐々木恵子 1979 『引間遺跡』 高崎市文化財調査報告書 第5集
- 栗原文蔵 1973 『岩の上 雉子山』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第1集
- 栗原文蔵 1973 『駒堀』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第4集
- 群馬県考古学談話会 1982 『弥生時代終末期の土器 四世紀の土器』 第3回 三県弥生時代シンポジウム 群馬県資料
- 小出輝雄 佐々木保俊 飯塚雅子 1981 『針ヶ谷遺跡群 IV』 富士見市遺跡調査会報告 第13集
- 斎藤国夫 1981 『池守遺跡』 行田市文化財調査報告 第12集
- 埼玉県立本庄高等学校考古学部 1981 『いぶき』 第12号
- 埼玉県 1982 『新編埼玉県史』 資料編2
- 笹沢浩 1977 「入門講座 弥生土器—中部・中部高地 2」 『考古学ジャーナル』 №133
- 笹沢浩 1977 「入門講座 弥生土器—中部・中部高地 3」 『考古学ジャーナル』 №134
- 笹沢浩 1978 「中部高地型櫛描文の系譜」 『中部高地の考古学』
- 曾田寿彦 吉田章一郎 1963 「埼玉県寄居町用土弥生式遺跡調査概報 第3次」 『東京大学教養学部人文科学紀要』 第28輯
- 田中義昭 1976 「南関東における農業社会の成立をめぐる若干の問題」 『考古学研究』 37号
- 谷井彪 1974 『南大塚 中組 上組 鶴ヶ丘 花影』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第3集
- 千曲川水系古代文化研究所 1981 『箱清水式土器—櫛描文と鉄丹の文化』
- 中島利治 1976 「比企地方の弥生土器」 『北武蔵考古学資料図鑑』
- 中島宏 今泉泰之 1982 「池上遺跡発掘調査概報」
- 長野県 1982 『長野県史』 考古資料編全1巻(2)
- 仲野紀己子 1980 「弥生時代の遺構と遺物について」 『中里前原遺跡—第一次』 与野市中里前原遺跡調査会
- 福田敏一 1981 「弥生時代の集落」 『中里前原遺跡』 与野市文化財調査報告 第5集
- 宮崎朝雄 谷井彪 1975 『台ノ城山』 朝霞市教育委員会
- 吉川国男 鈴木秀雄 1977 『砂ヶ谷戸 I・II 楽上』 桶川市文化財調査報告書 第9集
- 古墳時代
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」 『考古学雑誌』 第64巻2号
- 小淵良樹 1980 『広木大町古墳群』 埼玉県遺跡調査会報告 第40集
- 塩野博 1972 『鹿島古墳群』 埼玉県埋蔵文化財調査報告 第1集
- 寺社下博 1981 『鍛塚古墳』 熊谷市教育委員会
- 水村孝行 1982 『桜山窯跡群』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第7集
- 宮崎由利江 今泉泰之 1981 『割山』 深谷市割山遺跡調査会
- 若松良一 山崎武 1981 『下間遺跡』 鴻巣市文化財調査報告 第1集
- 若松良一 山崎武 1981 『生出塚遺跡』 鴻巣市文化財調査報告 第2集

## 随 想

### 森を守るひと

#### はじめに

私たちの気づかぬうち、そして気づいたとき、私たちをとりまく環境は、そのたたずまいを、いわば調和を急速に失いつつあることを知るだろう。不均衡、この言葉が現在の自然環境を良く表わしている。自然自体、変化の歴史は人間の参加した歴史よりはるかな時の流れを経過してきているが、いま人間の動きかけによる自然の変動は甚大、急速であり、その緩急のありさまには目を瞠るばかりである。荒川の右岸、比企丘陵の北側に位置し県北の中核都市である熊谷市に隣接する江南地域も例に漏れない。ここに身近に残る自然を改めて見つめることは自然と開発と人間生活の面で意義のあることと考えられ、また当然であるが、この問題は論議され、解決に向って発展されなければならないと考える。ここでは山林＝里の森を取り上げ風土をみたい。

#### 森の誕生

いま、私たちの見ることができる大地の姿が、はじめて現在に近い形を形成したのは地質学の時代という第四期更新世（200～1万年前）のことである。この時代の中を人類の祖先は4～5回の氷河期に相遇しながらも、しだいに自然への適応力、生活力を向上させ生き抜いてきた。人間の文化と歴史が始ったのであった。文化史の側からは旧石器時代・先土器時代ともいわれ、江南地域でも数カ所で当時の遺物が発見されている。当時の気候は概して冷涼で、低平な丘陵地帯まで針葉樹林が発達し、台地は蒼茫とした草原に被われ、マンモス象、ナウマン象、オオツノジカ等の大型動物が生息していた。河川は深く台地を削り、海は遠くまで後退し大陸とは陸橋で結ばれていた。人々は天然の洞穴や台地の縁辺にテント的な簡単な家をつくり、動物の群れを追って移動する暮らしをしていたと考えられている。また、火山活動の活発な時期もあり、日本列島の台表的な火山は噴火を繰り返していた。なかでも現在の鹿児島湾の奥部はかつての蛤良火山のカルデラで、南側には今でも桜島の噴煙を見ることができる。約21000年前に起った大噴火では噴出物を成層圏まで噴き上げた。鹿児島湾周辺のシラス台地はその名残りである。日本列島を被った火山灰は現在でもそれを識別することができる。空より降りしきる火山灰の下で暮していた人々にとって文字どおり暗い時代であった。関東ローム層と呼ばれる赤土もこの時代に降り積った火山灰で平均数mの厚さで台地を被っている。時折、この赤土の中より発見される黒曜石などで作った石器は当時の生活用具であり、その入念な加工技術には機能的な美しささえ感じられる。

#### 森に生きたひと

旧石器時代の終末から気候は温暖化に向い、針葉樹林は山地・山岳部へ後退し、次の縄文時代にかけてクス、シイ、カシ等に代表される照葉樹林とコナラ、クスギ、クルミ、クリ等の落葉広葉樹林が広く発達し、全体に暖温帯の植生に日本列島は被われるようになった。草原に住んでいたナウマン象やオオツノジカに替り、森に住むシカ、イノシシ、タヌキ等の小動物が現われ、陸に上昇した遠浅の海にはハマグリ、カキ等の貝類が良く成育し、カツオ、マグロ等の回遊も多くなった。こ

のような環境の変化は従来の移動生活をしてきた人々にとって、社会生活などの面で大きな転換期を迎えさせることになる。

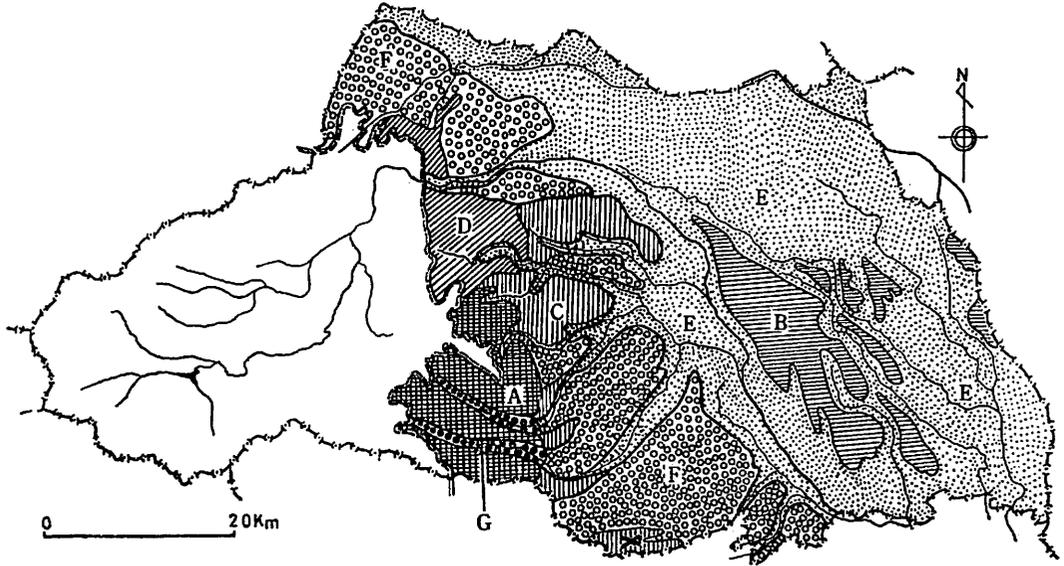
縄文の人々は森の民であった。人々は沿岸部や内陸部の落葉広葉樹の茂った台地上に定住し、ムラをつくり竪穴住居に住むようになった。森は動物、果実、根菜などの収穫の場であり、生命・安全のよりどころであった。縄文時代は約 10000年の長きに渡り比較的安定した生活を送り、文化的にも完成をみていたようである。信州・関東・東北地方などは縄文文化の昇華した地域である。この時代に培われた感覚は次の時代に移り変わっても、強い影響力を持ち続け日本文化の奥深いところに残存しているといわれる。江南村には縄文時代の遺跡は約30カ所を数えることができる。この数は10000年の時間の中では、ほんの一時期を代表しているにすぎず欠落する時期が多い。

### 野に生きたひと

縄文時代も約2000年前に社会の矛盾、生活の倦怠が生じた頃、大陸より水稲耕作の技術を持つ人々が海を渡って来た。豊かな、そして安定した生活を望む人々の間に、この新来の生活習慣はしだいに西から東へと受け入れられていった。前代の社会生活の基盤を狩猟採取の段階から農耕の段階へ転換させる大きな変革の波であった。弥生時代はこうして始まる。

森に生活の基盤を置いていた人々は水稲耕作に適した低地へと活動の場を移すようになった。洪水による流失を厭わず低地へ住んだ人々にとって稔りへの魅力と、天候災害への恐れと、治水への努力は大きいものだったにちがいない。これらの葛藤の中から前代とは異った社会状況が生れるに至った。関東地方に弥生文化の波及した時期は弥生時代の中頃とされている。寄居町用土平遺跡、岡部町四十坂遺跡、熊谷市池上遺跡は当時の先駆的遺跡として掲げることができる。稲作の民となった縄文の人々にとって、依然として森は恵みと守護の対象であり、その交流を絶やすことはなかった。理由のひとつには水稲耕作が安定せず、新天地と収穫を争奪仕合った時期が暫く間続いたからとされている。ムラの周囲に防御の濠を巡らす施設を備えた時代は弥生時代の一時期と、中世の戦国時代だけであるとされている。当時の社会状況がいかに流動的であったかわかる。そして、米作りが安定し、力を蓄えた者が現われると彼の墓所として古墳が造営されるようになる。この時代は、古墳時代といわれ、ムラを超えた地域的なまとまりが生れ、国の意識が生れ始めるのである。

古墳時代まで、暖温帯の森はあまり変化をみせなかったようである。縄文時代以来の森はコナラ、ミズナラ、シイ、アラカシ等の繁茂する紅葉の美しい森だったとされている。この森は現在でも部分的に遺存し、埼玉県下では台地縁辺、斜面に多く見ることができ、数カ所は天然記念物に指定されている。現在これらの樹種は児玉、比企、岩殿、毛呂等の丘陵や、本庄、櫛引、江南、東松山、入間、川越、大宮等の台地部に見ることができ（第30図）、この周辺に縄文時代以来の遺跡が多いことと付合して興味深い。この森が盛んに切り拓かれたのは弥生時代から古墳時代以降のこととされている。だが、祖先は、むやみに伐採せず、祖霊、精霊の住む森や山は保護され人手の入ることがなかった場所もある。これは神木や神体山として各地に残されている。この風土は後世へ受け継がれていくべきものである。縄文の森は、極相林、または自然植生といわれ、天然自然のまま暖温帯の気候に成育する最も安定した森である。ここに成育するのに最適の樹々は、たとえば縁の埼玉を守る場合、シイ、カシ、ケヤキ等が良く合い、ふるさとの森にふさわしいとされてい



第30図 埼玉県の暖温帯林地帯区分（永野巖1980）

- A. 暖帯要素が最も多く、典型的なスダジイ・ヤブコウジ群集とモミシキミ群集の発達域
- B. 一部にスダジイ・ヤブコウジ群集をもなったシラカン群集の発達域
- C. 一部にシラカン群集をもなったアラカン群落の発達域
- D. モミ林をもなったアラカン群落の発達域
- E. ケヤキ型のシラカン群集発達域
- F. シラカン群集発達域
- G. ウラジロガシ—サカキ群集発達域

る。古墳時代以降、奈良・平安時代と律令国家の経営と共に森は各地で山奥まで切り拓かれ、平城京・平安京や、全国の国分寺、国府などの大建築に利用された。

#### 自然をつくったひと

かつての縄文の森は減少し前述の社叢や神山等に残るのみとなった。代りに山野にはアカマツ、スギ、クヌギ、コナラ等の二次林がススキ野の中に発達してきた。この二次林は代償植生といわれ、現在私たちの周囲に残るアカマツの林、雑木林等の里山がこれに当る。いわゆる武蔵野の林はほとんどそうである。この里山は堆肥として落葉を掃き集めたり、薪炭材に利用するなど時々伐採したりする一定のサイクルを通して、絶えず人為的な影響の下でのみ存続できる樹林であって、人間の管理が薄れるとたちまち荒廃してしまい、極相林へと長い時間をかけて移行していく。このような里山は開発の跡に残された史跡的な意味を持ち合わせており、三芳町から所沢市にかけて広がる三富地区は、開発と里山のみごとな共存により旧跡に史定されている。しかし、多くの里山は荒廃の一途にあるのが現状である。一方で無計画な、無秩序な森の乱開発はハゲ山を増すだけでなく、土砂崩壊・耕土流失など災害を呼び起す原因になった。この経験の積み重ねから森の保護育成に気づいたのは中世に入ってからであった。まだ森の変容はゆっくりで森自身の回復力が追いついていた。しかし、人間の力が上回った時、森は激変した。

人間は土地や水面に働きかけて生活資源を獲得し、長い歴史を歩みつづけてきたのであるが、その働きかけによって土地や、水のあり方は幾多の変化を受けている。土地が田畑となり、特定の樹種の茂る森林になり、河川の流路を整え、あるいは海岸が塩田になるのは単に自然が与えたままの

姿を受けとっているのではなく、荒しい自然の暴力の一面を制御しつつ、生活空間を変えるための努力を積み重ねてきた結果である。いわば現在、私たちの見ることのできる日本の郷土の姿、森を含めた景観は人々の倦むことのない努力によって築き上げられた文化遺産であるといえる。厳密な意味でいえば日本の自然、特に植生については多くの人間の手が加った半自然の状態といえる。全く人間の介入していない場所は原始林等としてわずかに残るだけだ。一方現在の開発は山を切り崩し、海を埋めたてる水準まできている。1980年の森林面積は世界の陸地面積の40%であるという。森はかつてない速度で失われ、減少化は少しも止んでいない。日本も同様の傾向を示している。去過は開発の歴史であったようだ。今後も開発は当然とされよう。しかし、調和のある開発を望みたい。その過程で新たな環境を創造することが積極的な解決方法になると思われる。先人が社叢にかつての森を残しながらも、純日本的といわれる田園景観を造り出したように。

### 森のたまもの

縄文時代以来、人間は森と共に生活を共受してきた。だが森の恵みは古代人にとってだけではない。科学的な目で見れば空気の浄化を主にしているのは海と森林である。現在、人間が社会生活を開始して以来かつてなく空気の汚染を増進させている。都市では森林の減少のため、併せて種々の排気ガスのため空気の浄化が緩慢で、その汚染度を重視しているのは周知の事実である。さまざまな意味において森は都市のオアシスであり、生活空間として不可欠である。防災保安の面、農業の面、治水上也重要である。歴史を振り返ると、根張の強い常緑樹や落広葉葉樹は崖面や急斜面にも成長できた。先人は土砂の崩落を予想して、このような場所の樹々を切ることはなかった。さらに植林は機械的になされるのではなく尾根筋、谷筋には自然のままの樹々を残して植林することが森林保全に有益であることを知っていた。その見識は見直したい。また生活空間として森を見るなら森に生きるリンドウ、ユリ、キキョウ等の植物、モズ、ウグイス、セキレイ、タヌキ等の動物・昆虫は自然の中で命を育まれる実例として体験でき、対話することのできる魅力的な伴侶であり、教育者ともいえる。その郷土景観・肌触りは人々の心に安らぎを与えてくれる。いこい安らぎをうるため、また、それを知るためにも人工物でない自然の姿は子供たちの行動範囲程度の身近にあって欲しいと思う。人が木によりそって「休む」という文字が生れている。失われようとしている大切なものが何人であるのか、多くの人に気づいてもらいたい。

### 森の中の遺跡

目を江南の地に移すと森の70%以上が平坦で起伏の少ない江南台地上に集中している。こうした土地は本地域に限らず開発には最良の地形であるため、同様の地形を呈する土地はどこでも開発が進んでいる。第3図を参照していただきたい。これは昭和54年の航空写真と国土地理院の2.5万：1の地形図及び現地踏査に基づいて作成した森の分布図である。森の遺存状況が良く窺える。森は人手の加った里山がほとんどで、スギ・アカマツ・ヒノキの林とコナラ・クヌギを混じえた林が主体を占めている。特に西部地域にはアカマツの発達が良い。段丘面・斜面・社叢には照葉樹、落葉広葉樹が残っている。千代地区の飯玉神社にはシラカシ・スダシイ・サカキ等の木立が良く保存されている。また小江川地区には和田川の低地を一望にできる場所に樹齢800年以上とされるシイの大木がある。傍には小さな祠が祀られている。かつてのムラの「よりしろ」として人々の心の中に

たしかに存在していたにちがいない。昭和33年、村の天然記念物に指定された。江南台地中央部は市街化区域に指定され開発を受けている。この市街化区域をとりまく森のほとんどは埼玉県環境部により開発について慎重に検討し、保全に努力することを要求される制限区域として評価されている。また江南の場合この台地上は埋蔵文化財の宝庫である。台地上の遺跡数は160カ所を越え、板井一立野古墳群、野原古墳群、柴一寺内廃寺、千代一上杉館、野原一増田館、成沢一行人塚古墳群のように外見の形状から性格の顕らかな遺跡が数多く存在する。この中でも県指定史跡塩古墳群、県選定重要遺跡野原古墳群、権現坂埴輪窯跡群、高根横穴墓群、村指定史跡行人塚古墳群はみな森の中に保存されている。ちなみにこれらの史跡の面積は20.13km<sup>2</sup>で村面積の0.6%を占める。また現状の顕らかでない集落跡等の埋蔵文化財包蔵地は各所にあり、台地域での開発は先の埋蔵文化財の破壊を伴う可能性は少なくない。自然、埋蔵文化財とも後世に伝えていかなければならない大切な遺産であり、両者を合わせ持つ森は注目されて良い。江南村を含めた大里・児玉郡の北埼玉地域は県南地域のような都市化による爆発的な開発の進展に比して、それが緩やかであったため自然埋蔵文化財とも消滅に瀕する程には至っていない。後進性が埋蔵文化財を保護したことになるが、今後この状況容易には覆ることを、また開発と保存の対応は種々の困難がつきまとうことを予想できる。だが、都市化と共に歩んできた地域の労苦を反面教師とし、過去の開発の中から教訓を見つけて、これから行われようとする開発と保護保存について、調整を行う余地が残されていると思われる。そこには一般的な都市化の肯否も問われなければならないと思う。これらの点については関係識者の御教示を賜りたい。

### 森を守るひと

私たちは自然も遺跡も遠く出かけて対面するばかりでなく、身近にあってこそ意義のあるものだと考えたい。森も埋蔵文化財も失ってしまってからでは手遅れである。森は一旦破壊を受けると回復までには多大の労力、費用、時間を必要とする。埋蔵文化財も同様に破壊されたら最期、その価値、意義、つまり祖先の生活の証拠は永久に消されてしまう。文化遺産を失うことは心のよりどころを持たない根無草の民族になりかねない。第2次大戦において、ナチスヒトラーがポーランド侵略に際して多数の文化遺産を略奪し、破壊したのは何を目的としたのか良く知られた話である。現在の保護体制に問題が無いわけではない。それは文化財は何故大切なのか説明され尽くしてはいないからだと思う。また、国連教育文化機関（ユネスコ）は自然と文化財に関して多くの勧告・条約を採択し、各国にその履行を要請しているが、日本はいまだに国際的視野に立って各国と手を結ぶに至っていない。これは各国が比准している5つの条約の中で、日本の比准した条約がないという立ち遅れに表われている（1982年12月現在）。

私たちの生活の痕跡も未来には遺跡となるだろう。人間が生活を続けていく限り文化遺産は存在するかもしれない。だが現在の状況では私たちの世代のうちに、あらかたの文化遺産が消滅するだろうことは予想に難くない。私たち自身のために、開発と調和させて保存を考えることが必要であろう。それは名も知れぬ祖先の努力と生き様に敬意を払うことにもなると思われる。私たちのためだけでなく過去の人々がそうであったように、子孫のためにも自然と文化遺産を後世に伝えたい。この心と共に。

## 参考文献

- 永野巖 1973 「埼玉の植生」 『埼玉の文化財』 第12号  
永野巖 1979 「梅園神社のスダジイ林」・「南川のウロジガン林」 埼玉県指定文化財調査報告 第11集  
永野巖 1980 「埼玉県の植生（予報）」 『埼玉県市町村誌』 第20号  
古島敏雄 1967 『土地に刻まれた歴史』 岩波新書・657  
塚田松雄 1974 『花粉は語る』 岩波新書・910  
湊政雄・井尻正二 1976 『日本列島 第三版』 岩波新書・963  
丸野内楳 1976 『縄文杉は何を見たか』 現代教養文庫・905 社会思想社  
上山春平 1976 『深層文化論序説』 講談社学術文庫 93  
田村説三 1978 「埼玉の植生」 埼玉県動物誌 埼玉県教育委員会  
鈴木秀夫 1978 『森林の思考・砂漠の思考』 NHKブックス 312  
安田喜憲 1980 『環境考古学事始』 NHKブックス 365  
姫田忠義 1980 『樹林風土記』 未来社  
前田保夫 1980 『縄文の海と森』  
飯沼二郎 1980 『日本の古代農業革命』 ちくまぶっくす 27  
只木良也 1981 『森の文化史』 講談社現代新書  
西田正規 1981 「鳥浜村の四季」 アニマ3月号 平凡社  
日本ナショナルトラスト編 1976 「鎮守の森」 『自然と文化』 76秋季号  
日本ナショナルトラスト編 1782 「樹」 『自然と文化』 82夏季号  
埼玉県環境部 1982 『埼玉における身近な緑の評価』 『環境白書』 一昭和57年版一  
木原啓吉 1982 『歴史的環境』 岩波新書 216  
佐々木高明 他 1983 『稲と鉄』 日本民俗文化大系 3 小学館  
満久崇麿 1983 『木のはなし』 思文閣出版  
善本知孝 1983 『木のはなし』 大月書店



江南・塩

# 版 图



姥ヶ沢遺跡の現状 1982.10



遺跡遠望



調査区全景





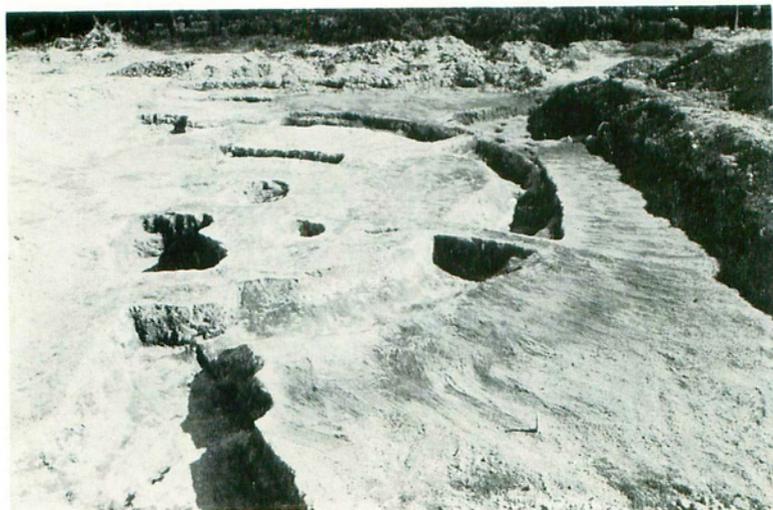
確認状態



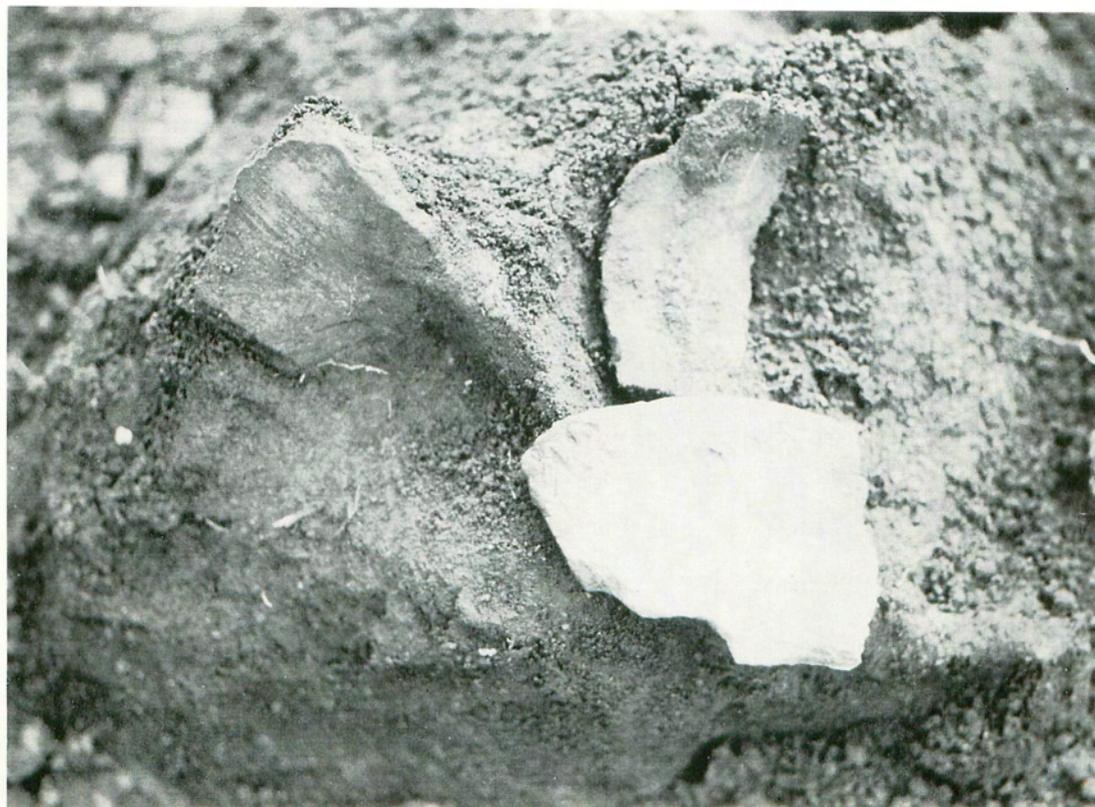
調査風景



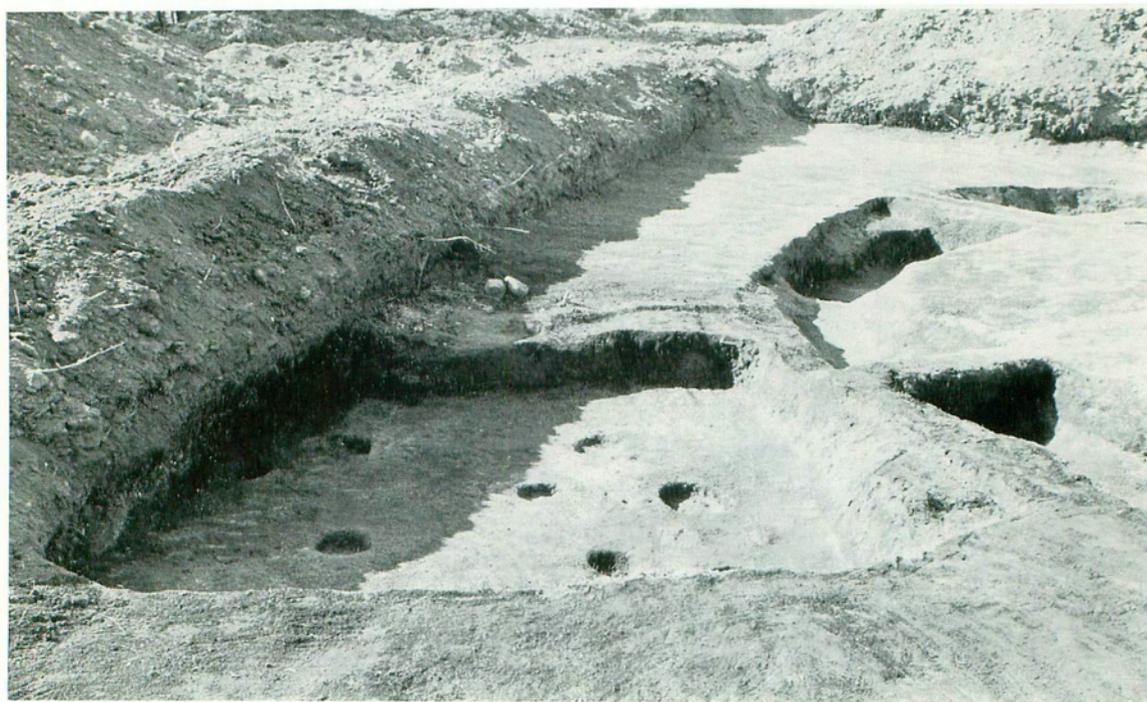
第 3 号 墳 全 景



第 3 号 填 全 景



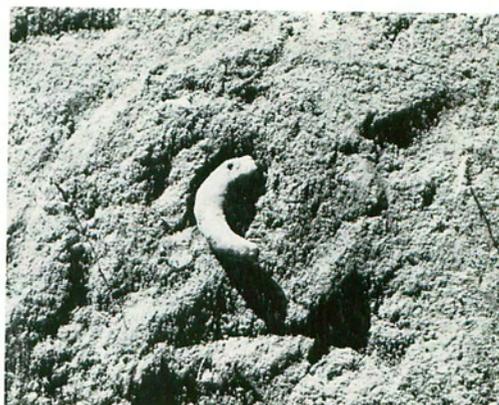
第 3 号墳周溝遺物出土狀態



第 1 号 住 居 跡

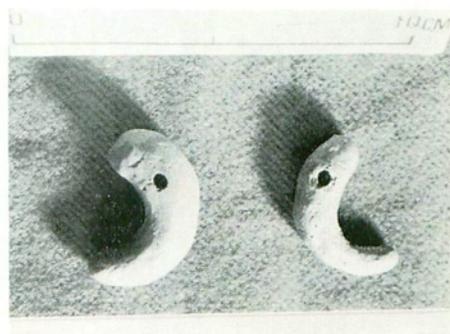
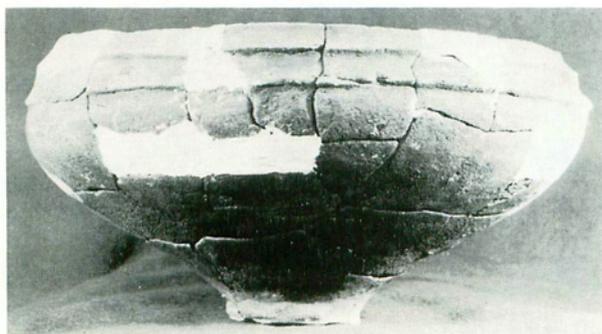


11-6

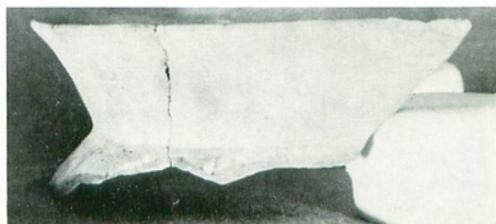


11-5

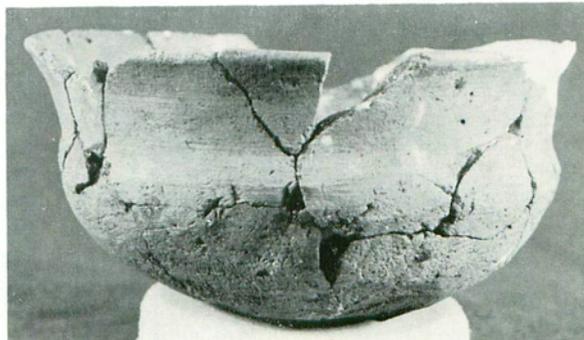
11-4



11-2



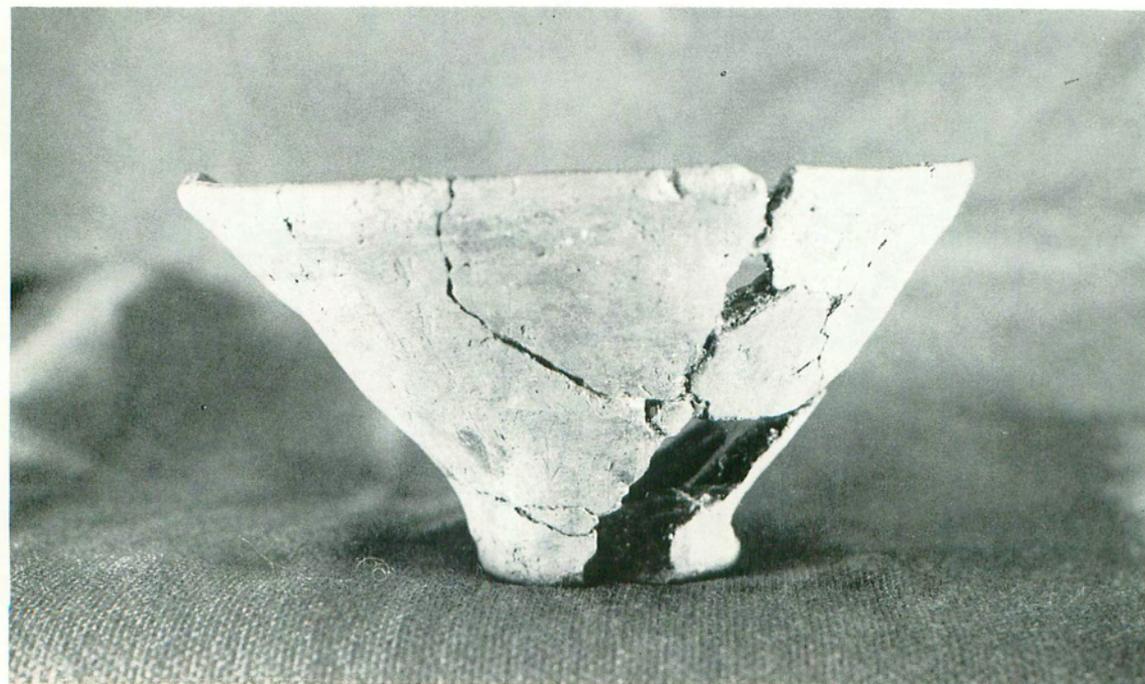
11-1



第1号住居跡 第3号墳出土遺物 (数字は実測図番号と同)



第3号墳出土土器



伝姥ヶ沢遺跡出土土器



63



64



27



姥ヶ沢第1号墳表採埴輪



59

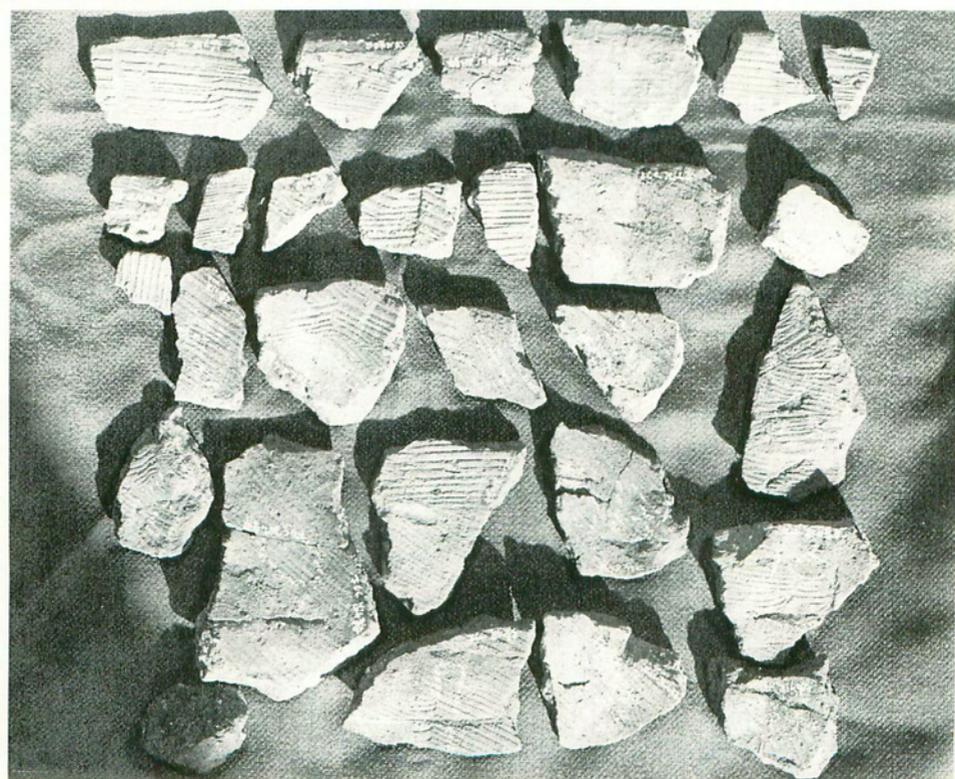
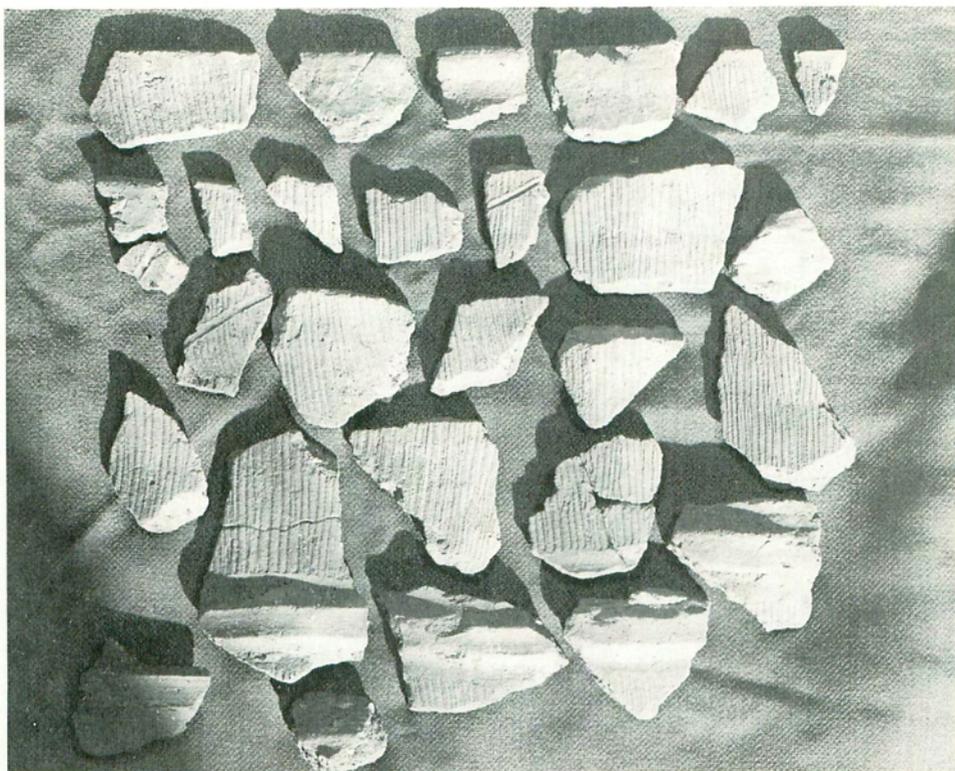


60

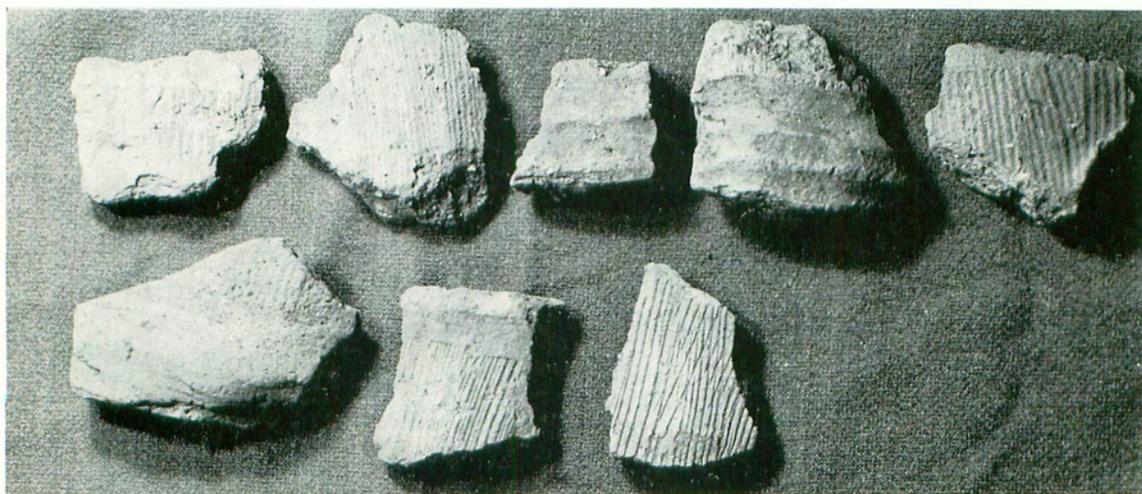
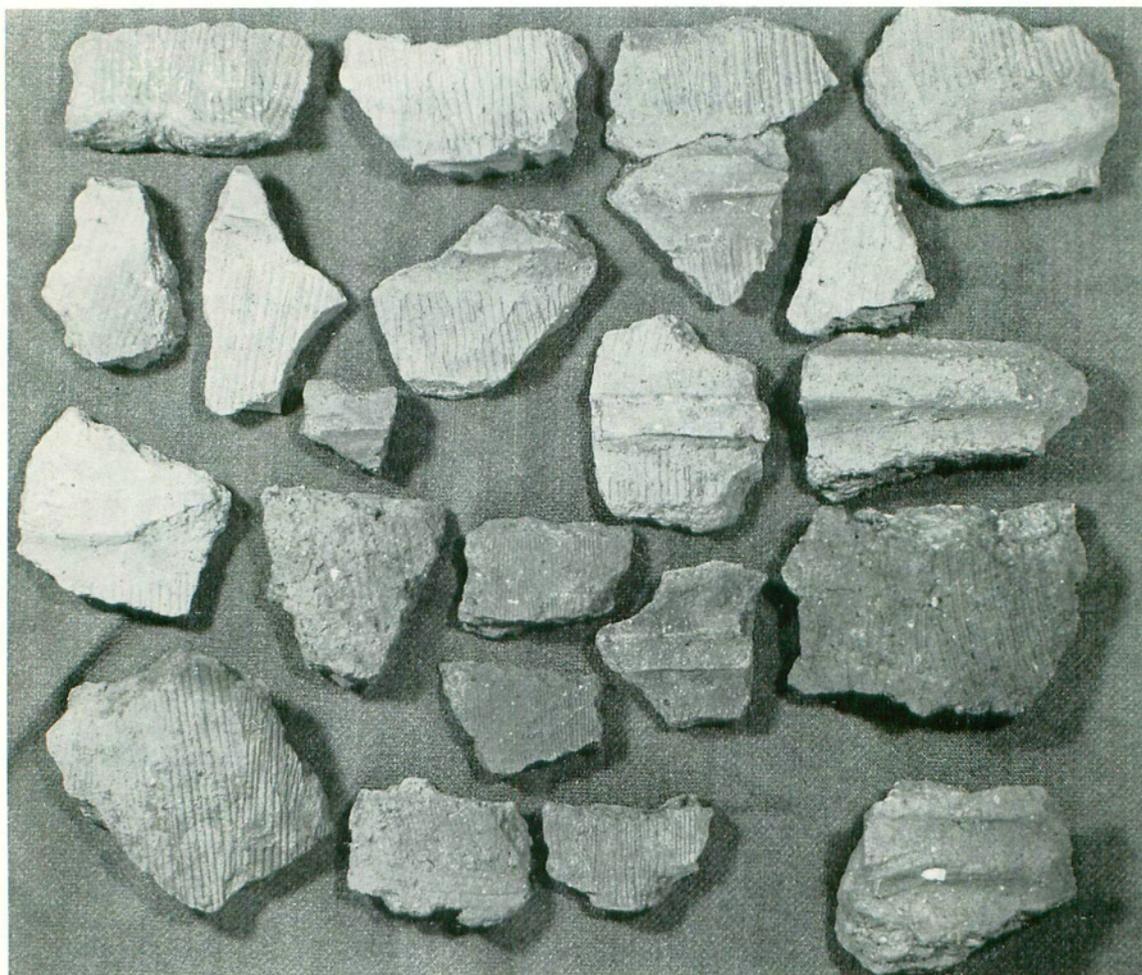


62

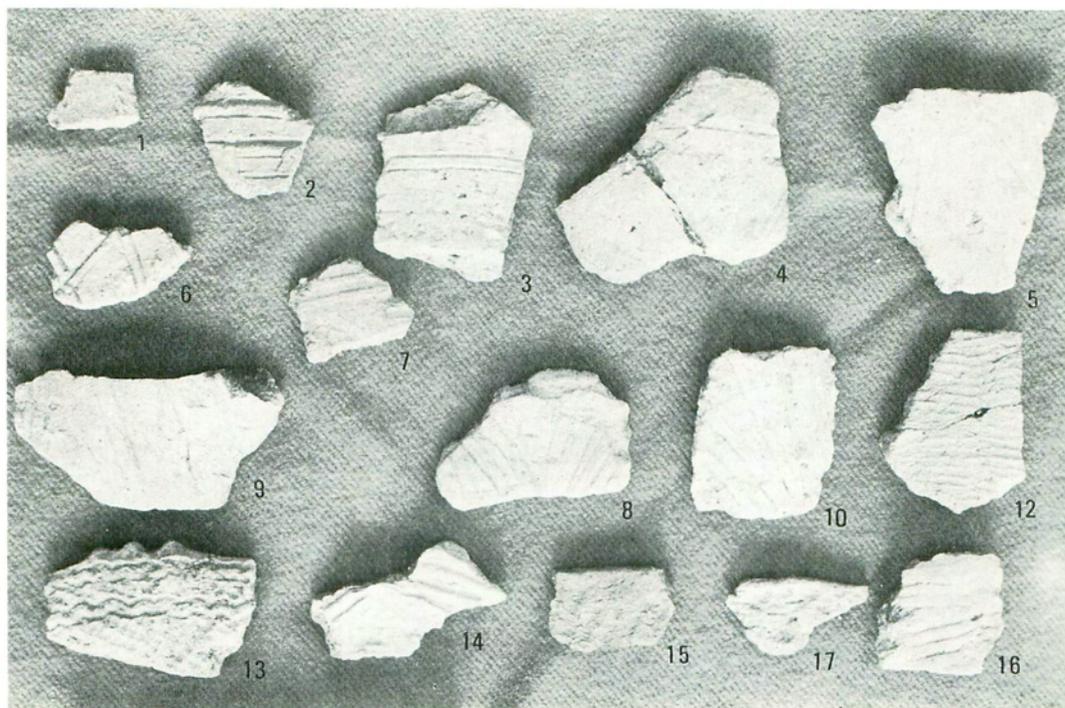
姥ヶ沢遺跡出土埴輪



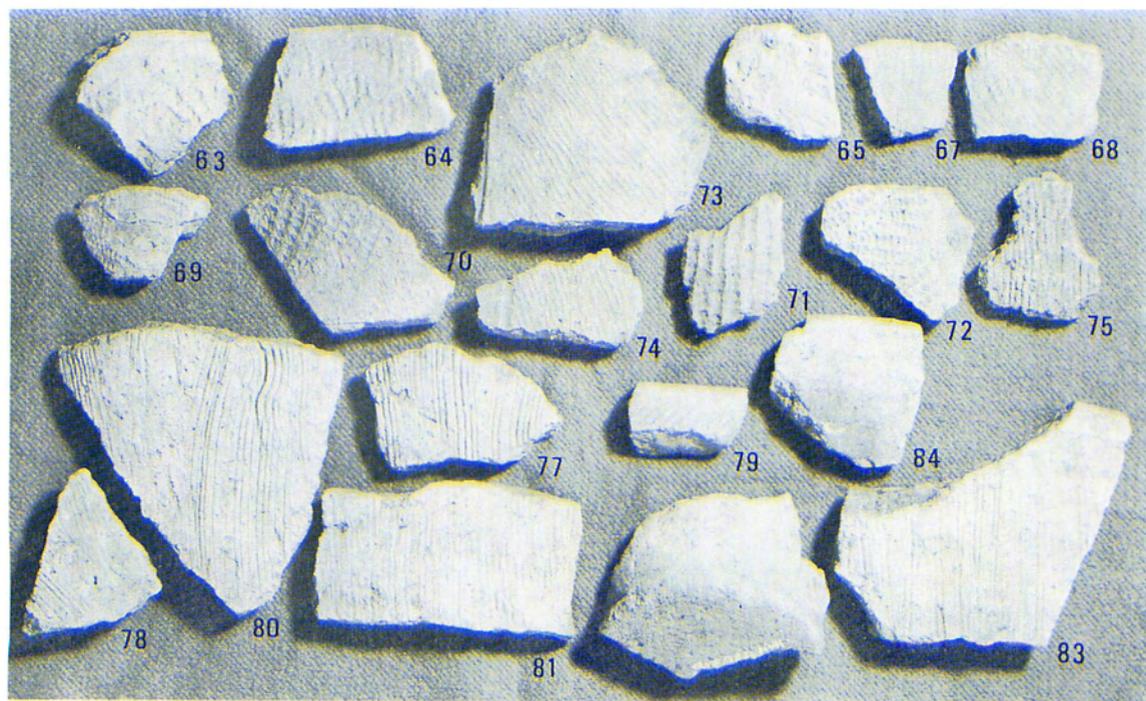
姥ヶ沢遺跡出土埴輪



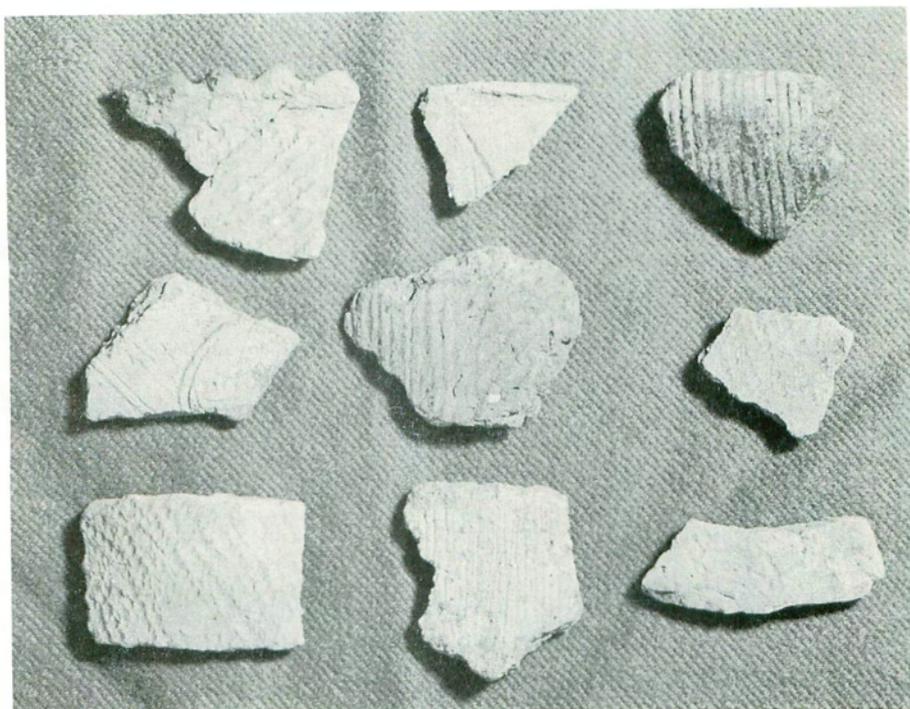
姥ヶ沢遺跡出土埴輪



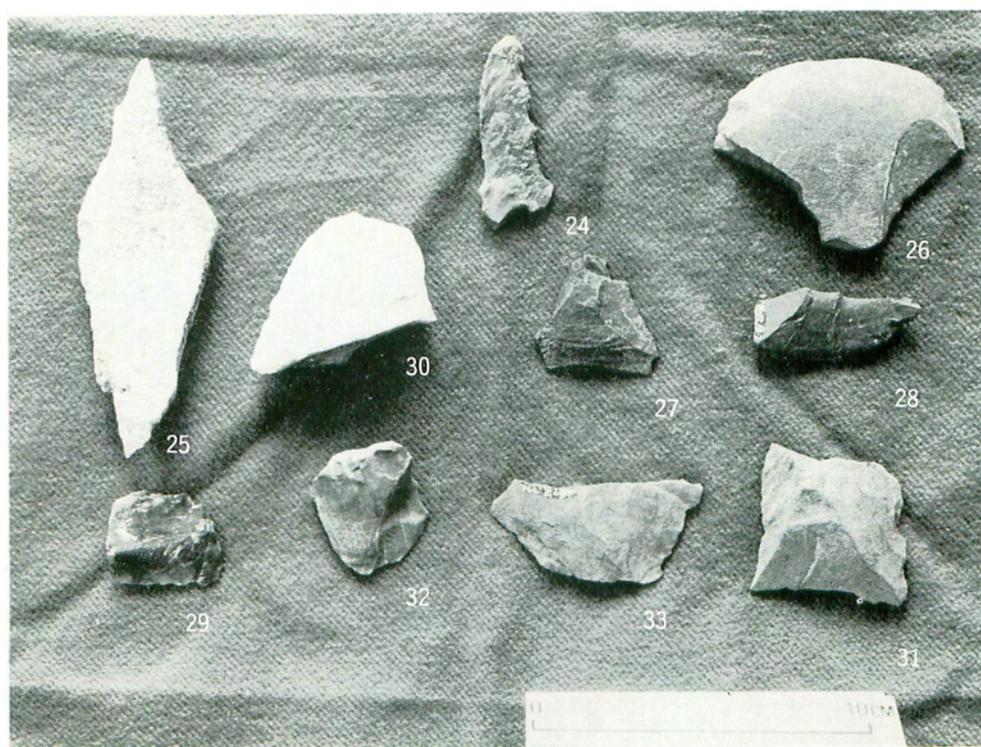
姥ヶ沢遺跡出土縄文土器



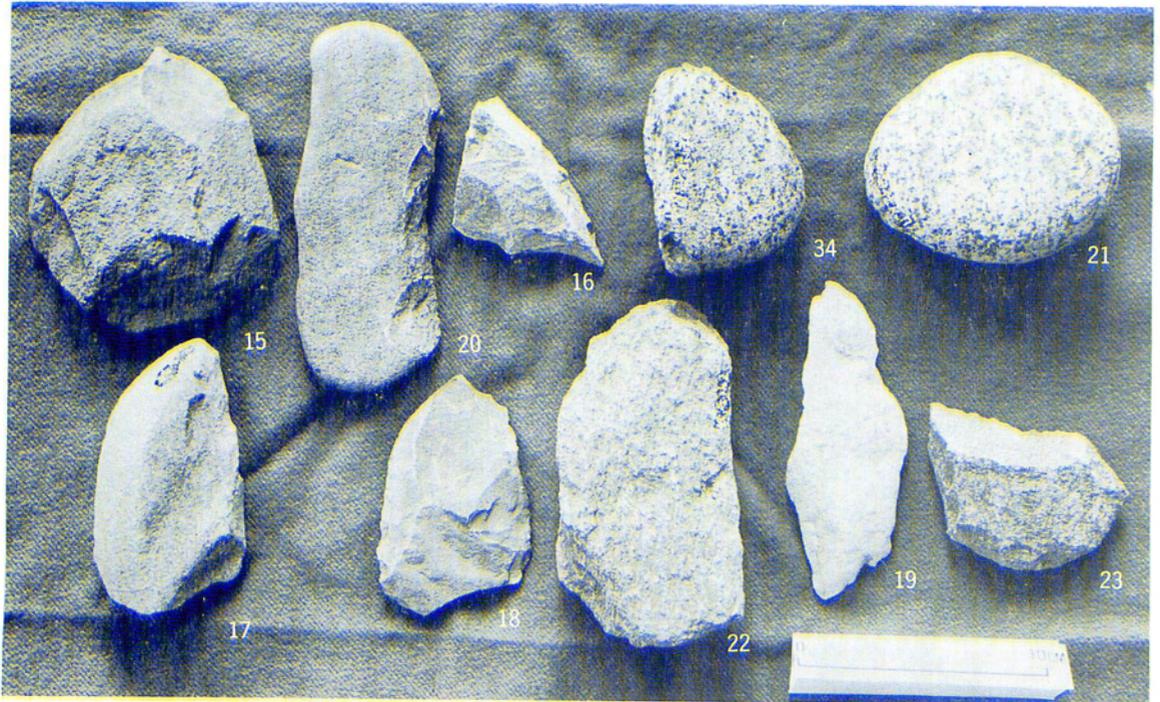
姥ヶ沢遺跡出土縄文土器



姥ヶ沢第Ⅱ地点出土縄文土器



姥ヶ沢遺跡出土石器



姥ヶ沢遺跡出土石器

昭和58年3月25日 印刷

昭和58年3月31日 発行

江南村文化財調査報告 第4集

# 姥ヶ沢遺跡 I

(姥ヶ沢遺跡 第Ⅲ地点)

編集・発行 埼玉県大里郡江南村教育委員会

印刷 アサヒ印刷株式会社